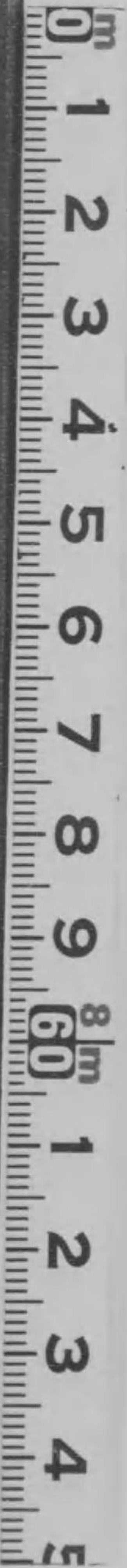


392

276

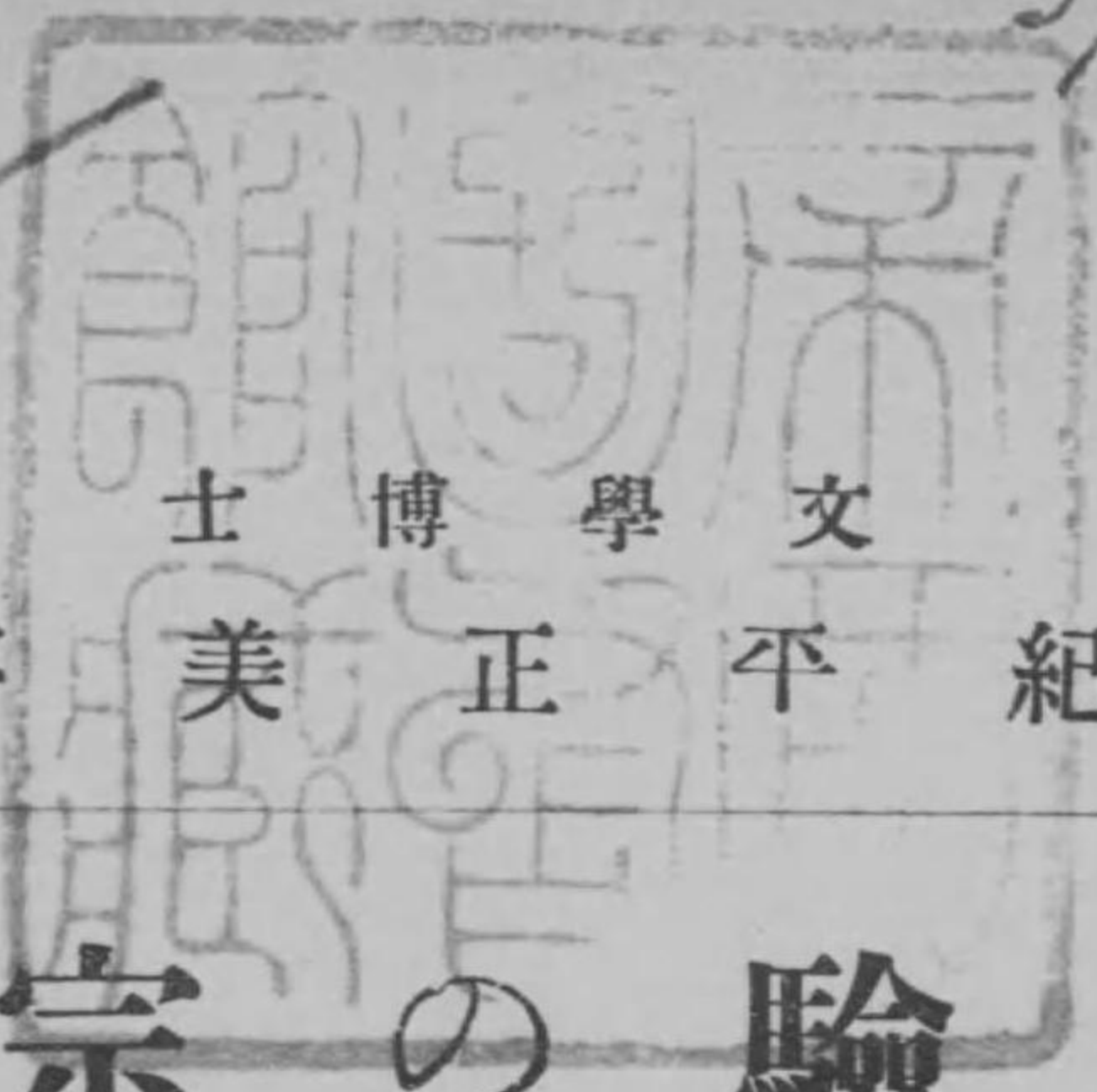


始



392-276

1989
カ



文 學 博 士
紀 平 正 美

體 驗 の 宗 教

著 夢 白 子 金



1 9 2 2

京 文 社 出 版

余は常に言ふ。大道は最も古くして凡つ常に新しきものなり。其の古しといふは人と共に生ぜりとのとにして新しといふは、絶えず自己開展を爲しつゝ人間進歩の原動力たるもの意なり。従て藝術家は教育家哲學者乃至科學者と雖も其の名に當りしものならんには、一寸觀の無限的眞意に立つといふ形式に於ては特等し、此の書を柳宗悦兄に捧ぐ。其の特異性に於ては金子白夢のもの、彼此亦決して同一はあらず。若し其の特異性に對し、彼を以て共に鑑みざる以て今を待せんとせば、藝術、宗教、哲學、乃至科學と雖も其の生命を失ひ去らざるのみ。

此の書を柳宗悦兄に捧ぐ
金子白夢

吾知金子白夢兄は其の内に立脚する人、然も其の特異的のものに對して、其の真意に對入せんとして、彼は必然的に進歩せざるべからざりしは、既に其の内に

此の書を聯宗發見の辭と

金子白夢

序

余は常に言ふ、『大道は最も古くして且つ常に新しきものなり』と。其の古しといふは人と共に生ぜりとのとにして新しといふは、絶えず自己開展を爲しつゝ人間進歩の原動力たりとの意なり。従て藝術家宗教家哲學者乃至科學者と雖眞に其の名に値ひするものならんには、『主觀の無限的眞態』に立つといふ形式に於ては皆等し、時の古今洋の東西を問はざるなり。然も其の特殊性に於ては、常に新らしかるべきもの、彼此亦決して同一にあらず。若し其の特殊性に着し、彼を以て此に臨み古を以て今を律せんとせば、藝術、宗教、哲學、乃至科學と雖皆其の生命を失ひ去らんのみ。

辱知金子白夢君は基督教に立脚する人、然も其の特殊のものに着せずして、その眞態に突入せんとして、茲に必然的に逢着せざるべからざりしは、特に東洋に開

展の路を拓きたる禪の妙機なりき。然も君は此にも亦其の特殊なるものに着せず只管に『主觀の無限的眞態』への路を開かんとす。斯く言ふ余は、這箇の論理的内容を求めんとするもの、君は直接に之を觀賞せんとす。其は君と余との特殊性の相違に基く、共に普賢の行願海に棹さんとするや一なり。

斯くて君は宗教的意識の妙機を若干の古聖より捕へ來り、織りて以て錦繡となし名けて『體驗の宗教』と云ふ。君は達識の人、行文亦實に容易にして、讀者をして這個道念の油然として湧出するを覺えしむ。是亦渾然たる一個の大詩なり。君が獲得せる世界や明かに窺知すべきなり。今茲に本書の印刷成りて將に願海に乗り入らんとするに際し、君余に囑するに序を以てす、固より其の分にあらざるが故に辭すれども君許さす。因て聊か感ずる所を記して以て餞となすなり。

東京駒込に於て

大正十一年一月

紀平正美識

自序に代へて

私は今此の書を出版するに就て一二の事を云はねばならぬ。私の宗教に對する根本態度は主觀の無限的眞態への透入である。そこから新しい生きたものを擷んで來て、それを私共の生活のなかに具體化せねばならぬと思ふ。斯ふした態度が私の宗教生活を端的に直接に宇宙實在の眞相を體驗的に把握する道を辿らしめた。而して私の進んで行つた道は「神秘」の一道であつた。私は此の神秘の一道を古今東西の宗教史のなかに見出して、古聖の踏んだ純眞な足跡を踏んで見た。

神秘の道は西の國の聖者たちの辿つた道にもあつた。私の願ひはそこに深いもの聖いもの、尊いものを見たい、味ひたい、掴みたいと思つて居る。併し此の道は東の國の聖者達の歩んだ道にも見出し得るのである。永い間多くの人々から忘られて居つた東洋の古聖のなかに——我々の祖先のなかに——私は此の尊いもの、聖いも

の深いものを見出したのである。そして彼等聖者の群から多くの心靈上の賜を恵まれたのである。此の書はその與へられた恵の一と雫を集めたものに過ぎない。

言ふまでもなく私の見るところは浅い。彼等聖者の體驗したその深い生活の奥底には徹し得ない。或は私の見たところは古人の——或は世の所謂専門家の——見たところのそれとは違つて居るかも知らない。私は當然違つて居つて差支ないと思ふ私は私獨りで私の世界を辿つたに過ぎない。私の胸に生きた古聖の辿りが私の光であつた。私は今此の書を世の所謂傳統的な書物の一つにしたくない。(勿論さうした價值はない)。私は古聖の歩んだ道が私によい光を與へてくれたことを感謝せずには居られない。我々の祖先に斯うした深い神秘な道を辿つた敬虔な數多くの群があつたと云ふことは、どれ丈け私達の力であり誇りであらう。

私は今何等の教義や宗派や傳習や約束に支配されなくて全く自由な氣分で筆を執つた。私の古聖に對する態度はそれが單なる既成宗教のそれとは全く違つた道を行

つて居る。私は斯うした行き方で西の國の聖者たちの跡をも追つて見たいと思ふ。而して其の與へられた恵みを語つて見たいと思ふ。今は唯だ東の國の古聖に對して私の心の辿りを表はして見たに過ぎない。

私の此の書は其の一二のものを除くの外は口語體を用ゐないで文語體を用ゐた。これは斯うした發想法が斯うしたものには適當であると思つたからである。

最後に私は此の書の出版に對して多大の勞を執つて下され尙懇切なる序文を書いて下された文學博士紀平正美先生に對して衷心からの感謝の意を表するものである。

「一宗の存在が只他宗の排斥によつて保たれるのは醜い事實である」(柳宗悦氏)

大正十一年一月

著者 識

體驗の宗教目次

□ 洪川の直觀思想

一 序 說	一
二 現實即生命	三
三 光耀無量	五
四 無上妙道	七
五 性珠現前	九
六 如實の風光	一一
七 無碍の一境	一四
八 其美不可言	一七
九 不立の玄	二〇

十 回也其幾乎……………二五

十一 無爲の爲……………二六

十二 久遠の現在……………二九

十三 宗教の詩趣……………三一

十四 生命の躍動……………三四

十五 感格の一線……………三八

十六 一字不説……………四〇

□趙州の無字とエツクハルトの無字……………四五

一 趙洲の無……………四五

二 エツクハルトの無……………五三

□エマルソンの神祕的思想……………五九

一 絶妙の默示……………五九

二 永遠の一如……………六四

三 自他即一の境……………七一

四 心靈の尊嚴性……………七九

五 最高者の聲―其美無量……………八三

□臨濟の宗教……………八九

一 序 説―四料簡……………八九

二 自己の真相……………一〇一

三 凡聖不二―無碍人の自由境……………一〇八

四 當體の祕密……………一一五

五 意識直接の自證……………一二二

六 純粹意識の體驗境……………一二七

七 自證の權威……………一三六

□黃檗の體驗思想

- 一 序 說……………一四五
 - 二 唯是一心……………一四五
 - 三 宇宙的意識……………一四八
 - 四 無心究竟の境地……………一五〇
 - 五 圓滿具足の自覺……………一五三
 - 六 無求無著……………一五六
 - 七 念即真……………一六〇
 - 八 唯此一事……………一六三
- 基督教の禪的思想……………一六八
- 基督の禪機……………一七一
- 一 序 說—內的經驗の象徴化……………一七一

□保羅の禪機

- 一 王者的宗教……………一九一
 - 二 最高要求……………一九三
 - 三 生活即宗教……………一九五
 - 四 情感の神……………一九八
 - 五 萬有皆淨……………二〇一
- 七 神人融會—變貌の光耀—最後の一閃……………一八五
 - 六 全人格の風光……………一八三
 - 五 心靈の純一境……………一八一
 - 四 基督の棒喝……………一七八
 - 三 野の百合花……………一七六
 - 二 曠野の基督……………一七三

六	證入の心境	二〇二
七	轉身の一境	二〇四
八	體得の風懷	二〇六
九	新人の生活	二〇九
十	『是』の人格化	二一一
十一	最勝の靈能	二一三
十二	感應道交	二一六
□禪の本領		
一	佛心印の單傳	二一八
二	那箇の一物	二二一
三	自己即眞理	二二四
□道元の宗教		
		二二七

一	序 説	二二七
二	修證一如	二三〇
三	一如の行道	二三四
四	心身脱落	二三六
五	生死即生命	二三九
六	本來の面目	二四二
七	本地の風光	二四六
八	轉大法輪	二四九
九	單傳の妙道	二五一
十	格外の逍遙	二五四
十一	相傳の嫡意	二五六
十二	安樂の法門	二五七

十三 身心一如……………二五九

十四 宇宙精神……………二六二

十五 超自他境……………二六七

✓□東洋意識の靈趣を憶ふ……………二七三

□白隱の『夜船閑話』……………二八一

□行乞生活……………二八六

體驗の宗教目次(畢)

體驗の宗教

金子白夢著



洪川の直觀思想

序 說

『禪海一瀾』は近代の名僧今北洪川老師の著述である。予は平素此の書を愛讀して居る者である。茲に此の書に對する予の内心の印象を記して其の感想の一閃光を語つて見たいと思ふ。

宗教上の深い内部の實驗の聲は之を表現する形式を絶して居る。而かもその深奥

の秘音一たび高發し來るや或は詩歌となり文章となり繪畫となり彫刻となり全人格の至深の色彩を其の作物の中にはのめかすのである。靈海狂濤の一波一瀾は必ずや其の體得色讀の一と雫となつて滴つたものでなくてはならぬ。此の『禪海一瀾』の底に隠くされたる心靈の眞珠は洪川老師の精神生活の凝つて珠となつたものと謂ふべきである。

此の書は孔門之典語三十則を抽いて之を解釋するに禪的見地を以てしたものである。夫れ禪海や洪渺無涯洋々として其の限りを見ず、而かもその深碧湛々として涵ふる所轉た入れば轉た深く到底其の奥底を測ることは不可能である。實にや禪海には『毒霧喪魂の大洋』あり『鳥飛んで渡らざるの重灘』あり。怒濤狂瀾湧噴奔騰するに當りてや人をして驚絶駭絶魂飛び眼眩せしむる所のあるものがある。洪川師は此の禪海の大觀を知らずして世の所謂『庸常下劣の輩』が認めて細瀾となし以て『禪海此に盡きたりとなす』ものあるを慨し『眞實に志を決し透過底を求むるの上士は危

亡を顧みず纜を此の間に解いて鯨波を侵し風濤を凌ぎ一一險處を歷盡して而して後に眞の大丈夫と稱すべきのみ』と云うて居る。此の洪川の氣魄を以て『先づ孔子方寸の波瀾を察し而して後ち泛く禪海の汪洋を觀じ一朝霧を開いて江海の佳氣を望む』天空快濶の大精神に觸れたいと思ふ。

(二) 現實即生命

先づ洪川師が此の書を巖府大守に献したる言に於て『眼、神、儒、佛、老を見ずして、唯、道をのみ之れ見る』と云ふ態度は洪川師の眞理に對する態度と見るべきである。教義に囚へられ制度に囚へられ宗派信條に囚へられ易き宗教の世界に於て眞個獨立自存の態度を持して唯天地永遠の眞理の前にのみ立つ。這箇にして始めて永遠の境に在りて無限其ものに觸るゝを得べきである。洪川師が多年研鑽實驗の後ち『一朝忽然として大死一番、絶後に再び蘇息し來りて、始めて大道に徹す矣』と云ふ此の一境

を透過して宗教上のこと始めて語るべきである。

夫れ天地の道は一のみ。神儒佛老も是れ唯道の一闪光に過ぎない。例へば太陽の一切の萬有を照らして其の光到らざる所なきが如く宇宙の眞理は一切を照らして居る。此の見地より見來りて洪川師は「凡そ世間一切の事物理性を離れず、理性實相を離れず實相一心を離れず。一心即ち大道也」と説破して居る。これ「法華經」の「治生産業皆與實相不相違背」と云ひ又「一切世間安民濟物是諸佛道也」と云うて居るのと辿り方を一つにして居る。現代式の言語を以て之を言へば現實そのものの中に生命に觸れんとする行き方である。現實即生命。現實に即したる生命と云つたやうな所に生の充實を體得しやうとして居るのである。現代の思想界や藝術界に於ける斯うした傾向は古聖の經驗や東方の古典中には既に早くより其の萌芽を見る事が出来たのである。

洪川師は始め儒を修めてから禪に入つたのである。禪に入つて見て始めて儒の眞相が明瞭になつたやうである。彼自ら此邊の消息を語つて曰く「能く禪を明めて而して後に儒を見る、事物の精粗到らざるなし。心性の體用明かならざるなし」と。世の多く儒よりして佛に之きしもの儒を以て低しとし唯だ佛を以て高しとするの弊に陥らざるもの稀也。洪川師の如きは儒佛打成一片して「外、仁孝忠信を施し内、無上善果を成じ」て古徳の所謂眞の大丈夫の能事を一手の中に掌握したるものと謂ふべきである。

(三) 光耀無量

凡そ宗教上の眞理の光輝に接觸して洞然として深奥幽玄なる宇宙實在の眞相に撞着せんする底の眞大夫は幾多の混迷、懷疑、不安、恐怖、孤獨、闇黒の大海に漂はぬ者はない。洪川師が身を擲ちて以て道に當るや一衣一鉢、口に投ずるものは蔬菜粗食、身に觸るゝものは熱喝噴拳。胸中時に或は快惱、或は悶絶。愈々激して衰へ

す、苦屈之を久うして『一夜定中。忽然前後際斷。入絶妙之佳境。恰如大死底。一切不覺有物我。只覺吾腔内一氣。彌滿于十方世界。光耀無量。』と云ふ。嗚呼何等驚絶の一境ぞ。『忽然として前後際斷す』と云ひ『一切物我あるを覺えず』と云ひ又『光耀無量』と云ふ。これ實に心靈大高擧大飛躍の一境と云はねばならぬ。こゝに一切は光明のみの世界である。こゝに一切は生命のみ花の如く匂うて居る境界である。此の境界に參じ此の世界に逍遙したる英靈漢のみ本來の面目を體得し得るのである。一たび此の靈覺を味うたる彼の其の言々句々そのもの既に本來面目の一言子である一句子である。

洪川師の體し得たる本來の面目たる禪の禪たる本旨何處にかある。師曰く『大法獨絶にして曠逸。妙道不變にして精微。之を概して禪と曰ふ』と。之れ達磨大士の『諸物無上の妙道曠劫行じ難し』と云ふ所のものではないか。併し古來聖者の教を垂れたる所以のものは卑きより高きに淺きより深きに至らしめ、惡を捨て善に移り

偽を去つて眞に歸し苦を除いて樂に就かしむるの切なる至情より湧き出でないものはない。此の高、此の深、此の善、此の眞、此の樂を獲得把住して而かもその至微の所に至りては『萬物に妙にして……能く性命幽明の眞理を盡くす』のである。

(四) 無上妙道

洪川師の思想は『孔老以佛而徹。佛以孔老助』と云ふにあつた。彼の見る所によれば孔老二教は智一世に通じて但だ生民を利して居るが『未だ異生に及ばず』と云つて更に『吾が佛の大乗悲智の如きは六道四生過現未に通じて皆悉く之に及び物として利せざるなく事として達せざるなし』と云つて居る。孔老二教を佛教と同じ宗教觀を以て見たる師の見方には賛同し得ない。孔老二教が異生に及ばなかつたのは孔老二教が道德を中心としたる徳教の本質から現はれて居る特色であつて寧ろ當然のことである。宗教たる佛教が六道四生過現未に亘つて居るのは佛教の本來宗教

8
たる本質より出たる特色で宗教が一切の萬有を統一しあらゆる問題を個中に解決しやうとしたる當然の結果である。洪川師が『孔、老、以、佛、而、徹』と云はれた見地には大いに味はふべき點があると同時に倫理的實踐の一面の點に於ては『佛、以、孔、老、而、助』と云ふのも兎もすれば此の方面の實踐躬行を忘れ易き汎神論の宗教の缺陷を補つたものと云はねばならぬ。而かも洪川師が佛教の汎神的色彩の方面を高調して『其の智眼の如き有象と無形と有情と悲情と其の性無一にして無二の性即ち實相なり』と云ひ更に『塵勞に住して亂れず禪定に居して寂ならず、其の物たるや不來不去不空不常、内を兼ね外を兼ね想相如々不自不生。豈に又滅あらず。眞淨明妙。卓爾として對待なきものなり。姑らく之を號けて佛と曰ふ』と説破して居る。此の宗教觀は彼の理性の中に知識として認識されたのみならず又心靈のなかに生命として織り込まれたものである。如是箇中の宗教意識に活きたる洪川師は佛の妙用を觀照して『萬物を宏濟し十方を典御し一切衆生を觀ること吾が子の如く至らざる所なし、大を論

すれば即ち宇宙の外に寬廓し、細を論すれば即ち毫釐の末に寂寥たり』と云ふ。宇宙の實在其の者を理觀の方面より觀すると共に情觀の方面よりも之を觀じて理情雙具の宗教的意識の深い要求に感應の響きを與へ更に之を實踐的方面に開展して之を行るに儒教的思想を以てし之を意志の實行の方面に顯はして居る。曰く『人の子と言へば必ず孝に依り人の臣と言へば必ず忠に依る。五常三綱の教治國平天下の道一として缺くることなし』と。師は『こは古來無上妙道と稱する所以也』と説明を加へて居る。

然り無上妙道である。一切の法は無上妙道である。此の法は轉た得て轉た棄つべき所の法である。かるが故にその益廣大にして際涯なしと謂ふべきである。此の法を體し此の道を證せんと欲する所のものは先づ『須く見性すべし』である。

9
(五) 性珠現前

禪の奥妙は見性に至りて其の究畢地に達す。達磨大士の大見識も太洞觀も唯此の見性の一著子に歸溶する。如何にしてか此の見性の境地に至るべき由來道を究むるは靜坐にあり。宋儒靜坐を勧めて曰く『人の大道の何者たるを知らざる所以のものは精神定まらざるに由る。精神定まらざる所以のものは外物來りて之を擾すに由る。故に先づ靜坐に依りて工夫を凝らし以て外物を空うす。外物空しければ便ち神定まる。神定まれば便ち性珠燦然として目前に現前す』と。性珠燦然として目前に現前する底の本地に入るこれ即ち見性三昧の本地にあらざるか。『清淨心即見神の境』と勘破したる神人クリスト基督は默禱三昧の靜坐を示して曰く『爾祈る時は嚴密なる室に入り戸を閉ぢて隠くれたるに在す爾の父に祈れ』と。儒佛耶の古來の聖者何れも共に宗教的意識の最深底に沈潜して意識精神の大コンセンストレーション集中に參じてコンテンプレション冥想の玄味を味ふことに於ては其の致を一にして居る。洪川師亦此の見性の靜坐に入つて自己本來の靈光燦として珠の如く輝く所のものを目睹した。其の實驗の聲は凝りて此の『禪

海一瀾』の暖皮肉となつたのである。

(六) 如實の風光

此の靜坐三昧に入つて大實在の暖皮肉に觸れたる洪川師は自家見證の無碍境よりして孔門の蘊奧を照破し『徳性を明にする』を以て孔門の體達したる真理の極致となし、其の『眞意は冊子上にあらす』と見『一以貫之』は謂ふ所の教外別傳の一著なりと云ふ。こゝに彼の特獨の見地を見るべく、禪的抱擁の大を見るべく禪的真理の一宗一派に超越して古今東西の大思想の潮流に棹して其の本源に溯り宇宙的永遠の生命そのもの、如實の脉搏に觸れて感應道交する所以の消息を見るべきである。現代獨逸の哲學者ルドルフ・オイケンsanschauungen der grossen Denkerは其の大著『大思想家の人生觀』(Die Lebensanschauungen der grossen Denker)に於て『我等の力を盡すべきは人生に關する思想家の思議穿鑿ではない。彼等の思想世界裏の人生其者人生の姿である』と説いて

居る。宇宙的永遠の生命其者は人格の核心に觸れてオイケンの所謂「人生其者」となり「人生の姿」となつたときにそこに光明を放つて居るのである。宗教的眞理が精神的生活のさまざまの努力により體得により色讀によりて人類永遠の使命をさまざまに解決し來る所に、聖者哲人の尊い貢献があり事業がある。此の永遠の境地に入つて時空を超越し精神界の靈妙なる交通を自覺して内部深奥の聲を聞いてこゝに「永遠の現在」を眞實に味ふ所に人生の意義があり價値がある。

洪川師は神儒佛老の各方面に於て眞理の一閃光を認め而かも其の何れの方面に於ても其の障礙のある所を見られた。神に於ては「神見淨見」の障礙を見、儒に於ては「文字禮則」の障礙を見、佛に於ては「佛見法見」の障礙を見、老に於ては「冲見虛見」の障礙を見て一一其の陋見を喝破せられたのは如何にも痛快を感ぜざるを得ない。これ禪者の禪者たる風骨にして其の見地の高邁なる仰ぐべき所である。併かも師は「唯道を學ぶのみ。道に別名なし。神儒佛老、唯是れ箇の道」と拈じ來りて

「恰も一太陽の上下四維を照臨し其の光到らざる所なきが如し」と云ふ。然り宇宙の眞理は一也。之を觀照し寫象するによりて其の色彩を異にするのみ。此に於てか達眼の士は如是一切の雲霧を排して直に眞理其のものの當體を直覺すべきである。これ洪川師が「只學者眼に知見學習の雲霧ありて或は儒見に落在し或は佛見に座在す。これ大道同異あるに非ず。眼見に障礙あるを以て也。故に神家者流は其の障礙を拂盡して之を天の原に止まると謂ひ、儒家者流は其の障礙を拂盡して之を明德を明すると謂ひ、佛家者流は其の障礙を拂盡して之を見性成佛と謂ひ、老家者流は其の障礙を拂盡して之を衆妙の門を得ると謂ふ」所以である。此の濶大の見地より見來れば「道に竇、選なく見、異端なし」と云ふ露堂々たる本地の風光を靈覺して「神に値うては神を受用し、儒に値うては儒を受用し、佛に値うては佛を受用し、隨處主と爲れば更に障礙なし」と云ふ自由自在の境に立ちて一切を如々の一如に圓現し完成して大宇宙の如實の風光を大觀すべきである。洪川師の「禪海一瀾」は其の一瀾

中に此の莊嚴の大觀に觸れ以て箇中の消息を窺ふべきである。

(七) 無碍の一境

『禪海一瀾』の上卷に於て禪觀の汎論をなし來つた洪川師は今や其の下卷に於て『明德』以下三十則の儒教の典語に就いて一々精到なる解釋を下し其禪的意義を發揮して居る。先づ第一則に於ては大學の三綱領たるどころの『大學之道在明明徳。在親民。在止至善』を擧し來りて之に對して師一流の解釋を與へて曰く『此は是れ聖學の綱領にして煉心の實法なり。而して孔門の秘訣なり。六經諸子の言山の高き海の深きが如きも悉く皆此の一著子の註脚なり』と。陸象山嘗て曰く『六經は我の註釋にして我六經を著はす』と。此の超脱高邁の見地ありて始めてよく六經の精神に通じ得るのである。今洪川師は此の大學の三綱領を提げ來つて此を以て一切儒教の骨子と觀じ煉心の實法と見て居る。由來儒教の學者多くは六經等の古典の文字

句義を訓話解釋するに急にして其の活精神を拉し來つて自家修證の活公案となすもの至て稀なり。洪川師は此の舊窠を脱出して之を以て自家煉心の實法となし更に『明德は譬へば一顆の眞珠の如し、圓明寂淨、都て差別の相なし。體明を以ての故に物に對する時能く一切の色相を現す。色自ら差別ありて珠に變易なし。其の精微深妙の理の如きは筆墨言語の及ぶべきにあらず』と云つて居る。茲に至つては儒教の明德は禪的眞理の一切を披瀝して而も儒禪不二儒即禪の境界を説破して居らるる。餘りに禪的思想を以て明德を深く解し過ぎたかの如き觀なきにはあらずと雖も而かも猶ほ抱擁的態度に立つて自家の見解の下に一切を禪化する師の面目が如何にもよく讀まるるのである。而かも其の深妙の理を體得せんと欲するの途は只それ『刻苦自得』の一道あるのみ。洪川師は此の刻苦自得の一道を辿りて儒よりして禪に之き禪よりして儒を顧みそこに未だ嘗て踏み見ざりし一種の光明に觸れて自ら驚いた様な觀がある。洪川師は此の自得法を更に擧揚激勵して曰く『凡そ學者自己本具の明

徳を明にせんと欲せば便ち先づ須く止定靜慮の法を修すべし。久々功夫純熟するときんば即ち一旦濶然として大に得る所あり矣」と。宗教的眞理に悟入體得するの途は直覺の一路を辿りて功夫純熟の機を待たねばならぬ。既に大に得て然して後ち「己に得る所を養ふて以て衆人に及ぼし衆人をして又之を明かならしむ。之を民を新にすると謂ふ。」然り自家體得の境界は其の光流れて新民の事業となり日用行事の上。に於て「明德の全光」を發揮せねばならぬ。頭上漫々脚下漫々。一切の世界はこの明德の全光となつて輝き來るのである。絶妙無碍の理想境はここに圓現せられて居る。人間の心靈上の直接體得の實感が此の境に達し來れば「富貴も淫する能はず。貧賤も移す能はず。威武も屈する能はず」と云ふ大丈夫の大覺に參じて堂々たる本來の面目を現前し來る。之を「至善に止る」と謂ふのである。洪川師の大學の三綱領に對する見解は將に移して禪海大波瀾の光景を縮寫したものと見るべきである。

(八) 其美不可言

「惟精惟一。允執其中。」儒教の大精神は此の一句の中に包まれて居る。洪川師此の句を解して曰く「言ふ心は人心即道心道心即人心無二無別にして惟精惟一也。左之右之至此妙境之を允に厥の中を執ると謂ふこれのみ」と。若しそれ眞箇見性分上の人ならば這箇の消息豈にそれ註解を待たんやである。これ實に心術を鍛鍊するの極である。之れ即ち入室自究すべき所である。

書に曰く「惟聖罔念作狂。惟狂克念作聖」と凡そ人宗教的眞理の光耀に觸れんとせば一切の迷情の本源を截斷し去りて自己本有の靈光を發揮し來らずんば見性底の本面目に參することは不可能である。たとへ聖たりと雖も此の一念に座するにあらずんば狂となる。故に洪川師釋して曰く「見性即在克念」と。「克念作聖」の一語轉じ來れば即ちこれ禪門の所謂見性成佛の要旨にあらずや。

天地の道は一に歸す。『吾道一以て之を貫く』と孔子の道破された所に古今哲人の宇宙人生に對する解釋の歸一の妙法を觀るべきではないか。何をか一と謂ふ。此に云ふ所の一は數義の一にあらず。所謂統一也^{ユニチ}渾融也。一如也^{ユニチ}玄々也。それ道の體たる甚だ言い難し其の用たる亦測られず。故に強いて名づけて之を『一』と謂ふのである。これ宇宙遍在の統一原理である一切萬法の本源である。今、洪川師は『一これ何物ぞ四大に非ず五蘊に非ず歴然として、爾の鼻孔裏に現在す』と云ふ。何等の好句ぞ。爾の鼻孔裏に現在する天地普遍の第一原理を見る能はずんば爾は永遠に真理の何物たるかを知る能はざるのである。古聖が『神は汝の汝に於けるよりも汝に近し』と唱破したるもの箇の消息を語つて居るではないか。『道は汝に近く汝の口にあり汝の心にあり』と云ふも此の消息を漏らすに過ぎない。大雄は一音を以て法を演べ伯陽は一を抱いて以て天下の式となし、今孔子は一貫の道を宣じて以て自己の立脚地を明かにす。基督は『神と我とは一也』との自覺に立て宇宙的真理を自己内部の生

活のうちに體得せられた。『參乎。吾道一以貫之。參曰唯』と宋儒此の『一唯』を釋して曰く『應の速にして疑無きの謂ひ』と。然り此の『一』と此の『唯』との間髪を容れざる所啐啄同時感應妙融の趣きがあつて茲にも宗教的道交の一閃光が輝いて居る。洪川師其實験を自白して曰く『山野是れより先き疑ひを此に蕪へて年あり。三十一歳の時這の妙處に徹見して始めて曾參腕頭拔山の力あることを識得して歡喜禁せず飲食の味を知らざること累日』と。真理の純味に逢うて飲食の味を忘るるものにあらずんば曷ぞよく法界の聖者たるに適せんや。洪川師が此の歡喜無上の實驗は彼の人格の内容に新らしき色彩を加へずんば已まざる所のものがあつたに相違ない。聖賢の機言寔に之れ一語千金たる所以である。洪川師は後ち門人の問ひに對して輒ち只『忠恕のみ』と答へたと云つて居る。『彼云此云。一放一收其美不可言』例へば『芙蓉面の如く柳眉の如し』と云ふべきである。宗教的感應の妙味は此の『一唯』の一語のうちに隅なく發露せられたりと云ふべきである。

(九) 不立の立

洪川師は曾參を以て顔回歿後の第一人と見更に曾參が疾あるに際し門弟子を召して『予が足を啓け予が手を啓け』と言へる生死代謝の刹那に於ける警示に對して死の岸頭に於て『此の妙密の伎倆あり』と嘆じ『古往今來縫掖門中一人を見る』と贊じて居る。然り此の際に於ける曾參の舉動を以て單に毀傷を免かるゝの故を以て曾參を見るは餘りに偏見と見ねばならない。『未だ曾參を盡さざる在り』と云ふ洪川師の着眼は確に一等地を抜いて居るものと見るべきである。身體髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざるは孝の原めなりと雖も曾參たらんもの豈に毀傷の一事にのみ没頭せんや。彼が胸中別に無限の春ありて聖光はのかに照る所のものありて存じたことは疑ひないのである。

それ人生の歸趣は道の體得にある。此の道たるや人事の諸相に顯はれ來りて人間生活其のものと須臾も離るべからざる必然的の活ける關係を有して居る。道の道たる所以の生命は内部深奥の神秘なる脈搏に觸れて本有の光明を發揮するにあり。故に君子は其の睹ざる所を戒慎し其の聞かざる所を恐懼する。師は此の『隠くれたるより見はるるはなく微なるより顯なるはなし』と云ふ聖句を提げ來りて曰く『學者苟も孔子の徒たらんと欲せば先づ須らく此の語によりて強いて精彩を著けて己に反りて觀照すべし』と。然り此の一句觀照し來り觀照し去り歲月の久しきを積みて念々退かすんば『則ち忽然として妙訣に契當す』るものがあるであらう。此の境に參じて『不立の立不妙の妙』を自得し來らば、入徳の要旨は此の一著子に盡くと云ふべきである。

至大至剛にして天地の間に塞がる所の孟子の所謂『浩然の氣』なるものはこれ即ち宇宙の大精神ではないか。此の大精神に逢着して靈界の大光景を仰ぎ見る所に宗教の眞面目が發露されて居るのである。而かも此の浩然の氣たるや天地の最も深き

神秘にして無隠にして而かも永遠の秘密なり。蓋し大道は至簡にして至近である。之を知る實に尋常茶飯の事である。而かも此の非高明非幽遠なるものほど高明なるものはなく幽遠なるものはない。詩聖ゲエテが『公開の秘密』と云つたのが之である。一切萬人の前に秘密である。無隠にして現前せる此の天地の眞理は孔夫子の所謂『吾爾に隠くすことなし』と云はれたものである。眞理の世界は隠にして顯。顯にして隱である。顯中に隱を觀じ隱中に顯を觀する所に此の眞理を洞見するの明がある、ここに本原に通徹するの味がある。洪川師此の無隠の一則に觸れて『實の如く力を盡し實の如く徹見せば寶珍を收得するものと謂つべし學者若し大志を發し懈らずんば則ち亦必ず孔門の寶珍を收得するの時節あらん。吾も亦爾に隠すなし』と云ふ。あゝ此の無隠を自得して露堂々たる本地に立つもの果して幾干ぞ。

(十) 回也其幾乎

儒教の奥底は至仁にあり至誠にあり至道にある。此の至仁至誠至道。名を異にして其の内容相同じ。而かもその體たるやこれ皆虚を以て其の眞髓とす。既に虚なり故に流行して永へに息む時なし。流行して息まず故にその内容常に充實す。流轉の姿は充實の姿なり。現代語を以て之を謂へば刹那的創造的進化は生の永遠の流轉の姿也。ベルグソンの哲學觀が『流るる時』^{タイムフローイング}の姿の中に刹那／＼の創造を見るが如きは即ちそれである。孔子曰く『回也其幾乎。屢空』と。これ顔回の自得得道せられたる精神生活の内部生命の情調を説破したるものにして形而上學的に之を見るべきにあらずと雖も、而も人格の圓滿なる充實の氣分は宇宙的感情と互に相融合する所のものがなくてはならぬ。洪川師は此の回の屢空しき境界を讚美して『實にして虚、虚にして實、天地の間を照して遺すことなく、六合に彌綸して缺くことなし。其の明妙誠にして思議すべからず』と云ふ。何たる幽遠なる莊嚴境ぞ。聖之を得れば以て聖たるべし。佛之を得れば以て佛たるべし。茲に至りては時空を超越し永遠の

靈境に立つて大神秘の生命に溶化し『死は生也大自然は我心の一波一浪也』と直感し來て最勝智を自覺して宇宙の帝王的自覺に參ずるを得るのである。孔子此の道を顔回に傳へ回之を拳々服應して其の証脈を葆有し以て屢空しき境に立つて猶ほ悠々三昧の樂天地に逍遙せられたのである。洪川師は此の一境を心讀して『至誠虛明の理を體究して中心妄情なし』と云つて居る。これ達磨大士の謂ふ所の『大道は虚懷を本と爲し不著を宗と爲す』と云ふ赤裸々の風光を指して云ふのではないか。世或は顔回の空しきを以て生活状態の貧苦に對して自ら安じたるものとなす。あゝ豈然らんや、若しそれ單に斯くの如くんば孔子の嘆美豈にそれ斯くの如くなるを得んや。『屢空し』かるが故に顔回は靈界の高士たるを價するにあらずや。深く精神生活の活躍せる内部生命に接して此の消息を讀むべきである。

予幼より論語を讀み『子曰朝聞道夕死可矣』の章に至る毎に常に卷を掩ふて其の脱然として高き孔夫子の人格の偉なるに驚かざるを得なかつたのである。孔夫子の

千言萬語詮じ來れば道の一字に歸す。而も此の道を體得するこれ實に至難中の至難である。これ實に學者放身捨命の最難關である。此の難透の一句を透過し得ん乎死も亦可也との覺悟精神の奥底深き所に茫然として流れ來るはこれ道に志すものの常に感ずる所である。抑も道とは何ぞや。これ天地の大生命にあらずや。此の大生命を擲んで自得無碍の正覺に坐して見性靈覺の醍醐味を味ひ來れば單に死も亦可也と云ふべきのみにあらず。茲既に超死的の境界ではないか。永遠より永遠へ辿る一路は此の現在の大意識中に開けつつあるのではないか。不死也超死也久遠也無量壽也。ここ死も亦その儘にして生にあらずや。生死一如の境界はここに其の圓かなる姿を顯はして居る。此の境地に達せんが爲には一切を放擲して起たざるべからず。洪川師は此の這箇得道の大精神を舉揚して『かるが故に大道を學せんと欲する者は先づ須く這の本則に據りて大疑情を起すべし。但只大道何物たるかを疑著せよ。厓し來り厓し去り厓すべき所なきに至りて之を放身捨命大死一番の時節と謂ふ。茲に至つ

て更に鬪骸に鞭ち勇猛向前蔀地に碍膈物を擊碎す。則ち一團の大疑咒頓に斃却す。便ち萬劫千生放失の大道を捉得し始めて夕に死するも可なるを知る」と。此の絶後再蘇底の時節に至りては既に『死するも可也』に非ずして『朝に道を聞けば直下死なし』と云ふべき所である。禪の本旨も儒の極致も此に至りては互に相吻合して其の美味正に侯鯖に過る所のあると謂ふべきである。

(十一) 無爲の爲

『見』の一字。宗教の奥妙は此の『見』の一字の中に讀むべきものである。神は此の宇宙に於て讀むべきものだと云ふも要するに此の『見』の深い見方を云つて居るに過ぎない。眞に經驗する世界と云ひ、直に體得する世界と云ふも此の『見』の一路を辿りて蔀地に本來のものを直觀する境界を指して謂ふのである。『見』は『信』の最奥の閃めきである。『見』は竟に信に歸著し信の尖光微なるもの之を『見』と云ふの

である。ラスキンが『人生一切の最大事業は「見」の一義にあり』と説破せられたのは深い意味を現はして居ると云つてよい。中庸に謂ふ所の『不見而章』の一句は『見』の最も深き所頓て之れ不見にして而かも最も章かなることを暗示して居るものである。洪川師之を體得して曰く『不見の見、彰かなること焉より大なるはなし』と。ああこれ本來の面目を直視し其の風光を徹見したる者の言にあらずして何ぞ。由來禪の極致は『見性成佛』の一義にありて存す。見性本來これ何物ぞ。見るこして見るべきものなく、見ずして最も深き所を見る。秘也玄也。最も神にして最幽。而かも此の境最も現にして最も實。純也簡也。見即不見。不見即見の妙諦を把住するものにして有即無、無即有の此の靈味を識得すべきである。平等の雲に入りては一切は無の汎神境。差別の林を分けては一切は有の一神境。汎にして一。一にして汎。圓明純靈。物々皆遊び、物皆觀る此の意識界裡の見性三昧に面々相接し相語りて天地萬有の眞實相、始めてこゝに其の姿の微笑を味ふべきである。これ即ち『不動に

して變』の境界にあらずや。ヘフデングの『不變の神は即ち變化の神也』と謂ふ所のものにあらざるか。

刹那々々の變化の流れは此の不變不動の姿を呈して時々刻々宇宙の胸に自己創造の姿を刻みつゝあるではないか。ベルグソンの『變化哲學』もこゝに其の意味を語つて居るではないか。洪川師之を釋して曰く『不動の動、變之れより大なるはなし』と何等達眼の徹底語ぞ。吾等は『動』の哲學に目覺め來りて洪川師の此の見識に接す。驚かざるを得ないのである。不變の變。不動の動。宇宙は斯くの如き矛盾の永遠的法則によりて活動しつゝある。向上發展生々不息の創造力は一切の中に自我實現の生の力として自己を啓示しつゝある。これ即ち謂ふ所の『無爲にして生ずる』所のものにあらずや。洪川師釋して曰く『無爲の爲、成之より大なるはなし』と。あゝこれ現代の最新思想を最もよく道破したるものではないか。『成』の哲學。之れ現代の要求する思想界の聲ではないか。ゲエテが其の傑作『ファウスト』に於てへ

プライの聖書に現はれたる約翰傳第一章第一節の『太初に道あり』^{はじまり}“Im Anfang war das Wort.”の一句を翻譯して『太初に行あり』^{こゝは}“Im Anfang war die That.”となしてより以來ゼームスの『プラグマティズム』オイケンオイクンの『精神哲學』若しくはベルグソンの『變化哲學』に至る迄。哲學界の思潮は『行』の哲學。『成』の哲學と云ふべきにあらずや。健行不彊生々潑々の宇宙生命は不斷の『動』若くは生の力として現はれつゝあるのである。古聖が此の天地の大生命を道破して『默而成之』と云ひ更に『變化の道を知る者は即ち神の爲す所を知る』と云つたのは此の靈妙の消息を漏らして居ると謂ふべきである。

(十二) 久遠の現在

孟子は『其の心を盡す者は其の性を知る、其の性を盡す者は則ち天を知る』と謂ふて居る。一木一草各其の性を盡して光々塵々無碍の一道を辿りつゝある。柳は暗

くして而かも其の性を盡し、花は紅にして而かも其の性を盡し、各自家の光明を宣揚して居ると云ふべきである。星の光、水の流れ、何れか其の本性の流露ならざる。一切は自家本性顯現の世界である。物其の性を盡すと云ふ所に自己啓示の眞面目がある。宇宙は神の自己啓示の姿である。人間は宇宙意識の發露である。宇宙最深の意識は靈的音律^{リズム}を奏しつゝ一切を創造しつゝある。これ即ち久遠生の顯現である。意識は意識を生み、自我は自我を創造す。『神より神へ』『我より我へ』。宇宙の一切は生と死との二つの道を透して微妙なる音樂の調につれて此の道を分け入るのである。野花一輪の梢頭に宿る一滴の白露。あゝこれ本來實在其ものが己が姿を分明に描き出したる盡性の風光にあらずや。湛然として涵へたる此の『現在』の大實在の海原には妙有真空圓明寂淨の實相さながらの趣を見るべきではないか。洪川師此の風光を唱して之を『亘古常現在』の姿と謂ふ。深き實在の詩ではないか。久遠生の常現在[○]は顯現にして其儘露堂々の境。玲瓏無碍の境と云ふべきである。こゝに創造は即ち自現也。宇宙の實在者は自觀の自我也。

一木一草其の儘が神の姿にしてやがて自我の姿である。唯佛與佛と云ふ境界に參じてのみ此の邊の消息に悟入し得べきである。洪川師はこゝに『見性則得天』と云ふ。古聖が此の境に參じ『天地万有は我手にあり』と唱破したるもの此玄旨を了したるものと云ふべきである。見を以て性を觀じ性を觀じて天を得る。天を得るは即ち盡十方無碍光如來を得たのである。

(十三) 宗教の詩趣

靈界の消息は要するに趣味の消息である。宗教の味ひは靈界の趣味に溶け入ることである。靈上の趣味なくして宗教を單に理智の一面にのみ見若しくは道德の一面にのみ見るものには所詮此の無邊の風光、不盡乾坤の情趣に透徹すること不可能である。吾吾人を以て之を見れば理智一面の哲學も倫理一面の道德も其の本來の姿に

入ては皆これ無限微妙なる靈的趣味の一斷片に過ぎぬ、一滴露に外ならぬのである。哲學の藝術化と云ひ道德の藝術化と云ひ更に一切天地人生の藝術化と云ふ凡てこれ趣味の一眞諦に詮じ來りて『味ひ』の天地に於て實在の風光を觀すべきを言ひ表はしたものにあらずして何ぞ。吾人を以て之を見れば宗教は趣味の趣味、藝術の藝術。宇宙間に於ける最高の趣味最深の藝術である。宗教の外に眞の意味の藝術もなく眞の意味の趣味もない。一切の趣味一切の藝術徹底し來れば唯これ一の『宗教』の二字に歸するのである。

吾等は常に此の見地に立て宗教を見る。宗教は大なる風流である。世の凡眼者流は宗教を以て偏狹固陋の化石的宗義となし、『大詩魂の風流三昧の奥龕には永へに嚴肅なる實在の不斷の燈を點するあつてその一刀一筆は直に一跪一禮たる沈痛の消息ある』を知らないのである。かるが故に其の宗教を見るや常に巧利主義の偏見に落ち宗教家を目して所謂世の事務家ビズネスマンの一種となす迷へるも又甚しきものである。宗教

の眞面目は巧利以上である。宗教家の眞骨頭は事務家以上である。否宇宙の大風流に參じてこゝに不盡の靈味を直覺す。あゝこれ眞の宗教家の本分ではないか。我常に論語を讀みて孔夫子の大風流に參じ其の温かなる懷に抱かるゝ毎に世の所謂道學者を以て目する所の孔子その人の風丰と予の見る所の孔夫子のそれとは全く其の趣を異にするものがあつて存するのである。『暮春には春服既に成り冠者五六人童子六七八人沂に浴し舞雩に風して詠じて歸らん』とこの曹參の大風流三昧に對して孔子喟然として嘆じて曰く『吾は點に與せん』と。あゝ何等高雅の一境ぞ。此の一境に透徹し來る者にあらざれば宗教のこと以て共に語るべからずである。洪川師此の一境を讚じて曰く『孔門亦這の佳境あり。吾が門這の妙境ありと雖も透徹する者多く得難し。按ずるに曾點は狂者也。三子の志を言ふに臨み故に聞かざるもの、如し。徐ろに瑟を舍いて起ち突然として答ふ。其の言善く形容して孔子の境涯に偶中す。故に孔子與同の歎辭あり』と。聖者の胸は聖者の胸と互に相默契す。感應道交の眞

理は深き沈黙の中に其の光を放つ。不斷の一燈をかゝげ來つて靈界の風光を觀す。誰れか其の妙趣に驚かざる者ぞ。孔夫子の見たる此の風流三昧の一境と曹參の見たる此の風流三昧の一境とは啐喙同時の音樂をかなでて躍如として脈々相觸るゝものあり。洪川一喝して曰く『作麼生か是れ孔子の境界』と。『若し這の妙境に合せんと欲せば先づ須く吾が門難透向上の說話を歷盡して腕頭力を得るに依りて然して後ち始めて些子に相應するものあるべし』と。然り難透向上の一句也。此の一句を透過し得て孔子の宗教觀始めて見るべきである。洪川師が腕頭力を得るに至りてと云ふ所のもの眞に其の核心を勘破せるものと云ふべきである。

(十四) 生命の躍動

私に思ふ。「中庸」は儒教聖典中の聖典である。殊に「中庸」の劈頭第一の聖句『天の命之を性と謂ふ。性に率ふ之を道と謂ふ。道を修むる之を教と謂ふ』の一句

ほど宗教的氣分に富める句は他に見出し難いと思ふ。此の一句は儒教の中心思想にして全儒教思想中の白眉と見るべきである。核心と云ふべきである。朱子之を註して曰く『性は即ち理なり。天陰陽五行を以て、萬物を化生し、氣以て形を成し理亦賦す。……是に於て人物の生各々其の賦する所の理に因りて健順五常の徳となす』と。而して又更に曰く『人物各其の性の自然に循へば即ち其の日用事物の間各當に行ふべきの路あらざるなし』と。『性は萬物を化生し』と云ひ『其の性の自然に循ふ』と云ふ。何れかこれ宇宙コスモカル、コンシヤスネス的意識の靈動として生命それ自身の潑瀾たる光耀と見るべきではないか。『エラン、ヴァイタル』(生命躍進)を説破しつゝある現代哲學者の活公案は、茲にも提唱せられつゝあるのである。

由來此の宇宙、此人生、一切は生命の發露ではないか。流れて月日星辰となり凝りて大地山河となり。花と匂ひ。鳥と飛ぶ。何れか宇宙的生命の『性』それ自らの自爾の妙動靈顯にあらざる。性は即ち生也。物それ自爾(チング、アン、ジツヒ)

の本性は生命それ自身にあらずして何ぞ。此の『性』と融化する所之れ即ち『道』である。道と性とは本来同根異名である。其の生々潑潑たる『性』の如々の境地を體得し來りて之を吾人日常の生活に實現す。これ即ち謂ふ所の道德也倫理也。洪川師釋して曰く『性は道の體なり。道は性の名なり。自然名實相持して流行す。之を性に率ふと謂ふ。其の物たるや、虚にして靈、寂にして妙。萬物の爲めに味せられず。物々總て無妄なり』と。此の虚靈寂妙の實在。之を『一物』と云ふ語既に第二第三に落つ。強て名づけて之を『性』と謂ふのみ。全真全美全善全聖の實體。名詮を絶し文字を空す。古聖之を身に體得して以て道に入り、吾人之を色讀して以て自得の境に遊ぶことを得る。而かも之を批し之を議するや箭既に新羅を過ぐ。魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。歷々分明露堂々たる本地の風光は魚行いて魚に似たり鳥飛んで鳥の如しと云ふ外に言ふべき言葉がない。こゝ即ち漢來れば漢現じ胡來れば胡現すとも云ふべき境にして這箇の一境は常に獨り遊ぶべきの地である。之を現

代的思想語に譯し來れば生命の直覺は實在それ自身の體驗也。然りそれ自身の如實の實在の體驗也とでも謂ふべきか。宇宙的生命の如實の如是境は『直覺』の一路を分け上るの外に未だ此に到達すべきの途を見出し得ないのである。これ洪川師が此の『性』の如實相を説破して『蓋し性の物たる之を論するときは即ち皆死物となる』と高唱したる所以ではないか。唯この一精明の性。之を自知するの道自得の一道に在り。他は死物のみと見たる洪川師の先見は現代思想と正に吻合する所のものがあるではないか。

更に洪川師は此の『性』の妙動靈用を舉示して『天地這の善性なくんば以て天地たんに足らず。日月風露這の善性なくんば以て日月風露たんに足らず。草木瓦礫這の善性なくんば以て草木瓦礫たんに足らず』と云ふ。茲に師は宇宙性善説を説き來りて『況んや血氣ある者に於てをや』と云ふ。宇宙の向上的發展の進化法を見來りて人間意識の頂點に達す。私かに思ふに此の洪川師の思想は汎神的佛教觀よりして

更に意識的内在神論に轉化し來りたるものにはあらざるか。『自得』の一道は「一飽克く萬劫の飢を療す」と云ふ句は此の徹底したる思想の過程にも適用して人格的宇宙觀の點睛となすべきではあるまいか。

(十五) 感格の一線

『大學』に曰く「知を致すことは物格るに在り。物格て而して後に知至る」との此の一句これまた現代思想を以て之を解釋し得べし。謂ふ所の「格る」とはこれ即ち『感格』の謂である。感格とは現象の背景たる實在境に靈覺を以て證入するの謂である。約翰傳十六章の「彼即ち真理の靈の來らんとき爾曹を導きて凡ての真理を知らしむべし」と云ふ徹底語と相似通ふ所のものがある。茲に「凡ての真理を知らしむべし」との原文の意味は「全真理の世界に於て我を真理そのものに紹介すべし」との義である。即ち大宇宙的真理の生命一たび吾人の心靈に閃き來つて天來の

インスピレーションに打たるるや彼即ち真理の靈は吾人の心靈を對象の真相なる實在の世界に導き至りて全真理の當體そのものを吾人に啓示すべしとの意味である。ここ即ち直入の境也。證悟の地也。透徹の意識にして又達觀の意識である。所詮真理の眞理たるあるが儘の姿は如是にして始めて之を見るべきである。「格る」とは直覺の新たなる心生活過程の直接經驗を指して云ふのである。直接經驗然り此の感格てふ直接經驗の外吾人に取りては對象の世界に之くべき道はない。精神生活は此の『感格』てふ一線を辿りて自己獨特の世界を建設する。これが眞の意味に於ける『自己』の世界であり所有である。茲に吾人は自己獨特の活動と價值とを得て新實在を創造するのである。眞生活の無限性は此くの如くにして始めて觸るることを得るのである。これ洪川師が『箇の一節目孔門入室の重關也』と云ひ更に「格物とは天下衆物の理自然感格して目前に現前するを謂ふ」と云ふ所以にして此の現前底の境界に入りて性智自然に發致し來らん乎。宇宙の本來的靈智の光明に接するを得るのである。

洪川師は『明德を明にするを以て根本眞智となし格物致知を以て後得妙智となし』
 て居る。格物は即ち明德を明かにするより來る。『明德と格物。』此の兩者はこれを
 宗教語に翻譯し來れば『信仰と靈覺』とも云ふべきである。『信じて知る』と云ふ宗
 教的眞理の眞諦移して以て此明德と格物との關係を解釋するに用ゆべきである。若
 しそれ眞箇功夫を打するの漢ありて純一無雜に念々不退に住して實參體究し來らん
 か。『明德格物同時證得』する純熟の境に立つを得べきである。ああこれ翻身一擲の
 境。明眼の衲僧にして始めて些子に較る。洪川師の如くにして這箇一擲の妙を得た
 りと謂ふべきか。

(十六) 一字不説

『易經』に曰く『易は天地と準ず。故に能く天地の道を彌綸す』と。これ卦爻に於
 ける有象裡の有限界に無象裡の無限界を包擁し、一草一木の微に大宇宙の變化無極

の光景を活寫せる造化至妙の眞理を道破せるの言にあらずや。かるが故に易は『仰
 いで以て天文を觀、俯して以て地理を察し』以て幽明の故を知り『原始反終』以
 て死生の説を知り『天地の化を範圍して過ぎず、萬物を曲成して遺さず、晝夜の道
 に通じて變を知る、』所のものである。是を以て神に方なくして易に體なしと云ふの
 である。然り神 易共に無方無體にして神は神にして神ならず、易は易にして易なら
 ず。天地即ち易にして易即ち天地、易即ち神と云ふべきものである。妙々化々。生
 々動々。これ即ち『易』哲學の眞諦。ああこの妙諦眞智。これ宇宙間第一の道也。
 『易は其れ至れる哉。』と嘆美したるも謂ある哉。これ實に聖人の徳を崇くし業を
 廣くする所以にして、物を開き務を成し天下の道を冒ふ所のもの斯くの如くにして
 已むべきである。現代語に之を譯し來れば『易』はそれベルグソン一流の變化的哲
 學と相感應する所なからずや。『生々之を易と謂ふ』易哲學の原理は眞理を未顯の一
 境に求めて生命の本源に溯らんとする現代思潮と其本源を一にするものではなから

うか。

洪川師は此の易の眞理を觀じて『古聖王の易を作るや理を窮め性を盡し以て命に至る。故に六十四卦、天地と準ず。智萬物を周くして道天下を濟ふ』と賞賛し更に一步を進めて『故に吾が門從上の古德、大道の妙理を贊じ……是れ祖門最上の秘訣也』と云ふ。古來易と禪と相交渉したる行程はこれを歴史に徴するに歴々として見るべきものあり。殊に禪者に於て然りとなす。かの五位説の如きは其の最も奧妙を究めたるものと云ふべきである。玄象多からずして諸法の本末を總べ生佛迷悟事理の蘊奥を究めて含攝無窮猶ほ春和の萬有を萌芽するが如き所のあるがある。然るに近古禪苑荒蕪して此大法財を以て破れたる古器の如く放擲し去て顧みず。洪川師乃ち之を嘆じて以て天下の邪禪を塵にす。心切丁寧と云ふべきである。然り師は此の象爻盪動の妙用に通じて變化玄妙の深理を盡くす。實に圓陀々、明亮々、虛豁々、露堂々として此に到る。始めて『神無方而易無體』の易禪一味の清風に浴すべきである。

洪川師儒教の眞理を捕へ來り之を論するに禪家一流の解釋を以てし殊に自家獨特の卓見を以て其の經驗の蘊奥を披瀝し盡して言々句々皆肺腑より出づ。蓋し禪林近代の快著也。今古聖の金言三十則を頌し來りて最後に『孔子曰予欲無言。子貢曰如子不_レ言則小子何述焉。子曰天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉』と云ふ。開卷明德の話より箇の無言の一話に至る。ああこれ明德を最もよく體得したる聖者の心讀の究竟地ではないか。釋尊の『一字不説』と孔夫子の此の『無言』の一句とああ何等の好對照ぞ。深い神秘の沈黙。ここに最も深き聲が囁きつゝある。蓋し『無言の言は言の最も大なるものである。』言語は眞理の一面を隠す所のもの無言は淨灑灑赤裸々として眞理の全を語て居る。維摩の一默其の響き雷の如しと云ふもメエテルリンクの沈黙は眞理の世界に入る金門と云ふも此の意を洩らして居るのである。要するに一切の深奥なるものは凡て神秘である。沈黙である』

洪川師の此の『禪海一瀾』の章を逐ふて堂々として説き來る所而かもこれ凡て『無

言』の一境である。師亦『予又何をか言はん』と云ふ。然り言はぬは言ふにいやま
さる此の一境各自默契の一路あるのみ。

吾人は以上『禪海一瀾』に現はれたる洪川師の宗教意識の流れに掉して其の洪波
巨濤に對して其の壯觀の萬一を見たり。而かも其の波際激々の妙に至りては所謂無
言不説の境にして文字上の詮義にあらず。人々各其の新光新生に觸るべきである。

趙州の無字とエックハルトの無字

(一) 趙州の無

東洋意識の研究は吾人をして東西兩洋の思想界に於て其の融合統一の交渉點を明
かならしめ更に進んで其の思想の源泉を辿らしむ。吾人は今茲に禪家に於ける謂ふ
所の趙州の『無字』と獨逸神祕派の泰斗エックハルトの『無』の觀念との對照的研
究を試みんとす。吾人は茲に對照的研究と謂ふ。而かも其の適當なる意義に於ては
寧ろ宗教的思想内容の共通點の觀照と云ふを中れりとす。奈所以何となれば吾人は
ここに其の神學的概念若しくは哲學的思辨を以て此の兩者を研究せんとするにあら
ずして、寧ろ唯、彼等兩大宗教家の宗教的實驗の上に味はれたる其の思想内容に對
して吾人の所感を開陳せんと欲すに過ぎざればなり。

宗教の眞實相は久遠劫來の神祕也。之を言語に擬し之を文字に詮すれば既に其の

如實の真相を失す。詩人にして哲人たる彼の廣瀬淡窓『析玄』三十則を著す。篠崎小竹之が序に題して曰く『玄可析乎哉。可析非玄也。雖然非析則人莫知玄之不可析矣』と。嗚呼これ玄の玄たる玄味を最も深く言ひ表はしたるものにあらずや。析するにあらずんば誰か玄の析すべからざるを知らんや。然り一切の真理の奥妙なる其の極致に至りては決して其の如真如實の真諦は析すべきものにあらざるなり。而かも能く之を析する所以のものは析するにあらずんば其の析すべからざる所以を明かにする能はざるを以て也。實に之れ已むを得ざる也。老子が開卷第一に於て『道の道とすべきは常の道に非ず名の名とすべきは常の名にあらず』と説破して真理の當體其のものゝ形象や文字や言語や詮義や此等の名目の上に超越したるものなることを宣じたる其の真意は正にこれ普遍無碍圓滿の『真』其のものを消極的に闡明したるものと言ふべき也。是に於てか玄理の析すべからざるを知りて而して後に玄理の析すべきを知るべき也。吾人は先づ趙州の無字に就て見る所あらんと

す。『從容錄』に曰く

示_レ衆云水上葫蘆按_{スレバ}著_チ便轉。日中寶石色無_ニ定形。不_レ可_下以_ニ無_心得_上。不_レ可_下以_ニ有_心知_上。沒量大人語脉裏轉却。還有_ニ得_底麼。

これ萬松老人の『趙州狗子』の話頭に於て垂示せられたるものにあらずや。真理の當體は有に屬せず無に屬せざること例へば水上の葫蘆（瓢）を按著するが如し。指頭を以て真理の葫蘆を觸著すれば或は『有』と右に轉じ或は『無』と左に轉ず。有に著せず無に著せず轉々更に幽なるものこれ真理の實相にあらずや。例へば日中の寶石の如し。一定の色相なし而かも日光によりて其の色彩を變化す。亦有亦空。非有非空。これ即ち有無の二邊を空じ而かも有無の二法を包容したる妙義にあらずや。色即是空、空即是色。これ現實に即したる理想、理想に即したる現實の靈相を勘破したる天曉不露の正位にあらずや。此の一塵一法の中に此の靈妙の正位を識取して忽然として大悟の妙底に徹す。之れ豈禪者直覺の一境にあらずや。此の境無心

を以て得べからず、更に又有心を以て知るべからず。此の間唯それ冷暖自知の正知正覺あるのみ。

此の有心無心の境を絶したる『格外的眞』を證得せんずる底の英靈漢とは抑も何物ぞ。此の境界に至りては没量の大人も此の無限の靈境を逍遙游するに當りては左往右往有無の語脉に轉却らせて徒に眞理の迷宮に彷徨せんのみ。

吾人は從稔禪師趙州和尚の狗子話頭に於て天下人の舌頭を坐斷し古今の葛藤を解決し宇宙の眞相を最もよく識得したる禪者の古風を見る。『從容錄』第十八則に曰く
 舉僧問趙州。狗子還有佛性也無。州曰有。僧云既有爲甚麼却撞入這箇皮袋。
 州云爲三佗知故犯。又有僧問狗子還有佛性也無。州云無。僧云一切衆生皆有佛性。狗子爲什麼却無。州云爲三伊有業識在。と

嗚呼これ妄想を除かず眞を求めざる絶學無爲の間道人の覺了境に立てる者にあらずんば道ひ得ざるの境也。有を遣れば有に没し空に従へば空に背くは由來眞理體得

の一路を辿る者の陥り易きの弊にあらずや。有佛にあらず無佛にあらず。有佛性にあらず無佛性にあらず。遙に這箇の邊際を透過して而かも眞理其もの、生命、宇宙眞相の靈活なる内容を把定し來れるものにして始めて絶言絶慮、處として通せずと云ふことなしと謂ふ本地に立ちて本來の妙味を觀照し得べき也。

抑も禪者の一隻眼を以て勘破し來れば、涅槃經に所謂『一切衆生悉有佛性』もこれ又眞理の一大轉輪にあらずや。而かも又祖師門下に於て『一切衆生無佛性』と談するもこれ又眞理の一大轉法輪にあらずや。有も有を超じ無も無を空じ去りて有無俱に遣れば一切法界如々玄々の靈響を傳ふるにあらずや。『無佛性の道取聞取これ作佛の直道なり……無佛性の正當恁麼の時即ち作佛なり』と高唱したる永平道元の見識は靈界這箇の消息を達觀したるものと言ふべき也。

山河大地見來れば凡てこれ佛性の現前にあらざるなきを得んや。日月星辰豈これ佛性の發露にあらずや。道元が『衆生皆是れ有佛性なり、草木國土これ心也、心な

るが故に衆生也。衆生なるが故に有佛性なり。日月星辰これ心也。心なるが故に有佛性なり』と道取したる所以のもの正に之れ趙州の活識を讀破したる者にあらずして何ぞ。

趙州の有佛性は徧界會て藏さざる明歷々靈堂々たる本地の風光を端的に説破したるもの、而して更に彼が無佛性の商量は有佛性に對して明暗雙々の靈美を發揮せるもの宇宙間の最大至深の一大公案と謂つべき也。

又有僧問狗子還有佛性也無。州云無。

此の無佛性の一境は佛々祖々の不傳の玄域。靈智靈覺の心證の至聖所。こゝ一法の立すべきなく一塵の唱すべきなし。無門和尚は此の『無』の一境を批評して曰く『參禪は須く祖師の關を透るべし。妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。祖關透らず、心路絶せずんば盡く是れ依草附木の精靈ならん。且く道へ如何か是れ祖師の關。只者の一箇の無字乃ち宗門の一關なり。……透得し過る者は但た親し

く趙州を見るのみにあらず。便ち歴代の祖師と手を把て共に行き眉目厮ひ結で一眼に見同一耳に聞くべし。豈慶快ならざらんや。透關を要する底有ることなしや。廢や。三百六十の骨節八萬四千の毫竅を將て通身より箇の疑團を起して箇の無の字を參せよ。晝夜提撕して虚無の會を作すこと莫れ、有無の會を作すこと莫れ。箇の熱鐵丸を吞了するが如くに相似て吐けども又吐き出さず。従前の惡知惡覺を蕩盡して久々に純熟して自然に内外打成一片ならば啞子の夢を得るが如く只自知すること許す。慕然として打發せば天を驚かし地を動かさん。關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るが如し。佛に逢ひては佛を殺し祖に逢ひては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、六道四生の中に向つて遊戯三昧ならん』と。

あゝ何等の無碍境ぞ。宗教的真人の風骨は茲に其の眞面目を暴露せるにあらずや。趙州の箇の無の一字。何等深邃幽玄の妙味ぞ。

(二) エツクハルトの無

趙州の無字觀に對する宗教的意識の本義斯の如し。吾人は更に進でエツクハルトの宗教的思想に就て其の實驗の聲を聞かざるべからず。エツクハルトは獨逸神祕派の開祖なり。彼曰く『萬有の本源は思想と物質とを超越する所のもの、名くべからざる所のもの即ち「無」^{ニヒツ}と名くるより外なきものなり』と。これ即ち禪者の所謂『有佛性にもあらず無佛性にもあらず』と云ふ所のものにあらずや。宇宙の本源に立つて文字形象の假相を脱して直に無一物の妙觀を察智するものにして初めて此の壁立千仞の風光に接すべし。此の境に入らんに先づ彼の『自然にして師受なく我行にして師保なく志獨にして等侶なく至道往反なく玄微清妙にして眞なり』と云ふの三昧境を識味せざるべからず。此の境に入りて身心寂靜なる禪定の風姿に參じたる我が神祕家エツクハルトは『此の無は即ち神性なり』と高唱せり。然り此の無は

有無の無を絶したる宇宙の實在其のものゝの姿なり。此の實在の姿や實に神性にして而かも如々なり。『此の神性如實に活動して神となるこれ自知の如實智に依る』と提唱したるエツクトルトの一拈微笑の高姿。吾人をして轉た渴仰の情に堪えざらしむ。密教家の『第一甚深微妙の法は乃至一切智人にあらずれば解すること能はず。此の法は何の處より得るや即ち是れ行者の自心のみ。若し能く如實に觀察して了々に證知する是を成菩提と名く』と云ふ一切智人にあらずんば曷ぞ此の如實の了々境を證知することを得んや。我がエツクハルトの宗教的意識の根底に自視々照したる此の無字一境の神性觀は如實自知の靈的活動によりて『無よりして神と現前し來り』茲に初めて實在の靈動と成る。彼の宗教意識よりして之を觀じ來れば宇宙の森羅萬象は『無』の神性の靈動作用によりて現じたるもの即ち無の自現相に外ならず。自己活動の自識作用を起さざる状態に於ける此の神性は即ち『無』なり。是に於てか造化の妙用は畢意するに無的神性の自識作用也。嗚呼何等の眞諦ぞ。嗚呼何等の妙覺

ぞ。こここれ心路を絶したる無門の一關にあらずや。これ打成一片し來れる驚天動地の遊戯三昧境にあらずや。之を談せんと欲するに啞子の夢を得たるが如くにして言語詮義以上也。ここ唯それ自知することを許すのみ。

彼の宗教的思想の實在は自識作用なり。神の自知は神の現前なり。神以外に萬有に於ける實在なし。萬有は神なることに於てのみ實在を有す。換言すれば神は唯一の實在なり。これエックハルトの宇宙觀なり。故に眞理の本体實相を識知せんと欲せば萬有の差別相より一轉して實在の神に歸入せざるべからず。神に歸入して宗教意識の高調たる靈覺を自證せんには一切の論理的推理作用を絶せざるべからず。これ禪者が坐禪三昧に入らんには『不思善不思惡能く凡聖を超越し迷悟の論量を透過し生佛の邊際を離却して』自照靈然たる本地の風光を現前する底の脱落觀と其の趣を一にするものにあらずや。エックハルト曰く『全く心識を空却せよ。心識を空却するに従ふて神力の靈働を自覺す。此の境に於ては一切の記憶一切の悟性一切の意

志は凡て靈覺を散漫雜駁ならしむるに過ぎざるのみ。ここには凡ての知覺作用凡ての觀念作用一切の生存欲一切の森羅萬象そのものをも放捨せざるべからず。這箇にして此に初めて箇の靈的妙覺の新生涯を實驗することを得べし。然からずんば此の實驗に悟入すること能はざるなり』と。此の神祕的悟入の妙境に入りて神の靈聲を聞く。ここに一切の宗教的靈智の眞理を觀照し得べし。『汝等默せよ然らずんば神語らず』と垂示したるエックハルトの拈提は維摩の一默と相感應する所なからずや。『神を靈智せんには吾等の知識は無用也。吾等の知識は神を靈覺し得んには余りに貧弱也。神の閃光一たび吾人の心裡に輝き出るや吾人の有する自然の光明は一切其の用を失するにはあらずや。寧ろ自然の光明は消滅して全く無に歸溶するにあらずや。』斯くの如くにして人間の心靈は全く實在の光耀を以て蔽はれ神自らの包容中に生くるに至る。此の『神祕』の境はあらゆる知識以上也。あらゆる理性の批判以上なり。これ聖者パウロガ『靈覺は唯靈覺によりて認識せらる』と謂ふ所のものにあ

らずや。ここに面々相對して立つ啐啄同時の一刹那には神人の全人格が圓かに微笑しつつあるにあらずや。茲に至りては見神は頓て被見神也。吾人が神を見ると吾人が神に見らるるとは畢竟するに同一不二也。これエックハルトが一切の知識作用觀念作用を破し去りて而かも猶ほ『吾人が神を靈智することによりて神は彼自らを靈智するなり』と謂ふ所以のもの也。

一切の執着を離れ有無の邊際を空じて『唯神をのみ靈智し神をのみ聖愛することによりて心靈は究極の法悅境に達す』と悟道したるエックハルトの宗教的神祕觀は此の意識の玄底を稱して『神が人間と成れり』と云ひ、『神が人間の靈に生れたり』と云ふ。此の境に達したる聖者を呼んで之を『基督』と名くるも可也。又之を『神』と名くるも可なりと云ふ。

見來ればエックハルトの宗教觀斯くの如し。吾人は以上の敘述に於て其の宗教意識の内容に於て趙州のそれと互に相調和し融合する所のものと認めずんばあらず。

兩者共に宗教的實驗の本源を無字觀の不可稱底に於て見たるは一也。其の汎神觀的神祕想に立つて宇宙の森羅萬象を觀じたるは一也。論理の範疇を超越し、有無の常見を沒了し去りて直ちに如來の一超地に慕進したるに於て兩其共に一也。

吾人は今茲に哲學的研究に於て高等批評を試みんとするものにあらず。又批評のナイフを以て截斷し得べきものあらず。只吾人は東西所を異にし時を異にして相起れる二人者が其の宗教的意識の根底に於て殆んど相似たるものあるを認め、て宗教的直觀の感應に驚かずんばあらず。(勿論詳細の點に於て幾多の差異點を認めざるべからざるは明かなるべしと雖も)。之を現代の大陸哲學の最近の傾向に於て見る。佛蘭西のベルグソンの如きは從來の抽象的論理上の範疇を打破して直ちに宇宙の實相そのものを捕捉せんとして論理以上の直覺作用によりて一大哲學の新系統を形づくらんとしつゝあり。私に思ふに來るべき思想界信念界の新潮流は正しくも直觀的新神祕の一新流にあるが如し。覺醒し始めたる東洋意識は此の意味に於て捲土

重來の勢を以て我が思想界を風靡し來らんとするもの如し。此の時に際して吾人東洋の國土に生れ東洋意識に養はれたる所のもの豈に一種天來のインスピレーションを感じるものなくして已むべけんや。今後に於ける我邦の思潮界は東西兩洋の思潮を調和融合し更に一新系統となして之を世界に貢獻するの一大使命を有せるにあらずや。

現代に於ける我邦宗教的の思潮が佛教の基督教化し來れると共に基督教の佛教化し來れるは事實なるが如し。而かも吾人を以て見れば基督の深意識は東洋意識の新研究を待て始めて其の一新光明を發揮するもの如し。此の時に際して佛基兩教に渡れる古今の聖者の宗教意識に覃思研鑽する豈その所以なしとせんや。吾人の無識を以てして而かも猶ほ茲に東西思潮の融合點を着破せんとする單に此の一念に外ならず。

エマルソンの神秘思想

(一) 絶妙の默示

普通の意味に於て之を論ずれば吾人の生活上の知識は多く吾人の日常の経験より來るが如し。されどこれ謂ふ所のコンベンションリズムの知識にして、こは宇宙本來の靈源より來る所のものにあらず。其の多くは吾人の常習常慣より來れるものなり。されど宗教上の信念に至りては全くこれに異なる也。由來宗教上の信念は凡べて直観より來る。彼の常識的判斷や理知的批判を以てしては到底解釋すべからざる宗教本來の眞理は吾人の悟性的直観の刹那の實感よりして來る。これエマルソンが超靈論の劈頭第一に於て論破したる所にして『吾人の信仰は一刹那に來る』と云ふ所のものなり。茲に彼は此の一刹那中に一の『深淵』の湛えつつあるを認めたり。而かも此の刹那の深淵中に他の一切の経験を超越したる『より多くの現實』の感を認

めたり。これ禪者の所謂『拈華微笑』の一境にあらずや。一刹那の一念心上に本来の面目を現前したるものにあらずして何ぞ。これ俱胝の『只豎一指』にあらずや。圓悟は此の一境を指して『一縷絲を斬るが如し。一斬一切斬。一縷絲を染むるが如し。一染一切染』と垂示せしにあらずや。靈界の消息は一葉落ちて天下の秋を知るべきにあらずや。檻前山深く水寒しの光景は世尊拈華の光景にあらずや。これカーライルが謂ふ所の永遠の否定より永遠の肯定に閃き渡る永遠の刹那にあらずや。禪者の謂ふ所の本来の面目とは此の一切の経験を超越したる刹那の深淵中に一切の経験を包容する大なる現實の味を直観する底のものにあらずして何ぞ。これ我がエマルソンが端なくも彼の心靈の全圖中に識得體達したる信念の妙境と云ふべき也。

然り吾人の心靈は全宇宙の真相を一刹那に直観せんことを要求す。而かも吾人の實際を顧りみれば吾人は我が内部に幾多の不安、煩悶、悲哀の潜在するを意識せざる能はず。これ總て欺かざる我の自白する事實にあらずや。エマルソンは此の古來の

常套的問題を囚へ來りて茲に一新解決を下せり、曰く『吾人が概して缺乏無智を感ずるは吾人の心靈が其の絶大なる要求をなす絶妙なる默示にあらずして何ぞや』と。一切の煩悶一切の悲哀のうちには無限向上の絶妙なる默示の點するありて不斷の法燈香ばしくも不安場裡に照りつゝあるを見ずや。これナザレの神人基督が奇しくも『悲しむ者は幸なる哉』と嘆美したる所以のもの也。これ哲人カーライルが『悲哀の禮拜』と説きし所のもの、吾人は茲に煩悶は頓て向上也との一種甚深の消息を味ふべき也。『欲得現前莫存順逆、違順相爭是爲心病、不識玄旨徒勞念靜』と三祖大士の唱道したる心病なるものに打ち當りて一たび眼前咫尺を辨せざる底の黑暗々裏に陥りて玄旨の聖境に見出し能はざる者更に大死一番底の境界を透過して復活し來る時んばここに始めて闇裡の光明を謳ふべきにあらずや。しかも此の境これ實に難透の一關也。これエマルソンが『六千年間の哲學も未だ心靈の穩室に對しては摸索不着なり』と大喝破したる所以のものにあらずや。然りあらゆる哲學の研

究も其の解決の最後に於ては其の『鎔解する能はざる餘瀝』の残るを如何ともする能はざる也。心靈の實相は本來理知以上也。解釋以上也。不可說境也。不可稱量底也。これ古人が兀々として坐定して『思量箇不思量底、不思量底如何思量非思量此乃坐禪之要術也。』(道元普勸坐禪儀)と提唱したる所のものにしてこれ即ち諸法當處に見成する靈妙の端的にして茲に至りてはあらゆる論理的研究もあらゆる哲學的解釋も其の利刀を下し難きの所なりと謂ふべき也。

研究以上の境界。理知以上の消息。これ即ち禪の禪たる直觀の本地にして、人間心靈の内部深奥の本來の面目と云ふべき也。此の點に就いては吾人『今日の存在』と云ふ此の一事既に一大問題也。エマルソン曰く『人間は河流也其の本源は吾人の眼に隠る。吾人の存在は吾人不可知の境より來る』と。これ謂ふ所の一大超靈の吾人の本源たるを示すものにあらずや。『余は一條の河流を見る、此河流や吾人の見ざる境地より流れ來りて、暫し我が内部に流れ入る』と云ふ。これ不可見境の靈界と吾人

の心靈と相交感道交し得べきの謂にあらずや。靈界の萬法齊しく觀じ來れば歸復自然にして萬法一如の妙諦を味ひ一如體玄の幽情を體得し得べき也。例へば大地の天空の柔かき腕に横はるが如く吾人の心靈は大自然の脈搏の中に抱有されつつあるにあらずや。此の大自然や『統一』也。『超靈』也。茲に彼我の別なく内界と外界の差なく、一切は『共通の心情』にして所謂ユーベルアインシチンムング也。これ『齊しく萬象を含む』と云ふべき所にして、『圓かなること大虚に同じ』と識味し來らば茲に尋常茶飯の事は宗教上の光明と照り『眞摯なる會話はこれ即ち禮拜』(All sincere conversation is the worship) てふ宗教上の最高調を實現するに至る。此の境これ『一切を征服する底の現實』にして、此の現實は吾人の小智才能を打破し來りて人をして『本來の面目』(What he is)を露堂々として現前せしむ。こゝに一切の言語は沈黙して、全人格の風光其のもののみ無言の雄辨を語るに至る。一切の智。一切の徳。一切の力。一切の美は今や吾が行動と吾が思想とに流れ來りて全く我が全人格

を涵し了らざるは已まざらんとす。茲に我がエマルソンは人間の内部に全宇宙を蔽ふの全心靈を見たり。聰明なる沈黙を見たり。

(二) 永遠の一如

吾人は常に現象的差別の世界に生活す。然れども吾人の心靈一たび無限無窮の靈光に觸れて平等一味の實在界に接し其の如實の靈相を着破し來らん乎。差別は平等に即し平等は差別に即して兩者互に不離不即の妙味を色讀すべき也。これ宗教上の實驗境にして禪者の參する所聖者の見る所也。我がエマルソンは此の一境を見得して、これ即ち『永遠の一如』也と謂ふ。然り永遠の一如也。茲には主觀は客觀と相抱擁し、自我は大自然と一導の脈搏を交感し、神人融合の妙地に入りて萬法一如の法悅底の醍醐味津々として流れ來る。個想と全想とは心靈の流露と照りて吾人は直に宇宙大靈の語る所を默識實感し得べし。詩人ワーズワースが夕陽の靜寂境に聞き

し所の淵默の雷聲は頓て此の邊の消息にあらずして何ぞや。此の超靈の光明によりて一切の神秘の奧龕を開くべし。言語や説明や解釋や提唱や總てこれ外殼也皮相也。不立文字教外別傳直指人心見性成佛の本旨は千聖不傳にして一切の語言によりて轉せられずして脱體現成せんのみ。エマルソン曰く、『生命によりて語る所の者の言語は其の生命を宿さざる者に對して單に空しき響をなすのみに過ぎず』と又曰く『予は大靈に就て語る能はず』とあゝこれ不能語の一等地に立てる勇者の實參底の聲にあらずや。氏は更に又曰く『予の言語は此の森嚴なる意義を傳ふる能はず』と。嗚呼山は築かずして高く、海は決せずして深し。若しそれ一等地に於て根源を識破せば物物全眞頭頭玄極ならん矣。人一たび此の大靈の洗禮を領する所あらんか。言々句々靈興泉の如く湧いて煙霧々草茸々。蓋天盖地、徐に行て流水の聲を踏斷し、縦に觀て飛禽の跡を寫し出し得る所のものあらん。ナザレの神人歌ふて曰く『風は己がまゝに吹く、爾其の聲を聞けども何處より來り何處へ往くを知らず。凡て靈によ

りて生まるゝものも此の如し』と。宇宙の大靈に接觸したる心靈の高調には茲に詩語燦として花咲くものあるべし。宇宙に遍在する最高の大法は、吾人の身心をして靈光雨の如き聖地に立つて生死の一關を超脱せしむるの妙致を味はしむるものなくんばあらず。吾人は更に進んでエマルソンの禪機に就て其の内容を明にする所あらんとす。

エマルソンが其『超靈論』に於て論じたる宗教的意識は更に一段の高潮を呈し來りて『自然の秘密』を達觀する心靈の如實性を發揮して曰へらく『それは能力にあらずして光明也。智力にあらず意志にもあらずして智力と意志との主人公也。吾人存在の背景にして一切のものは其のうちにある。無量絶大にして他の有とならず又有する能はざる所のものなり。』とあゝこれ謂ふ所の一心更に喩ふべきなしと説き來りて『吾が心秋月に似たり』と詩人寒山の歌ひし所の境にあらずや。『形無くして而かも三千世界に充滿せり。火中に在りても焼けず水に在りても水に溺れず。汚穢不淨に在

りても更に垢れず、三界壞倒すとも全く破れず壊せざる物なり』と大燈國師が説破せし所の本來の主人公にあらずして何ぞや。エマルソンは更に心靈の妙用を説いて曰く『内部より背後より光明は吾人を透ふして萬有の上に照り。吾人をして自己の全く無ナッシングにして光明は一切なる事を證せしむ。』とこれ禪家に所謂本來無一物なる本地の風光を唱し來れるものと云ふべし。これ『有心を以て求むべからず無心を以て求むべからず、言語を以て至るべからず、寂黙を以て至るべからず』と説き給ふ所の宗教上最高の靈調にあらずして何ぞや。吾人は茲に一切の美と一切の眞と一切の善と一切の聖とを渾じて一丸となれる宇宙の大光明を見るべきにあらずや。實にエマルソンの曰ける如く『人はテンプルの前面にして一切の智慧と一切の善とは其の内部に住するなり』(A man is the facade of a temple wherein all wisdom and all good abide.) 普通吾人の呼んで人間と云ふ所のものは眞の意味に於て人間を代表する所のものにあらざる也。これ皮相の見也。誤謬の解なり。本來の人間とはこれ即

ち内部の心霊其の者也。是の心霊や人間の智力を通じて呼吸する時こゝに天才となり其の意志を通じて呼吸するとき茲に美德となり、其の心情を通じて流るときは茲に愛となる。一切の精神的革命は此の心霊の内部活動によりて完成せらる。禪家に所謂悟道の玄旨は此の心霊開發の靈機にあらずや。二祖が雪に立ち臂を断つて悟りたる、六祖が人の金剛經に『應無所住而生其心』と讀むを聞いて悟りたる、靈雲が桃花を見て悟りたる、香巖が瓦の竹に當る聲を聞いて悟りたる、臨濟が黃檗に六十棒打れて悟りたる、洞山が水を渡るとして我が影を見て悟りたる、何れかこれ彼等が心霊微妙の靈機に觸れて、彼の主人公に逢着し、こゝにこゝと云ふ本來の面目を發揮したるものと云ふべきにあらざるか。我がエマルソンは此の一境を指して「心霊の至醇境」と名け而して『萬人何れの時か此の至醇境を實感するもの也』と云ふ。然りこれ通身光明の境。これ廓然無聖の境。此の境や玲瓏明白にして自照靈然。色空未だ分れず。境智未だ立せざる全身獨露の本地。微妙也故に色彩を以て描く能は

ず。幽玄也故に言説を以て語る能はず。不可説不可稱不思量の玄底也。エマルソン曰く『言語は以て其の色彩を描く能はず。そは餘りに稀有なり。そは限定すべからず。計量すべからず。唯だ吾人の知る所は、その吾人を透徹し吾人を抱擁すると云ふ事のふ』と。

“Language cannot print it with his colours. It is too subtle. It is unmeasurable, but we know that it pervades and contains us.”

嗚呼何等絶妙の一境ぞ。何等崇高の本地ぞ。禪機の極致は此の絶言亡慮底の一境を色讀體得し來りて始めて其の妙趣を味ふべきにあらざるか。こゝ内部充實の光明は湛然として吾人の靈海に澄めるにあらずや。

エマルソンは更に達人妙悟の至境を説き神人合一の妙旨を語りて曰く『こゝ神と人との間には何等の障碍なく何等の牆壁もなし』と空際一物の吾人の眼を妨ぐるものなく千里皓蕩として渺々たり。一切は心霊の洪波中に溶けて碎けて洋々として流

るゝあるのみ。嗚呼何等淨嚴の神淵ぞ。茲にエマルソンは『心靈は萬有を圍繞す』
 “The soul circumscribes all things,” と云ふ。此の一境は一切の經驗を破棄し、一切
 の時間と一切の空間とを打破す。超絶也而かも包擁也。靈妙也而かも現實也。こゝ
 超絶的意識と内在的意識とは相抱合して永劫は刹那に集り刹那は永劫を包み、時間
 的にして而かも超時間的也。エマルソンの謂ふ所の『宇宙的永劫の美を愛する心』
 “The Love of the universal and eternal beauty” のみこゝには花咲きつゝある也。
 茲に人生は凡て久遠の時代に屬し、人間は全く心靈そのものとなる。心靈一たび時
 間の制限を飛躍して一超直ちに如來地に入り、江月照し松風吹く永夜の清宵を觀せ
 んか、深奥なる靈響何處ともなく流れ來りてこゝ詩と音樂と宗教との三者相調和し
 て宇宙の一大ハーモニーを成す。これ宗教と藝術との相接觸する所。神と詩との相
 握手する所。これ唯佛與佛の境。ヘブライの古詩聖が『淵は淵を呼ぶ』と歌へる所
 のものにあらずや。エマルソン此の端的の妙致を説破して曰く『心靈は唯心靈を知

る』と(The soul knows only the soul)然り神の啓示の前には時間空間は其姿を退縮
 し去らんのみ。

(二) 自他即一の境

エマルソンの心靈觀は更に心靈の進歩に關して言へり。曰く『心靈進歩の率は心
 靈自身の法則に依る』と。心靈自身の法則とは算數的法則にもあらず、直線的運動
 の法則にもあらずして變態メタモルフォーゼスによりて代表せらるゝ向上の法則也。例へば卵より虫
 に虫より蠅に至るが如し。心靈の法則一たび内部生命に脉打つや。人は直ちに各階
 級を超じ各集團を越えて直接に宇宙の心靈に面々相接す。これ靈興也。神來也。イ
 ンスピレーション也。エマルソン曰く『神的衝動によりて心意は可見有限の皮殻
 を打破して永劫界に超出し而して其の靈氣を呼吸す』と。斯くの如きは禪家の所謂
 『大道無門、千差有路、透得此關、乾坤獨步』と云ふ無門の一關を透過したる佛

祖の境界にあらずや。由來禪的思想に進歩發展の意識なきが如しと雖も本地の風光を發揮し本來の面目を披瀝し來るが如きはこれぞ眞の向上にあらずして何ぞ、これぞ眞の進歩にあらずして何ぞ。斯くの如きはエマルソンの謂ふ所の心靈向上の一則と相合致するものあるにあらずや。凡夫も一たび此の靈機に觸るれば直ちに『一切の美德の天地』[The region of all the virtues.]に入るを得る也。こゝに彼等は自己を包擁する心靈のうちにある也。人一たび此の心靈の本地に立たんか、一躍直ちに世界を中心に入れるものにして茲神の内殿也。こゝにして人は一切萬有の本源に立つて『宇宙は神の徐々として發現されたるものに過ぎざること』を證悟するを得べき也。

『超靈論』に現はれたるエマルソンの宗教思想は一轉して『形體は靈の化身也』てふ思想となり來れり。一切の心靈は此の一大靈の化身したるもの也。一切の萬有は此の一大靈の化身したるもの也。人は人として各個性を有す。此の各自の個性は

大本能グレートインスチンクト即神のうちに生活す。斯くの如く各個性は個性の特色を有すると同時に各個性を通じて『一致の點』を有す。エマルソン曰く『余は共通の天性を證す』と而して又曰く『他の心靈は分離されたる余自身也。余を牽引する他の何物か能くこれに及ばんや』と。他中に自を觀じ自中に他を觀じ自他即一の本源を靈の一元に見る所これ頓て『一性圓通一切性、一別徧含一切法。一月普現一切水。一切水月一月攝。諸佛法身入我性、我性還與如來合』と奇しくも歌ひし聖者の風韻と相合するものにあらずや。『個性自身は無個性を告示す』と云ひ更に『第三者即ち共通の天性なるものは社交的のものにあらず。個性なきもの即ち神也』と云ふエマルソンの徹底せる思想も此宇宙の一大靈を説きし所のものと云ふべし。心靈に響き來る此の内部の聲は吾人に靈調の高感を與へ、莊嚴の思想を與へ、超絶の自覺を與ふ。而して此の自覺は靈界の萬品を照して漏らす所なし。人道の妙華はこゝに花咲き、精神の妙光はこゝに輝き、不盡の一燈永へに人間心靈の春を温むる所のあるべし。

心霊と真理との融化は人間の全人格を通じて真理の全體をして春の水の如く渾々として流れ出しむ。真理は光の如くそを受くる所の人格に流れ込み、更に微妙の光線となりて再び其人の人格を瀟化して流れ出づ。此の心霊と真理との融化は大自然の圓寰中に於ける個の最高の消息たらずとせんや。エマルソン此邊の消息を説いて曰く『それは神の心の吾人の心に流れ入る也。それは生命の海の澎湃たる大波洪濤の前に個人てふ細流の退潮を云ふ也』と。心霊は此の天啓に觸れて敬虔と法悦との靈感を以て満たさる。これ『觀すれば湛然として圓寂也。心境一如也』と古禪者の達觀したる所のもの。又『爾若し欲得せば便ち是れ清淨の身界也。爾一念不生なれば便ち是れ菩提樹に上つて三界に神通變化し意生化身して法喜禪悅し身光自ら照らさん』と云へる所のもの。それ心霊が宗教上の光耀に上りて新真理の風光を觀じ來るや將た又自然の心より出づる偉大なる行動を成就するに當りてや、一種の靈妙なる實感吾人の渾身を貫穿す。それ然り神人融合の靈感は實に超絶駭絶の境妙法稀有の

境也。エマルソンは此の境を呼んで恍惚境、失神境、預言的靈感境と云ふ。こは實に稀有の事象也。稀有の事象なりと雖も而かも忘るべからざる刹那の『神的臨在』也。此の臨在の自覺には一種の情熱を伴ふ。此の情熱は爐火の如く心霊を温め光の如く美德の感を輝かしむ。古來此種の靈感を實驗せしもの精神界に於て其の人に乏しからず。ソクラテスの失神に於ける、プロチナスの合體に於ける、ボルフィリーの幻象に於ける、パウロの轉心に於ける、ベームの曙光に於ける、スキューンボルグの光耀に於ける如き其他の宗教的天才の一たび此の靈感に打たる、や絶大の歡喜を感じたるの例甚だ多し。これ皆『個人の心霊が宇宙的心霊と渾和するに際して起る所の敬虔と法悦との戰慄の種々相に過ぎず』と説明したるエマルソンの見解は宗教的真理を洞見したるものと云ふべし。これ禪者の『參禪須透祖師關妙悟要下窮心路一絶』と喝破せし宗門の一關也。若しそれ祖關透らず心路絶せずんば、盡く是れ依草附木の漢ならんのみ。『此の所に相應せんと思はばまさに氣息を絶し命

根を斷じ去りて見よ……ただ一息斷じ兩眼閉づるのみにあらず、百骸潰散して皮肉あごをとどめざる所に向ひて見よ。明暗に屬せず、男女にあらざる一物あり。嗚呼此の一物。峨嵋萬仞鳥通じ難きの所。ここ絶對の大法を靈智すべき難透の一關。理性によりて通すべからず、言語によりて答ふべからず。唯それ心證の一路あるのみ。

『天啓は心靈の發露也。』“Revelation is the disclosure of the soul.”とは哲人エマルソンの道破せし所。正にこれ『心は萬境に隨て轉ず轉ずる處實に能く幽也』と古人の色得したる道流目前の靈々地にして萬般を照燭し世界を酌度する底の真人自覺の風光也。これ古聖が『直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ』と唱道したる脱落境を指したるものにあらずや。『覺知見を開き、覺知見を示し、覺知見を悟り、覺知見に入る』と云ふ開示悟入の眞境もこれ又佛知見の發露したるものにあらずや。眞理は一切天啓的也。殊に宗教的眞理は天來的向下的なる方面よりして之を言へば

超理性的にして而かも客觀的なるが如しと雖も、これを内觀的意識よりして言へば一切の宗教的眞理は内部生命の意識的主觀的發露也。見性成佛と云ふもの此の一境を外にして餘す所何物ぞ。自家意識内の靈覺を外にして宗教上の眞理を云々するは所詮は空詮義也空蕩々の警言也。『若し能く正心に常に智慧を生じ自心を觀照すれば……是れ自ら佛智見を開く也』との六祖の活眼は是のエマーソンの見識と正に相合するものと云ふべき也。

時間と永生との問題に就てエマルソン説いて曰く『耶蘇の如きは不變不易なる道徳上の情感のうちに住み、物質上の運命には心を用ひ給はざりし也。……従て心靈の時間的永存に關しては一語も言ふ所なかりき』と。然り吾人の心靈は時間に活くるにあらずして生命其のものに生くる也靈に生くる也。神に生くる也。神に生くるは頓て永遠に生くる也。時間的に活きんとして神に死するものは實に咀はるべき哉。時間的永遠の問題は心靈上の新生命を得たる新人の境界に於てはこれ眞に閑葛藤也

死問題也。これ聖者道元が奇しくも『生死の中に佛あれば生死なし』と説き給へる深奥の消息によりて味ふべき宗教上の妙諦にあらずや。我がエセルソンが『心靈當體は眞實也。心靈に浴せる所のものは無限の現在を離れて有限の當來に迷ひ入ること能はず』と言ふ所のものこれ無碍人の體得也。新人の境地也。神人耶蘇の體達したる所のもの正にこれ。

然り心靈は人の子をして今日(然り大なる今日也)のうちに生活することを教ゆ。今日に生くるは永遠に生くる也。今日に生き得ずして曷ぞ永遠に生き得んや。神人基督が『今日野に咲ける一輪の百合花』を見よと語り給へるもの惟ふに甚深微妙の意義を含めるもの、如し。『活ける現在』の一語何ぞそれ意味深きや。宗教上の眞理詮じ來りて此の一語のうちに包藏せるるにあらずや。打成一片し來れば遠山無限碧層々たる靈界の光景は朗かに此の一境の中に讀み得べきにあらずや。エマルソン曰く『唯一の道は……自然の秘義のうちに吾人を浮遊せしむる存在の潮流(The tide

of being)を受納しつゝ働き且つ生き、生き且つ働くにあり』と。宇宙大靈の發露たる活ける現實そのものうちに立ちて生存し活動し而して眞の意味に於て生活す。これ人生の眞面目也。新天地の開拓は此處に始まる也。現實に生きよ！これ神に生くる也。

(四) 心靈の尊嚴性

萬有を融化して光明の大海たらしむる所の神聖なる天の靈火により心靈を聖化せしめ、人間本來の本性を盡し來りて赤裸々露堂々の純一無雜の信の一念に生きんか。こゝ念々の充實は吾人を生死岸頭に於て大自在を得せしむ。花の開き花の落つるやこれ内心充實の開落也。柳は暗く花は明かに各自家の風光を語りて不盡の乾坤燈外の燈を燭らし無邊の風月眼中の眼を明かならしむ。これ古人が『靈照無遺』と歌へる圓光鮮かに照らすの一境。

エマルソンは更に論歩を進めて大詩人の使命を論じて曰く「大詩人は吾人をして吾人自己の富を感ぜしむ。而して彼の作物に就て考ふること少なからしむ。大詩人の吾人の心に與ふる最善の靈交は吾人をして彼のなしたる一切を輕侮せしむるに在り。」と。嗚呼何等大膽の宣言ぞ。而かも此の一句何ぞそれ人間心靈の尊嚴性を高調するの至れる。禪的言句に翻譯し來れば正にこれ『五帝三皇是何物』の一槌を弄して佛を烹祖を焼く底の一鉗を呈露し來る丁寧親切の本懐にあらずや。聲前の一句は千聖も不傳なりとかや。天下の大沙翁大ミルトンと雖もエマルソン翁の一鐵槌に擊破せられては倒退三千たらざらんとするも豈得べけんや。

このエナージーの個人的生命の上に下るや、その個人を全く占有し了らすんば已ます。それは洞觀力^{インサイト}として現はれ、寂靜莊嚴の念として顯はる。エマルソン曰く「吾人は此の大靈^{グレートネス}を宿せるものを見ると、偉大てふ新階級を覺知す」と。人此の靈感到に觸るゝや茲に彼は全く一變して其のトーンを新たにし來る。道元禪師此の靈感を

直覺して曰く『もし人一時たりとも三業に佛印を標し三昧に端坐する時、遍法界は皆佛印となり、盡虚空悉く悟りとなる。故に諸佛如來をしては本地の法樂をまし、覺道の莊嚴を新たにす。および十方法界三途六道の群類皆俱に一時に身心明淨にして大解脱地を證し、本來面目現するとき、諸法皆正覺を證會し萬物俱に佛心を使用して速かに證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し、一時に無等々の大法輪を轉じ、究竟無爲の深般若を開演す。……此の坐禪人確爾として身心脱落し、從來雜穢の知見思量を截斷し、天真の佛法に證會し、普く微塵際そこばくの諸佛如來の道場ごとに佛事に助發し、廣く佛向上の機にかうぶらしめてよく佛向上の法を激揚す。此の時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事をなす』云々と。嗚呼何等の偉大にして甚深なる宗教的光耀の靈境ぞ。こゝにエマルソンの汎神思想は道元の更に深き汎神思想と相呼應して脉々相躍るものあるにあらずや。エマルソン曰く『現在の刹那と單純なる瑣事とは以て思想を流露すべく、以て光明の大海を吸收するに餘りあり』と。

簡短なる一句は最も價値あるもの也。エマルソンが此の一句豈無量の意なからんや。心靈の無限の富を集め來りて之を最も簡潔なる言句の中に收むるは實に容易の業にあらず。我が禪文學と俳文學とは此點に於て世界の最も特色ある文學也。哲人エマルソンが文字を用ゆる例へば禪者のその如く俳人のその如し。赤裸々の眞理を明快にして而かも深邃なる短句のうちに收む。此の點に於ては彼の文字は確に泰西に於ける禪文學の上乗なるもの也。

(五) 最高者の聲——其美無量

説き去り説き來りて吾人は今や正にエマルソンが『超靈論』の最後の大字に迫りつゝあり。彼の幽玄なる思想は更に其の光芒を發揮して曰く『心靈の活動に於ける神人の融合は不可説なり。最も單純なる人も至誠を以て神を禮拜すれば乃ち神となる』と。謂ふ所の神は宗教分内の神也。宗教の領土に於ては眞人は頓て神也。こ

れ赤肉團上の無位の眞人にあらずや。直心は是れ菩薩の淨土也と云ふ宗教分内の見地によりて見來れが唯直下に頓に自身本來是れ神なることを了し得べき也。茲に吾人の味ふべき要點は禪者の所謂『自心本來是佛』の信念は理觀上より來れる信念也。然るにエマルソンの所謂人が『神と成る』"becomes God." ことの意識は敬虔上より來れる情觀的に神を觀じたる信念の境地也。前者は禪者の餘りに深く汎神想に入りたる結果にして、後者は汎神想中に猶ほ一面の人格的神觀の色彩を帯びたる所以にはあらずか。エマルソンはこゝに修辭上の神を排し古來の傳説上の神を棄て始めて茲に『神は現前して吾人の心情に點火す』と云ふ。こゝに大自然は何處にも戸扉なく牆壁なく障礙なく防遏なく、『唯一條の血脉』は無人の境を流るるが如くに萬人を一貫して『無窮に循環す』と叫ぶ。意味深きかな。

されば各人は『全自然』と『全思想』とが自己の心情に啓示する所のものを學ぶべし。これ即ち最高者^{ハイエスト}は吾人の内部に住すとの思想也。吾人は此の最高者なる神の聲

を聞かんが爲めには耶蘇の吾人に教へ給へる如く『密室に入りて戸を閉ぢざるべからず。』宇宙の密室に入りて大靈と面々相接して語る。茲に神秘の聲を聞くべし。此處大悟徹底の眞頭骨にあらずや。エマルソンは此の一境を高調して曰く『我神の前に静座するとき誰か其の間に入るを得んや』と。彼は此處に獨座雄峰の大境地に立つて天下人の舌頭を座斷して曰く『絶對的に之を云へば(天下に)一人の偉人もあるなし、一切の歴史一切の記録もある事なし』と(意を取りて云ふ)。嗚呼何等の坐禪三昧の風光ぞ。こゝに彼は心靈の最高峰に達するや孤峰頂上に盤結して佛を呵し祖を罵り去りて穩密の田地に坐す。こゝ眞にこれ諸天花を捧ぐるに路なく、外道潜かに窺ふに門無きの地にあらずや。

エマルソンの『超靈論』は其の結論に於て掉尾の美を振へり。其の金聲玉振の文章は幽玄深邃なる思想と相待つて英文學中稀に見る所の大文字也。何を苦しんでか吾人は金玉を變じて瓦礫と化するの愚を學ばんや。茲にエマルソン自身をして語らし

めよ。曰く

The soul gives itself, alone original, and pure, to the Lonely, Original, and Pure, who on that condition, gladly inhabits, leads, and speaks through it.

達人の言にあらずして何ぞ。孤獨、獨創にして至純なる心靈は亦孤獨、獨創にして至純なる神と相接し相語り、心靈はこゝに若やぎて法悦の心情衷に溢る。人此の境に至らば豁然として大悟せん。見よ心靈の語るを曰く

“I am born into the great, the universal mid. I, the imperfect, adore my own Perfect. I am somehow receptive of the great soul, and thereby I do overlook the sun and the stars, and feel them to be the fair accidents and effects which change and pass. More and more the surges of everlasting nature enter into me, and I become public and human in my regards and actions, so come I to live in thoughts, and act with energies, which are immortal. Thus revering the soul, and learning, as

The ancient said, that 'its beauty is immense,' man will come to see that the world is the perennial miracle which the soul worketh, and be less astonished at particular wonders; he will learn that there is no profane history; that all history is sacred; that the universe is represented in an atom, in a moment of time. He will weave no longer a spotted life of shreds and patches, but he will live with a divine unity. He will cease from what is base and frivolous in his life, and be content with all places and with any service he can render, He will calmly front the morrow in the negligency of that trust which carries God with it, and so hath already the whole future in the bottom of the heart."

一切の事象を洞観する心靈の妙用を説き來りて更に「余は新に生れて偉大なる宇宙的、精神となれり」と云ひ「不完全なる余は余自身の完全を崇拜す」と云ふ宗教の秘義を握りて日月星辰を脚下に下瞰し、永劫不變なる天地の靈法の波浪我身に溢る

を自覺し「其美無量」の莊觀を證悟し「世界」は人間心靈の活動によりて成る永久奇跡にして世に謂ふ所の普通の歴史なるものは絶無にして「一切の歴史は神聖也、宇宙は一塵裡一刹那中に表現せらる」と云ふ。これ豈一塵裡に大法輪を轉じ一粟子に大千世界を藏する底の妙諦を説破したるものにあらずして何ぞ。如是無位の神人は「一如靈玄」の境の住して法喜禪悅の三昧に入り、一切處一切時靈照の自覺に坐し、「未來永劫を擧げて一念子に藏す」るものと云ふべし。自性を識得すれば方に生死を脱す。これ「一念普觀無量劫、無量劫事即如今」と觀破せる無位真人の脱落底。「盡十方空界同じく一心の體なり」と透脱し了する禪者の古風は我がエマルソンに於て之を見るべし。

吾人はエマルソンの『超靈論』に現はれたる思想を見來りて、之を禪的思想によりて其の一面の眞理を觸發せり。超脫的神秘的直觀的内包的なるエマルソンの思想は眞に其の内容の精神に於て頗る東洋意識の色彩を帯び、而かも其の精粹純一なる點

に於ては全く禪の風光と其の致を一にするものありて存するが如し。彼が詩的哲學的にして而かも豊富なる宗教的實驗の聲として顯はしたる其の思想信念の流れが當時の思想界に於て無神論と呼ばれ異端者を以て目されたるにも拘はらず、吾人を以て之を見ればエマルソンは基督教の宗教的根本思想を最も能く發揮したるのみならず其の至純至妙の靈趣を高調したる哲人なりと云はざるべからず。

東洋意識の研究日に益盛んならんとするの時に當りて吾人は我がエマルソンの如き大哲人の思想信念を呼び來りて之を禪者の體得したる本地の面目と相對して色讀するの決して無用の業にあらざるを信じて疑はざるもの也。

臨濟の宗教

(一) 序説——四料簡

慧照禪師義玄は支那曹州南華の人。幼にして佛教に歸依し出家の後諸方に遊び、黃檗希運に謁して法を受け、終に臨濟宗の開祖となれり。師に『臨濟錄』の著あり。嗣法慧然の集する所也。師が機鋒峭峻なる棒喝と思想深邃なる宗教的實驗とは收めて此の一卷のうちにあると謂ふべし。吾人は今此の内容充實せる宗教的聖典に對して吾人の感想を語らんとす。

人は云ふ禪は不立文字教外別傳を以て宗の本旨となす、何を以てか聖典を要せんやと。吾人を以て之を見ればこれ未だ禪の禪たる本旨を了せざるの言と云はざるべからず。彼の枯禪野狐の者流漫りに『不立文字』てふ文字に囚へられて聲名句文盡く是れ自心の影現にして自體本來性空なることを了せず。徒らに文字を離すること

知りて、文字を離するの一面に局するも亦是れ一の執着に落在するものなることを知らず、悲しむべき也。況んや西天東地の佛祖或は經卷よりし或は知識よりして禪の玄境を辿り、修行證果して曾て間隙なきに於てをや。若しそれ心眼を識破し來れば一切の經卷は吾人個身の暖皮肉たると共に行住坐臥亦これ一種の經卷にあらずや。洗面喫茶彈指聲咳是れ即ち不立文字の古經也。豈敢て黃卷赤軸をのみ經卷と云ふべけんや。大宇宙大天地豈これ心靈の大聖典にあらざるなきを得んや。自己鼻頭の一動一靜これ本來佛祖の言語也文字也。唯それ禪宗に於ては他宗のそれの如く正依傍依等の特殊の經典を用ひざるのみ。道元曰く『教は赴機の戲論也。心は理性の眞實也。この正傳せし一心を教外別傳といふ』と。然り不立文字と云ひ教外別傳と云ふは『この正傳せし一心』を指して謂ふ也。一心即ちこれ佛心也。この佛心を明にするこれ禪の本旨にあらずして何ぞ。既に佛心を明むると云ふ、或は經卷よりして入り或は知識よりして入る。千差路ありと雖も要は一關を透過して本地の風光を觀するにあり。

吾人は今茲に此の一關透過眼を以て慧照禪師の『臨濟錄』の宗教觀を見る所あらんとす。師先づ上堂して曰く『山僧今日事己むを獲ず曲げて人情に順つて方に此の座に登る』と。事己むを獲すと云ひ、曲げて人情に順つてと云ふ。これ臨濟禪師の開口一番にして而かも直にこれ開口不得の所。由來宗教の體得底實感底とも云ふべきものは之を語る能はず之を説く能はず。文字に渡り説話に渡るはこれ實に己むを得ざれば也。而かも胸底に透徹し來れる意識は水の如く清く空の如く澄めり。一點の雲翳の認むべきなし。此の意識の如是相を如何にして如實に表現せしむべきか。否表現せしむべきかにあらずして既に表現しつゝある也。一切は既に露堂々の現前底也。徧界會て藏さざるの姿也。然かもこれ詩聖ゲエテの所謂『公開の秘密』也。見るものよりして見れば一切は永遠の公開也。見えざる者よりして見ればこれ永遠の秘密也。此の公開の秘密を拈じ來りて他に示す。これ開口不得なる所以也。開口不得なり

と雖も而かも開口せざるを得ざるはこれ實に己を得ざる也。曲げて人情に従ふは所謂兒を憐みて醜を忘るゝものか。

師曰く『山僧此の日常侍の堅く請するを以て那ぞ綱宗を隠さん、還て作家戰將直下に陳を展べ旗を開くこと有りや。衆に對して證據せよ着ん』と。由來綱宗に隠すべきものありや。又これ隠すべきものなりや。一切の法は君と我との眼前に歷々として明かなるにあらずや、何等綱宗に隠すべきものあらんや。若しそれ臨濟に一物の隠すべきものありとせば臨濟はこれ法の大賊にあらずや。然り彼は法の大賊也。奈所以何となれば『此の日』此の法を語りし所以のものは從來これを深く藏して現はさざりしことを暗示するを以て也。而かもこれ此の大賊なるが故に臨濟の禪觀更に深きを加ふるにあらずや。昔釋尊甚深未曾有の法を成就し給へり。これ第一希有難解の法也。これ即ち唯佛與佛の境界にあざれば能く究盡する態はざる所也。これ實に『止みなん舍利弗復た説くべからず』と云ふ所以のもの也。これ所謂閉門打睡

の境にあらずや。拈華微笑の境にあらずや。これ唯獨自明了、餘人所不見の境。道元の所謂『道本圓通爭でか修證を假らん宗乘自在何ぞ功夫を費さん、況んや全體廻かに塵埃を出づ誰か拂拭の手段を假らん。』と云ふ廻に塵埃を出づるの境也。臨濟此の境に參じて既に久し。而かも未だ之を説くべきの對機に接せず。これ彼の沈黙せる所以にあらずや。而かも此の沈黙は無聲の大雷にあらずや。若しそれ鑊錐手に在り殺活時に臨むに及んでや、東湧西沒逆順縱横與奪自在にして一切をして活劇場裡の大靜寂に立たしむ。『僧問ふ如何なるか是れ佛法の大意、師便ち喝す。』此の一喝！何等沈痛の一喝ぞ。此の一喝は即ち黃檗の棒より來る。師會て黃檗の處に在つて三たび問を發して三たび打せられしと云ふ。禪の極意詮じ來れば棒中に喝あり、喝中に棒ありと云ふべし。棒喝不二の境に參じて自由自在に之を活用し心靈の妙相を拈提す。我禪師の如きは正に宗門の大師家と謂ふべき也。

法は文字を離れて因にも屬せず縁にも屬せず。而かも禪機體得の哲人よりして觀

じ來れば一切は文字を離れたる大文字にして、此の廣大の文字は萬象に餘りて尙ほ豊か也。ただ學人信不及なるが爲めの所以に常に葛藤場裡に墮在す。若しそれ臨濟の一隻眼を以て見來れば『赤肉團上に、一無位の真人あり』て一切時一切處に於て吾人の面門より出入しつゝあるにあらずや。單に赤肉團上に於て一無位の真人を見るべきのみにあらず。星の照る所、花の咲く所、山の峙つ所、水の流るゝ所、何れの所か無位真人の微笑に觸れざる。こゝに臨濟は『看よ看よ』と云ふ。されどこれ見て見えず、見えずして看るべきものにあらずや。それ動いて動かす、靜かにして靜かならざるこれ禪の風光にあらずや。『靈は一切を神智す』と云ふ無碍の得道より見れば見即不見、不見即見の法味を掬べきにあらずや。

如何なるかこれ無位の真人。これを萬有界の一象に於て見、これを人間界の個相に於て見る。而かもこれを説くに言なく之を語るに道なし。這箇端的の妙味は水に月の宿るが如し。月濡れず水破れず。全水一月を孕み一月全水に宿りて月水一如の

趣を示す。こゝに盡十方界は是れ一箇の明珠となるにあらずや。而かも此の盡十方界は廣大にもあらず微小にもあらず方圓にもあらず中正にもあらず。これ又赤肉團上に見たる真人の姿にあらずや。臨濟は『道へ道へ』と云ふ。豈これ道ひ得べきの境ならんや。

吾人は『臨濟録』を讀んで到處『喝』の多きに驚く。臨濟禪は即ち喝禪也。これ喝せずんば徹せざるが故也。『僧あり出て禮拜す師便ち喝す』。此の僧臨濟の一喝に逢ふて徹せしや否やは吾人之を知らず。然かも臨濟が人に接する毎に一喝二喝三喝して已まざるは宗教家たる彼が本分上の慈悲心の煥發にあらずや。參玄の高士は臨濟の一喝によりて自己心靈の奥底に輝く一閃光に觸れてこゝにこゝと默契せし所のものなりて存せしに似たり。凡そ宗教上の實參實究の地に入りて悟眞の奥妙を極めんと欲する者は喪身失命を避けず慕地に進んで本來の面目を發揮すべき也。これ釋尊が『一心欲見佛、不三自惜身命』と絶叫したる所以にあらずや。これ神人基督が『其の

生命を失ふ者は之を得る』と道破したる所以にあらずや。臨濟が二十年先師黃檗の下にありて修證證果せる佛法的々の大道は靈よりして響きし宇宙の大法にあらずや。血よりして血に傳はりたる活潑々地のライフ其ものにあらずや。これ棒的宗教の本來の風光にして而かも又此の黃檗の棒的宗教よりして臨濟の喝の宗教と嫡々相承して脱化し來れる所以にはあらずか。吾人は臨濟の宗教意識のきびくしき機鋒に接し來りては如今那箇の一喝を得て喫せんことを思ふや切なり。

それ宗教上の靈活なる一隻眼を開いて森羅萬象を觀じ更に社會一般の事相を觀じ來れば一切は個々相の眞を語りて而かも又此の個々相のうちに一如性、統一性を示し、平等に即しての差別あり、差別に即しての平等あり、平等を離したる差別あり、差別を離したるの平等あり。離即相反不即不離、圓轉妙動して而かもその神秘の眞相を破らす。鳥飛んで鳥の如く魚行いて魚に似たるものあり。當面歷々たる現實の事相は最も明瞭にして最も純一なるが如しと雖も其の本來の眞相に至りては最も神

秘にして最も幽玄なり。之を哲學上に觀じ來りて或は客觀主義と云ひ或は主觀主義と云ひ或は唯心論、汎理論、汎神論、物心二元論、唯物一元論と云ふ。其の他あらゆる哲學系統は古來の思想家の意識を流れて或は淵となり或は瀨となりて東西の歴史の頁を貫流し來れり。所謂『哲學史』なるものこれ也。哲學史なるものは此の宇宙の眞相、實在の當體を抽象的論理を以て研究せんとしたる結果宇宙の眞相を概念化く去り、活ける事實其のものを死したるものとして取扱ふの愚を敢てなし來れるものゝ如し。恰も人間の生理的關係を知らんが爲めに死體解剖をなすが如し。死體解剖豈活きたる人間の如實の生理を語らんや。宇宙の眞相其のものゝ内部に直入し其の内觀的直覺よりして之を如實に看取するにあらずんば曷んぞよく其の眞相を悟り得んや。

臨濟の一刀。其の銳利なる鋒刃をかざして直ちに此の宇宙の活機を解剖するや、所謂臨濟の四料簡なるものを以てす。曰く『奪人不奪境』。曰く『奪境不奪人』。曰く

『人境俱奪』。曰く『人境俱不奪』。即ちこれ也。若しそれ之を現代語に譯し來らんか。奪人不奪境は唯物論か、奪境不奪人は唯心論か、人境俱奪は宇宙迷妄論或は汎神的唯理論か、人境俱不奪は物心二元或は物心並行論か。而かもこれ等の配當は只その名目論上の配當にして其の内容實質に至りては決して現代語を以て翻譯すべきものにあらざるべし。而かも世の所謂哲學者なるものは是等のうち其の一を取りて以て自己所論の立脚地となし敢て他説を反駁して以て自ら得たりとなす。宇宙は豈斯くの如き單純なる理性的論理一片の概念論を以て律し得べきものならんや。これ古來の哲學者の多くは誤れる所にあらずや。理性は宇宙解釋の一方法たるは吾人も之を認む。而かも理性萬能主義は吾人の如何にしても首肯すること能はざる所也。臨濟が四料簡を掲げ來りて此の四者を以て不即不離の妙趣を語る所何等の深玄なる消息ぞや。彼はこれを以て個々孤立の一法と觀じたるにあらず。所謂哲學者的の筆法を以て實在と事相とを一束して之を概念化せんとせしにはあらず。彼が之を以て脈搏

相感じ靈々相響くの一如性と觀じたるの趣は『有る時は』云々の靈活なる見地によりて之を見るべきにあらずや。此の四料簡の利刀をかざすこと實に縦横無盡自由自在と謂ふべし。斯くの如くにして始めて活宇宙活人間活人事の真相を透見し得べきにあらずや。

然らば即ち如何なるかこれ奪人不奪境。吾人は此の一問に對して吾人の見解を呈せんはこれ愚の極也。奈所以何なれば臨濟既に之に對して明答を與へつゝあるを以て也。曰く『臨濟發生地に鋪くの錦、櫻孩髮を垂れて白きこと絲の如し』と。臨濟は何が故に茲に奪人不奪境に向て這箇の應答をなせる。何ぞ論理明快の一語を以て之を答へざる。私かに思ふに由來宗教上の實參實究底に至りては其の實參の光景を其のまゝに語らんとするや其の刹那既に其の真相を失す。鳥飛べば毛を落し魚行けば水濁るものあるを如何せん。茲に至りては眞の『實』^{レアリテ}其のものは其のもの既に言語を絶せるにあらずや。こは文字上に於て消極的也と雖も其の意識の内容に於ては

積極的態度也。此の積極的態度を語らんとすればこゝに詩語燦として花さくものなくんばあらず。是に至りては詩と宗教とは相接吻し相握手するの光景に立つべきにあらずや。所詮は詩的表象によりて此の如實の大景を描き出す外に其の表現法を見出す能はざる也。これ禪家に於て多くの祖師が自家の風光を語るに彼の『頌』なるものを以てする所以にあらじか。宗教の真意は語るべからず論すべからず又説くべからず。若しそれ強いて之を言はば唯それ歌ふの一路あるのみ。これ詩は即ち神に迫り神は直ちに詩に返照すべきの境にあらずや。臨濟が此の一境に參じて天地の大景を鮮かに意識したるの一刹那彼の心靈は無韻の詩語を以て滿されつゝありしにあらざるか。これ彼の此の一句に對して詩的象徴を以て其の奥妙を歌ひし所以也。

彼は更に如何なるかこれ奪境不奪人との一問に對しては『王令己に行はれて天下に徧ねし將軍塞外に煙塵を絶す』と歌ひ、如何なるかこれ人境兩俱奪との一問に對しては『並汾絶信、獨處一方』と歌ひ、如何なるかこれ人境俱不奪の一問に對して

は『王寶殿に登れば野老謳歌す』と歌ふ。然りこれ真に詩也。説くべからず歌ふべき也。音波朗々として誦し來ること數番。初めて其の妙味を解すべき也。榮西の『大なる哉心や天の高きも極むべからず心は天の上に出づ。地の厚きも測るべからず心は地の下に出づ。日月の光も踰ゆべからず心は日月光明の表に出づ。大千沙界も窮むべからず心は大千沙界の外に出づ』と云ふもの實にこの廣大無限の靈的意識の自由自在を説き得たるものと謂ふべし。此の一心を體得して真正の見解を得ば生死に染ます去住自在也。『殊勝を求むることを要せざれども殊勝自ら至る』と云ふ臨濟の道得底は宗教的實驗の光明を放つものと謂ふべき也。

(二) 自己の真相

世に所謂學者なる者あり。謂へらく宗教は絶對的知識の研究なりと。斯くて彼等は抽象的知識の研究的態度を以て此の『絶對』の前に立つ。恰も蚊鐵牛を嚙むに似た

り。齒を下し難きを如何せん。彼等は曰く絶対は知り難し。絶対は研究的知識の對象にあらず。宇宙の實在は知識を以て認識し得べきものにあらず。宗教家の所謂神なるものは單に主觀上の空想に過ぎずと。斯くの如きは知識の冷やかなる認識の一、面を以て物の『全』を見んとするの誤まれる見方と謂はざるべからず。『全』なるものは斯くの如き分析的零細の知識を以て見るべきものにあらず。宇宙の本來の實相は斯くの如くにして見るべく餘りに大に過ぎたり餘りに深に過ぎたり。然り大也深也。大也深也と雖も斯かも此の大や此の深や宗教的直覺の靈眼を以て觀じ來れば一草一木一塵一法の中に猶ほ此の大と此の深との現在しつゝあるを見到せずんばあらず。所詮は全に對するに全を以てせざるべからず。神を見るに神を以てし、佛を見るに佛を以てす。吾人は之れを呼んで見神眼見佛眼と稱す。此の見神眼見佛眼を以て見來れば三世十方何れの處にか神を拜し佛に遇はざらんや。

これ臨濟の一隻眼を以て『自』の真相を觀じて茲に事相其のものゝさながらの姿

を見たる所以にあらずや。此の見地を以て彼は當時の所謂宗教的學僧なるものに對して一大痛棒を與へて曰く『如今の學者得ざることは病甚の處にかある。病不自信の處にあり、爾若し自信不及ならば即ち忙々地にして一切境に徇つて轉じて他の萬境に回換せられて自由を得ず。爾若し能く念々馳求の心を歇得せば便ち祖佛と別ならず。爾祖佛を識ることを得んと欲するや、祇だ爾が面前聽法底是也』と説破し來りて面前聽法底と祖佛との一如を高調して以て宗教本來の直道は『自』の真相を外にして求むべきものにあらざることを明にす。これ現代泰西の宗教思想家が多く宗教の出立地を自我の意識に置くとその趣を同ふするものありて存するにあらずや。宗教的内在思想の高調は泰西に於ては是れ主に近代の思潮にして最近の宗教思潮は次第に此の内在的傾向を見るに至りしが如しと雖も東洋意識に於ては此の内在思想は古來より發達し來れるものにして所謂汎神觀的の宗教思想は東洋的思潮の特色とも謂ふべきもの也。汎神的にして然かも唯心的傾向を帯びたる此の宗教的色彩は臨

濟の宗教意識に於て其の色彩の最も鮮明なる特色を見得べきにあらずや。臨濟曰く『**彌祖佛と別ならざらんことを要せば但外に求むることなかれ。彌が一念心上の清淨光是れ彌が屋裏の法身佛也。彌が一念心上の無分別光是れ彌が屋裏の報身佛也。彌が一念心上の無差別光是れ彌が屋裏の化身佛也。此の三種の身は是れ彌が今目前聽法底の人也。**』と。これ哲學者スピノザが『各の實存せる形體は即ち個物の觀念は皆必然的に神の永切にして無限なる本質を自己の中に包有す。』(Jede Idee eines jeden wirklich existierenden Körpers, oder Einzerdinges, schliesst das ewige und unendliche Wesen Gottes notwendig in sich.) と云ふ哲理を更に宗教的に直覺し識味し來れる經驗の聲にあらずや。茲には實在は無限の姿にて其の本質永切の必然性を『自我』の姿の中に現はしつゝある也。佛祖と自己と即一の境に立てる也。神に在る限りに於ける個物の眞の存在は『自』の一面に其の全境を圓現しつゝある也。スピノザの謂ふ所の本體即神、神即自然の境地を自己即佛、實在即自我の宗教的達觀境に翻譯せるも

のと見るべきか。スピノザの思想の餘りに抽象的概念的なるに反して臨濟の意識の寧ろ具象的洞觀的なるは彼の哲學的にして此の宗教的なるの相違よりして來れる眞理の解釋の根本的特色とも見るべきか。此の臨濟の見地は正に之れ宗教上の活佛活祖の眞意を得たりと云ふべき也。

臨濟の宗教的意識の流れは更に向上の一路を辿りて此の法身佛、報身佛、化身佛の『此の三種の身は是れ名言亦是れ三種の依なり』と喝破して直下に如來地に參じて如々の本來地を識らしめんとす。由來通佛敎に於ては此三身觀は宗教上の幽玄なる法則として最も重する所の教義なり。然るに今臨濟は之に向つてこれ又一個の名言に過ぎず亦是れ三種の依に過ぎすと云ふ。宗教上の信條的教義。ドグマ的教權の一切を破し去りて『法性の身法性の土明かに知りぬ此れ光影なることを』と説いて唯要する所のものは此の『**光影を弄する底の人を識取**』するにありといふ。臨濟の宗教は其の最も深き所に於て『**人**』を識るにあり。全人の靈覺！。宗教の眞理は所詮

はこれを外にして他に求め得べきに非ず。臨濟の宗教眼は正しくも此の宗教的當面の目前歷々底の活問題を捉へ來りて『これ諸佛の本源一切處是れ道流歸舍の處なり』と云ふ。何等の達眼何等の深邃。

目前歷々底の此の活問題を捉へ來りて直下に無間斷の眞際に入る。觸目皆な是ならざるはなし。淨嚴、花と薰じ、清香、水と流る。現實の生は頓て之れ理想淨土の涅槃境にあらずや。茲に觀美の意識は信念の光と溶けて流れて神人一如の心靈界は有象有限の塵界の巷に圓かに現じつゝあるを見ずや。あはれ奇すしきは此の淨嚴世界にもある哉。而かもこれ『祇だ情生すれば智隔たり想變すれば體殊なるが爲めの所以に三界に輪廻して種々の苦を受く。』若しそれ宗教上の心眼を擧げて臨濟的見地を以て觀じ來れば一切處『甚深ならずと云ふこと無く』一切時『解脱せずと云ふこと無し』。一切處に意識微妙の法味を感じ、一切時に解脱向上の道を辿る。こゝに『道流心法無形十方に貫通す。眼に在りては見と云ひ、耳に在りては聞と云ひ、鼻に在りては香を嗅ぎ、口に在りては談論し、手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。』

本是れ一精明分れて六和合と爲る。一心既に無なれば隨處に解す』と。これ一切の馳求心を歇得して報化佛頭を坐斷し去るの境にあらずや。これ臨濟の見得したる無碍の一道也。茲に至りては『十地の滿心は猶ほ客作兒の如し。等妙の二覺は擔枷鎖の漢。羅漢辟支は猶ほ廁穢の如く菩提涅槃は繫驢櫛の如し』と云ふ禪機の玄旨を把捉して行かんと要すれば即ち行き、坐せんと要すれば即ち坐し『一念心の佛果を希永する無し』てふ本來無一物の眞正道人の靈境に立つ。これ豈十方に通じ目前に現用する底の心法無形の本地にあらずや。

此の臨濟の宗教觀の如實の風光は之を文字に現はし難く之を談論に盡し難し『纔に和尚に咨す』と道へば『我早く辨じ了れり』と云ふ。由來宗教上體得の一境は電光石火の如く之を捕へんとするに影なく之を追ふに跡なし。臨濟は此の一境を指して『祇だ我が見處の別なるが爲なり』と云ふ。然り臨濟の道眼は高く凡流の上に出

でたり。彼が宗教的洞見は『外凡聖を取らず内根本に住せざる』無執着の真に觸れて解脱の大海に游泳せし者と云ふべき也。

(三) 凡聖不二——無碍人の自由

宗教上の玄底に掬み來りて本來の面目を徹見すれば真理の妙相は吾人日常睹聞の間に在り。これ莊子が『道は螻蟻に在り稊稗に在り瓦甍に在り屎溺に在り』と云ふ所以也。我が臨濟は此の道の普遍性を認めて『爾且く隨處に主と作れば立皆皆真なり』と説く。然り立處皆真なり。此の皆真の域に立て宇宙の風光を觀じ來れば一切は平等一如の本質を發揮して道の本體は佛に在りても増さず衆生に在りても減せざる底の實相を見るべき也。解脱の大海は洋々として到る所に波打つ。而も今時の學者總に法を識らず。平等の一道に着在して平等の差別相を觀取する能はず。徒らに惡平等に墮落して善惡無差別の邪見に入る。これ聖僧道元が『今の世に因果を知ら

ず業報を明らめず三世を知らず善惡を辨へざる邪見の黨侶には群すべからず』と叱咤して歴然たる因果の道理を明にして惡平等の野狐禪一輩の徒に向て一大痛棒を加へたる所以のものなり。臨濟も此の一面の弊を看破して當時の學者を叱咤して曰く『猶ほ觸鼻羊の物に逢着して口裏に安住するが如く奴郎辨せず賓主分たず、是の如きの流邪心にして道に入る。鬧處には即ち入ることを得ず名けて眞の出家人と爲さんや正にこれ眞の俗家人也』と。思ふに現代の所謂禪を言ふもの亦此の臨濟の一喝に價するの徒輩少なしとせず。禪てふ隠れ家を以て沒道德善惡無差別の別天地と見る。斯くの如くにして彼等は人間本來の道心を麻痺せしめ禪を學んで却て不道德非倫理的行動を敢てして恬として耻づる所なし。以爲らく禪は本來斯くの如きものなりと。嗚呼實に悲しむべき也。臨濟をして之を見せしめば今の所謂禪を言ふもの(吾人は敢て之を言ふ者と云ふ眞に禪に參するものにあらざればなり)は唯それ口裏に安在するの者流のみ。若しそれ眞の禪的風光を體得したる眞人の境界は『須く平常

真正の見解を辨得して佛を辨じ魔を辨じ眞を辨じ偽を辨じ凡を辨じ聖を辨すべし』斯くの如くにして始めて普遍平等たる道の本體も各其の差別相を明かにして本然の妙光を發揮すべき也。而かも明眼の道流は『魔佛俱に打し』來りて凡聖不二の靈相を此の差別海のうちに見る。こゝに平等にして差別、差別にして平等たる心靈界の妙樂は永へに皆歸妙法の千波萬波と響くものあるべし。

佛魔俱打の宗教的見地に立て一切の法を觀じたる臨濟は『爾一念心の疑處是れ箇の魔』なりと云ふ。然り宗教の天地は信の天地なり信のある所これ神のある所佛のある所也。信眼を以て仰ぎ見れば到る所神を拜し佛を見るべし。若しそれ疑念一たび起らば一切處これ黒闇々。漆桶不會。蓋天蓋地模索不著の境也。これ聖ヤコブが『疑ふことなく信じて之を求むべし疑ふ者は風に撼かされて翻へる海の浪の如し斯くの如き人は主より何物をも受くると思ふ忽れ』と云ふ所のもの也。茲に疑心は疑問にあらず。疑問は向上の一路也。大疑大悟を生ずと云ふにあらずや。而かも何物

をも信せざる本來の懷疑は其のもの既に之れ魔道也、宗教的自殺也精神上の自滅也。信のなき所光明はあらず。禪の奥旨は悟道也と云ふ。而かも吾人を以て見來れば禪も亦これ確に信仰の本義に立つ所のもの也。信仰を離れたる悟道は空名のみ空名裏には内部生命の充實を認むるに由なし。これ外道禪也。若しそれ『萬法無生に達得して心幻化の如くにして更に一塵一法無うして處々清淨なる』境界に立たんか。これ即ち謂ふ所の『佛』の境地にして無古無今得る者は便ち時節を歷ずして、無修無證無得無失の境なり。一切時中更に別法無きの境也。これ目前孤明歷々地に聽く所の十方に通貫し三世に自在なる『一刹那の間に法界に透入する』無碍人の自在境に非ずや。これ『一切處に向て國土に游履して衆生を教化すれども未だ曾て一念を離れず隨處清淨にして十方に透つて萬法一如なる』玄底を識破したる英靈漢の境域にあらずや。基督が『心の清淨なる者は神を見奉る』と云ふ所以の消息と其の妙趣を一にするものと謂ふべし也。

此の見神眼見佛眼ありて宗教上のこと始めて語るべし。所詮は清淨の一境を體得するにあり。此の一境を透過するにあらずんば道の本質を味ひ靈光雨と降る天地の光景を仰ぎ見るに能はざる也。而かもこれ平常見路の現實界裏の光景中に在つて之の一境に觸れざるべからず。これ臨濟が「大丈夫兒は今日正に知る、本來無事なることを」と説き「祇だ是れ平常無事也、屙屎送尿著衣喫飯困じ來れば即ち臥す愚人は我を笑ふも智は乃ち之を知る」と云ふ所以のもの也。これ基督が「人の子來りて食ふことをなし飲むことをなせば又食を嗜み酒を好む人稅吏罪人の友也」と云ふ然れど智慧は智慧の子に義と爲らるゝ也」と云ふと其の符を一にするものと謂ふべき也。古來の聖者多くは然り、實にこれ宗教上の幽玄の一境に分け入りては漫りに世の凡俗の容喙を許さざる所のものありて存するに由らすんばあらず。

それ宗教上の眞理を體得したる神人の本面目は「直に是れ現今更に時節なし」と云ふ眞正の見解に立つて圓明の風光を了すべき也。淨土の中に向て凡を厭ひ聖を欣

ぶが如きは取捨未だ忘せず染淨の心未だ全く消せざる未了の徒輩のみ。斯くの如くにして曷ぞよく禪の本旨を明らめ得たりと云ふべけんや。敢て我れ禪を解し道を解すと道ふこと莫れ。「辯懸河に似たるも皆是れ造地獄の業」ならずとせんや。

臨濟が「但だ一切凡に入り聖に入り染に入り淨に入り諸佛國土に入り彌勒樓閣に入り毘盧遮那法界に入つて處々に皆國土を現じて成住壞空す。佛世に出で、大法輪を轉じて却て涅槃に入つて去來の相貌有ることを見ず。其の生死を求むるに了に不可得。便ち無生法界に入り、處々國土に遊履し華藏世界に入りて盡く見る諸法の空相にして皆實法なきことを。唯聽法無依の道人のみ有り。是れ諸佛の母也。所以に佛無依より生ず。若し無依を悟れば佛も亦無得なり、若し是の如く見得せば是れ眞正の見解なり」と説き來りし一段の眞理は臨濟の道得底を最もよく發露せるものと謂ふべき也。一切を成住壞空の所成と觀じ涅槃界裡猶去來の相貌を見ざる一隻眼を拈提し來つて「唯聽法無依の道人のみあり是れ諸佛の母也」と云ふ。此の聽法無依

の道人に法の本體を認め其の絶對的實在相を認めし臨濟の宗教見は唯心的實在觀の宗教意識とも見るべきか。あらずあらず。如是の一道は文字に約すべく餘りに幽の餘りに深也。此の『無依』の一境。此處眞に實參すべきの境にして識認以上也。理知の問題を超じて直ちに體得の本地に入る。これ臨濟の學究徒にあらずして得道の老骨たる所以也。若し人此の本地に入らずして此の境を擬せんとするはこれ全く空詮義也。空評價也。臨濟に於て何の關する所かあらんや。唯正聖の實驗と今人の實驗と感應交孚脉々相交響するものありて始めて其の意義を存すと云ふべきのみ。

由來宗教上の洞觀の現境は他の評價を容さず。こゝ絶對の地也。解脱の地也。超詣也。靈玄也。高趣の地也。深奥の域也。臨濟の宗教的意識は時に此の一境を辿りて天馬空を行くの概あり。鬱密林中獅子悠遊の觀あり。若しそれ此の見地よりして見來ればあらゆる學人も『名句に執し他の凡聖の名に礙へられ道眼障へて分明なることを得ず』して徒らに五里霧中に彷徨せんのみ。備若し生死去住脱著自由なるこ

とを得んと欲せば即今聽法底の人を識取せよ。』茲即ち無形無相無根無本無住處にして活潑々地なり。臨濟の此の一見識に接し來りては即今禪に走るの徒輩正に倒退三千里の感なしとせんや。吾人は臨濟の禪機に觸れて一步は一步より其の深を辿り其の嚴に驚き其の妙を味ひ以て更に其の全人格に現はれたる眞理の風光を偲ぶ所あらんとす。

(四) 當體の秘密

凡そ宗教意識の最深底に沈潜して眞理の真相を達觀し來れば如々にして玄々たる本來の妙諦は一切の文字を雜れ一切の言語を空して眞理其のものゝ當體の秘密に入る。こゝ眞にこれ臨濟が『用處祗是れ無處』と道破し來れる一境にして、此の一境の神秘の妙相はこれ謂ふ所のミステリトなり。此の一境に逢着して其の如實の真相を描破せんと欲すれども得ず。これ我が臨濟が其の眞理の當體に衝き當りて之を

『覓著すれば轉た遠く之を求むれば轉た乖く之を號して秘密となす』と唱道したる所以のもの也。宗教上の眞理の秘密は實證實見の地に至りて初めて味ふべきもの、之を理知の詮義によりて評價せんとするは所詮不可能事なり。宗教的眞理の當體に對しては明快なる理知の利刀も要するに箇の夢幻の伴ふに過ぎざるのみ。念々無常の感想に導かれて此の世界の中に向て解脱向上の一路を辿る。こゝ眞にこれ宗教的眞理に達するの第一著子。

而かも此の念々無常の向上の一路を辿るに當りてや解脱の本地に達せんには幾多靈界の勇者をして逡巡躊躇せしむるものありて存す。其の轟なる時は即ち地水火風を被り細なる時は則ち生住異滅の四相の所逼を被る。眞箇に此の玄旨に參せん者は此の『四種無相の境を識取して境に擺撲せらることを免れんことを要す』。如何なるかこれ無相の境。臨濟之が解決を下して曰く『備が一念心の疑は地に來り礙へらる。備が一念心の愛は水に來り溺らさる。備が一念心の瞋は火に來り熱か

る。備が一念心の喜は風に來り飄へらる。若し能く是の如く辨得せば境に轉せられず、處々境を用ひ、東涌西沒南涌北沒、中涌邊沒邊涌中沒、水を履むこと地の如く地を履むこと水の如くならん。何に縁りてか此の如くなる、四大の如夢如幻に達するが爲の故なり』と。此の所變の 在りて境に轉せられずして能く遠々境を活用して自由自在の靈腕を如意に發揮する所。嗚呼これ眞に解脱風光の本地に立てる勇者の男々しき態度にあらずや。一切を脚下に踏まへて立てる此の臨濟の風骨は正にこれ實に能く禪者の眞骨頭を曝露したるものと謂ふべきにあらずや。

去住自由なる宗教上の徹見せる一境に立て本地の風光を味ひ來れば一切は皆微妙の光を放て萬有清淨の齊觀に入る。これ宗教意識の流れて觀美的觀照の意識に溶け込みしもの。これ聖者パウロが『一切我に可ならざるなし』と體得したるの境地也。我が臨濟は此の地に參じて『山僧が見處に約せば嫌ふ底の法なし』と云ふ。此の一切皆美皆眞皆聖の見地より見來れば吾等は一切處に於て古聖と相見し時空を徹して

靈々相感應する所のものあるべし。これ臨濟が『祇だ爾が目前の要處始終異ならず處々疑はざる、此箇是れ活文殊。爾が一念心の無差別光處々總に是れ眞の普賢。爾が一念心自ら能く縛を解して隨處に解脱す、此は是れ觀音三昧法なり』と云ふ所以のものにして、神人基督がヘルモン山上の光明を浴び來るや其の聖姿は變じて『其の面は日の如く輝き其の衣は白く光れる』普照光耀のうちに立ちて古の聖者『エリヤとモーセ現はれて偕に語りぬ』と云ふ光景と其の宗教的イリュミネーションの調を同じうするものと云ふべき也。

此の宗教的意識の遍照境は心靈無限の向上也。靈覺也。超脫也。澄徹也。而かも此の宇宙最深の新事相は新風光の眞理として茲に現實界裡に微笑しつゝあるなり。見よ一木一草一塵一石偕に皆此の新事相の風光を語りつゝあるにあらずや。天を照し地を照し一切を普遍の無碍光によりて包める宇宙の大靈は更に我が臨濟の意識に新啓示として現はれたり。臨濟が『境に乗ずる底の人を見るに是れ諸佛の玄旨なり』

と説き去りし這箇無依の道人、境に乗じて出で來る光景を拈提す。曰く『若し人ありて出で來りて我に求佛を問へば我即ち清淨の境に應じて出づ。人有つて我に菩薩を問へば我即ち慈悲の境に應じて出づ。人有つて我に菩提を問へば我即ち淨妙の境に應じて出づ。人有つて我に涅槃を問へば我即ち寂靜の境に應じて出づ。境は即ち萬般差別なれども人は即ち別ならず。所以に物に應じて形を現す、水中の月の如し』と此の物に應じて形を現する玄々妙々の這箇の消息は直に須く是れ靈界の大丈夫にして始めて得べし。此の無碍得道の一境は臨濟の如き無依の道人にして始めて達し得べきの地也。圓轉妙轉して一切の境に乗じて境に約せられず。境に應じて出沒自在也。新風光の鍵を握れるものにあらずんば曷ぞ此の圓位に立ち得んや。是れ臨濟が『夫れ 噯の器の如くんば醍醐を貯ふるに堪へず』と喝破して新酒は新しき革囊に容るべきことを唱道したる所以也。此の立處皆眞の眞理は一切の境を脚下に顧みて立てる聖者の實得したる脱落の響きなり。こゝに理想は現實の境に即して立ち而

かも此の現實裏より無限に圓現し來る理想の光明は春の水の如く流れつゝあり。

『但能く念を息めよ更に外に求むること勿れ』とは一切の宗教的光明に徹見せんとする學人に對する頭上の一針。而かも此の『能く念を息めよ』、『更に外に求むること勿れ』と云ふ諸縁を放捨し萬事を休息して善惡を思はず是非を管せずして意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて而かも作佛を圖らざる坐禪三昧に入りて回光返照の退歩を學し來りて所謂『身心自然に脱落して本來の面目現前する』底の機要に接し來らん乎。これ臨濟の『物來らば即ち照せ』と云ふ自照靈然の靈覺に立てるの境にして宗教的意識の玄極に達して全人格其のもの頓て宇宙の生命と融化して光明とこぼれつゝある所のものと云ふべき也。

臨濟の宗教觀は『一念心三界に生じて……一刹那の間に便ち淨に入り穢に入り彌勒の樓閣に入り三眼國土に入つて處々に遊履して唯空名のみを見る』と云ふの一地に入れり。

何を三眼國土と云ふ。師即ち説いて曰く『我爾と共に淨妙國土の中に入つて清淨衣を着けて法身佛を説き、又無差別國土の中に入つて無差別衣を着けて報身佛を説き、又解脱國土の中に入つて光明衣を着けて化身佛を説く』と。此の三眼の國土は皆是れ依變なり。此の依變の妙機に觸れて心外無別法の見地に坐せば『佛を求め法を求む即ち是れ造地獄業』と云ふ峭峻の一路を辿りて『佛と祖師と是れ無事の人也』と云ふ平々坦々の大道に出づ。此の大道車馬共に通ずる所。而かもこれ明眼の衲僧も辿り難きの所。我臨濟は此の一路を自家の手裏に把住して而かも放行自在也。悠々として坐せる臨濟古佛の聖姿何ぞそれにくらしき程超脱の光りを放てる。若しそれ一般の瞎禿子ありて飽く迄飯を喫し了つて便ち坐禪觀行し念漏を把捉して放起せしめず、喧を厭ひ靜を求むるあらば是れ即ち外道の法なり。宗教の體得底は斯くの如くにして得べきものにあらざる也。これ臨濟が『爾若し心を住して靜を看、心を擧して外に照し、心を攝めて内に澄ましめ、心を凝らして定に入る。斯く

の如きの流皆是れ造作なり』と云ふ所也。若しそれ法の大神を消化して『敢て佛を毀り祖を毀り天下を是非し三藏教を排斥し諸の小兒を罵辱して逆順の中に向つて人を覓むる底』の大見識の態度に立つて『一個の業性を求むるに芥子許りも不可得也』と説破するに至りては大善知識たる我が臨濟の如くにして始めて如是の一關を透過し了するを得べきなり。

(五) 意識直接の自證

英雄にして始めて英雄を知る。佛の境界に參じたる者にあらざれば佛の境界は識ること能はざる也。これ即ち謂ふ所の唯佛與佛の境地にして宗教上の實驗に入つて其の醍醐味を味ひたる者を他にしては到底其の眞味を解し難しとする所也。こゝ實に難入難解の一境にして而かも此の一境あるを以ての故に法の價值大千世界よりも尊きものありて存する也。神人基督が『預言者は其の故郷に尊ばれず』と宣じたま

へる所以のものも要するに大聲俚耳に入らざりしを以てなり。凡そ宗教上の至眞神妙の靈趣に至りては之を凡俗に味はしむるに於ては誠に至難中と云はざるべからず。至道無難唯嫌揀擇ありと雖も宗教の極致は藝術の如く、其の妙諦を體得すると云ふに至りては實に難行道中の難行道なりと謂ふべき也。これ臨濟が『古へよりの先輩到る所に入信せず。遞出せられて始めて知る是れ貴きことを』と云ふ所以にあらすや。人信せず却てそこに法の貴きを知る。『摩尼珠人識らず、如來藏裡に親しく收得す』と永嘉の歌へる所のもの亦所以なきにあらざる也。夫れ然り是を以て『若し到る處に人盡く肯はば什麼を作すにか堪へん。所以に獅子一吼すれば野干腦裂す』と云ふ臨濟の獅子吼も亦快ならずや。更に臨濟は『道の修すべきあり法の證すべきあり』と説き來りて修證不二なる本來本具の妙道を發揮せり。由來禪の要する所のものは修外に證を求むるにあらず、證外の修を認むるにあらず。眞理の眞相は修證一如にして修後に證なく證前に修なし。これ道元が其の『辨道話』に於て

『佛法には修證これ一等なり。今も證上の修なるゆるるに初心の辨道即ち本證の全體なり。かるが故に修行の用心を授くるにも修の外に證をまつおもひなかれと教ふ。眞指の本證なるが故なるべし。既に修の證なれば證にきはなく證の修なれば修にはじめなし』と示し來りて『妙修を放々すれば本證手の中にみり。本證を出身すれば妙修通身に行はる』と云ふ甚深微妙の一句を以て此の眞理を明にしたる所以なり。我臨濟も『爾何の法を以て證し何の道を修せんとか説く。爾が今の用處什麼物をか缺少し何の處をか修補せん』と提唱して頭上漫々脚下漫々たる道の當體を闡明し、人人本具の靈性を看破せり。而かもその道の道たる所以のものは之を了するに難く之を體する愈々難し。これ臨濟が『後生の小阿師會せずして便即這般の野狐精魅を信じて他の事を説き他人を繫縛して道は理行相應し三業を護惜して始めて成佛を得と許す。』と叱して彼の一輩の僞宗教家に向て一大鐵槌を下したる所以也。故に言ふ『若し人道を修せば道行せず。萬般の邪境頭を競うて生ず。智劍出で來りて一物無

し。明頭未だ顯はれざるに暗頭明なり』と。あゝこれ古人の謂ふ所の平常心是道と云ふ所のものにあらずや。所詮宗教上の眞理は尋常茶飯のうちにある。現實に即して其の現實裡に神秘の脈搏に觸るゝこれ宗教上の生命にあらずや。是の宗教上の生命は現實の生活を外にして求むべきものにあらずや。英語或は獨逸語に謂ふ所のライフ或はレーベン(Life or Leben)なる文字は共に生活を意味し人生を意味し又生命を意味するはこれ實に味ふべきの文字にあらずや。由來『生活』と云ひ『人生』と云ふ而かも其の眞意義に至りてはこれ即ち『生命』の發露たるに過ぎず。生命を外にして生活なく又人生なし、宗教とは此の人間の生活てふ人生の現實界に於て其の生命の秘義に觸れて其の生命の源泉に掬み來りてそこより流れ來る光明に浴して生くるの謂にあらずや『生くる』！ 宗教上の妙諦は此の一語に盡くと云ふべき也。吾人は思ふ『生』を外にしては人生なく宗教なしと。現代謂ふ所の『生』なるものはこれ即ち臨濟が『現今目前聽法無依の道人、歴々地に分明にして未だ曾て缺少

せず』と云ふ内部生命の充實せる境界を把住せる得道底の道人の意識裡に見るべき所のものにあらずや。これ即ち佛祖と別ならざる所の者也。『心々不異なる之を活祖と名く』と云ふ所のものなり。

如何なるか是れ心々不異の處。師曰く『爾問はんと擬す早く異にし了れり』と云ふ。一切の宗教上の見解は問はんと擬すれば早く既に其の真相を失すと云ふ所のものなり。殊に心々不異の境の如き活祖の境界に於て然りとす。嗚呼これ意識直接の自證也。當面現前の歷々底也。見よこゝには久遠劫來の天池の法音、靜かに暗夜の大空を流るゝ無碍の星光のその如く、いさゝやかにぞ我心の絃の響に傳はりつゝあるを。人間の心靈一朝豁然として此の本來の面目に醒め來る時、我が臨濟の所謂『三乘十二分教は皆是れ不淨を拭ふの故紙也』と勘破し『爾若し佛を求めば即ち佛魔に攝せられん。爾若し祖を求めば即ち祖魔に縛せられん』との大見識を開いて無求、無爲の一境に立つて露堂々たる金風體露の新直覺の新啓示を味ひ光明無碍の三

昧に游泳するを得べき也。

(六) 純粹意識の體驗境

誰か云ふ三十二相八十種好是れ佛なりと。無限絶對の究竟佛は色身にあらず相形にあらず。而かも此の無限の實在が自個顯現の制約に入りては無限の有限化てふ約束に従はざるべからず。これ古人が『如來舉身の相は世間の情に順せんが爲めなり』と説く所以也。これ聖ヨハネが『それ道肉、體となりて我等のうちに宿れり。我等其の榮を見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして恩寵と眞理とに充てり』と云ひ又『それ神は其の生み給へる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり』と云ふ所のものと其の宗教的意識の流を同うす。『有身は覺體にあらず無相は即ち眞形』なりと雖も無限は無限其の物としての存在は虛名のみ空聲のみ。而も三十二相と云ひ八十種好と云ふ虛名空聲裡に無限の有限化を見る。即ちこれ宗教たる所以のものにあらずや。

然も此の有限裏に無限の姿を憧憬し『色界に入つて色感を被らず。聲界に入つて聲感を被らず。香界に入つて香感を被らず。味界に入つて味感を被らず』。これ真に無依の道人の解脱境にあらずや。これ『凡ての事に誘はれたれども』超然として一切に脱落せる基督の心境と相合するものにあらずや。真佛無形、真法無相の根本義は更に真佛有形、真法有相の妙理と脱化し來る所なくんばあるべからず。これ所謂無中の有にあらずや。迥然獨脱にして有無共に拘はらざる臨濟の宗教見は『十方の諸佛現前すとも一念心の喜び無く三塗地獄頓に現すとも一念心の怖れ無し』と云ふ所に入て有中に無を觀じ無中に有を觀じたるものと謂ふべき也。

何に緣りてか能く斯くの如くなる。曰く『我れ諸法の空相あるを見るに變すれば即ち有。變せざれば即ち無。三界唯心萬法唯識。所以に夢幻空華何ぞ把捉を勞せん』と。此の三界唯心萬法唯識の思想は人をして目前現今聽法底の人のみ有つて火に入つても焼けず水に入つても溺れざる得道無碍の一道に立たしむ。茲即ち『佛に逢う

ては佛を殺し祖に逢うては祖を殺し……物として拘はらず透脱自在なり』と云ふ本地にして古人の所謂『心は萬境に隨て轉す轉する處實によく幽なり』と云ふ甚深絶妙の宗教的意識の最高調に上れるものと謂ふべし。此處法喜禪悅の境。身光自ら照らすの境。

此の一境を味ひ『流に隨つて性を認得すれば喜もなく亦憂もなし』。嗚呼實に宴情大難佛法幽玄なり。解得すれば可可地なり。一箇の形段なくして歷々孤明なり。誰か其の真相を識り得んや。曰く廓然無聖。曰く不識。

此の湛然として動せざる清淨の境に入つて『動と不動と俱に自性なし』と觀じ來りて『無依の道人動を用ひ不動を用ふ』と云ふ與脱自在超宗越格の宗風を發揮し來れる我が臨濟の靈機怪腕何ぞそれ石火電光の如く然かく神速なるや。こゝ即ち學人若し眼定動せば即ち沒交涉。心を擬すれば即ち差ひ、念を動すれば即ち乖くと云ふ宗教的信念の一刹那の最深表ダイベスト、エキस्पレツション。現と云はざるべからず。

本來佛とは何ぞや。教外別傳不立文字直指人心見性成佛と觀じて眞源を鑿破し大和を磔裂する禪者の見地よりすれば、佛を烹祖を焅くの鉗鎚を乗りて超宗越格の正眼を開いて全提不起の正令を拈じ、衲僧向上の巴鼻を頌出して千聖不傳の一句を一棒一喝の下に直覺するを以て禪の本領となす。何を以てか佛を論じ祖を議するを要せん。是を以て禪の禪たる所以は心性を徹見して自己本來の面目を明らかめ、父母未生已前の自己に相見して那個の一物を掌握するに在り。これ洞山价禪師が「一物あり上、天を拄へ、下、地を拄ふ。黒きこと漆に似たり、常に動用中にあり、動用中に收め得ず」と云ふ所以のものなり。この一物たるや全宇宙に遍在して細には無間に入り大には方處を絶する所のものなり。十方邊際不可得のものなり。山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如き天地宇宙の如實の眞相其のまゝこれ那個の一物にあらずや。是の境に參じて其の妙旨を感じ不可得の一境を可得の心證上に靈覺す。これ謂ふ所の以心傳心の端的の境に非ずや。これ謂ふ所の純粹意識の體驗境にあらずや。

これ「如何なるか是れ佛」の問に對して「汝は是れ慧超」と答へて慧超の渾身其のものこれ佛なることを知らしめたる所以のものにあらずや。生佛凡聖不二の境界を直下に悟了して「夜々抱佛眠、朝々還共起、起坐鎮相隨、語默同起止、纖毫不相離、如三身影相似、欲識佛去處、祇這語聲是」と詩人の歌へる一如の眞趣を味ふものにして始めて禪に謂ふ所の佛の何物たるかを識るべき也。これを以て我が臨濟は「一般の秃比丘有つて學人に向て道ふ、佛は是れ究竟なり三大阿僧祇劫に於て修行果滿して方に始めて成道すと。爾若し佛は是れ究竟なりと道はば什麼に緣りてか八十年後拘尸羅城雙林樹の間に側臥して死し去る。佛今何くにか在る。明かに知んぬ我が生死と別ならず。爾言ふ三十二相八十種好是れ佛なりと。轉輪聖王も是れ如來なるべしや。明かに知んぬ是れ幻化なることを」と喝破し自我を離れて佛なきことを闡明して世の迷妄の輩に向て一大鐵鎚を下されたり。古人云く「如來擧身の相は世間の情に順せんが爲めなり」と。然り三十二相と云ひ八十種好と云ふも禪的見

地よりして見來れば之れ單に一種の虚名に過ぎず。空聲に外ならざるなり。「有身は覺體にあらず無相は乃ち眞形」にして此の無相の眞相なることを達觀して金剛經に所謂「一切諸相即是非相……如來不應下以具足諸相見上何以故、如來說下諸相具足即非具足」是名諸相具足」と云ふ離色離相の一境を味うて色身を具足すと云ふは即ち色身を具足するにあらざることを看取すべき也。之れ臨濟が「六種の色聲香味觸法皆是れ空相なるに達すれば此の無依の道人を繫縛すること能はず」と説いて「眞佛無形、眞法無相」と高調したる所以也。若しそれ色身に執着し祇麼に幻化上頭に模を作し様を作し來らば「設ひ求め得る者も皆是れ野狐の精魅並びにこれ眞佛にあらず」これ外道の見解なりとして大痛棒を喫せしめらるゝに至るべし。

臨濟の宗教見は愈々入て愈々深く愈々仰いで愈々高きものありて存するが如し。師は其の宗教的實驗の三昧境に立つて狐子吼して曰く、「夫れ眞の學道人の如きんば並に佛を取らざる菩薩羅漢を取らざる三界の殊勝を取らざる。迥然獨脱して物と拘らず。

乾坤倒覆すとも我更に疑はじ。十方の諸佛現前すとも一念心の喜びなく。三塗地獄頓に現するとも一念心の怖れなけん」と。嗚呼何等の甚深偉大なる見證の脱落境ぞ。臨濟は此の如々の一角に立て佛を呵し祖を罵り去りて靈照遺すことなき燈外の一燈を觀じ宇宙の大機を吞吐し來りて不盡乾坤の大風光をさながらの間に見たり。あはれ宗教上の洞觀も此の絶妙の骨髓に觸るゝに至りては其の極致に達したるものと謂ふべきなり。

抑も何を以てか能く此の如くなる。それ諸法の空相なるを見るに變ずれば即ち有變せざれば即ち無。三界唯心にして萬法は唯識なるにあらずや。かるが故に「夢幻空華何ぞ把捉を勞せん。」永嘉が「了々として見るに一物なし。亦人もなく亦佛もなし。大千沙界海中の漚。一切の賢聖は電の拂ふか如し」と云ひ「夢裡明々として六趣あり。覺めて後ち空々として大千もなし」と云ふ所のものを大觀し來りて之を宗教的實參の解脫三昧に於て識得し去らば我が臨濟の謂ふ所の迥然獨脱の一境に達し

得べきにあらずや。この一句子を道得したる無依の道人は『火に入つても焼けず、水に入つても溺れず、三塗地獄に入つても園觀に遊ぶが如し』と云ふ無碍の天地に立つを得べき也。然り一切の境界に於て『嫌○ふ○底○の○法○無○き』を覺了したるものにしてこゝに立つべき也。これ三祖が『至道無難唯嫌揀擇。但莫○憎○愛○洞然明白』と拈提したる所以也。臨濟が『備○若○し○聖○を○愛○し○凡○を○憎○ま○ば○生○死○海○裏○に○浮○沈○せん』と謂ふ所のもの其の趣旨を同うするものと云ふべし。分別取相に勞せずんば自然に得道し得べし。此の得道の一刹那。あゝこれ言ひ難く現はし難し。宗教の最も森嚴にして最も奥妙なる玄旨は此の端的刹那の得道によりて獲得すべき也。直覺の境也。超脱の地也。靈致也。獨闢也。此の神秘のインチュイション(Intuition)或はアンシャウング(Anschauung)なるものはこれ即ち宗教的靈覺の最も深き奥扉を開くの鍵とも云ふべき所のもの也。一切の理知は此の洞觀力の前には其の銳利を抛たざるべからざる也。これ臨濟が謂ふ所の『得○道○須○臆』を把定したる所以のものにして『備若

し傍家波々地に學得せんを擬せば三祇劫の中に於てすとも終に生死に歸せん。如かず無事にして叢林の中に向つて牀角頭に脚を交へて坐せんには』と警戒したる本旨なりと云はざるべからず。一切差別語路の中に逍遙するが如きものに至りては終に生涯宗教の醍醐味を味う能はざる也。是に於て吾人は我が臨濟と共に『佛に逢うては佛を殺し祖に逢うて祖を殺し羅漢に逢うては羅漢を殺し父母に逢うては父母を殺し親眷に逢うては親眷を殺し』て以て物と拘はざる透脱自在の解脫境に入らざるべからざる也。これかの基督が『地に秦平を出さんが爲めに我來れりと思ふ勿れ秦平を出さんとに非らず、刃を出さん爲めに來れり。夫れ我が來るは人を其の父に背かせ娘を其の母に背かせ嫁を其の姑に背かせんが爲めなり……我よりも父母を愛しむ者は我に協はざる者なり。我よりも子女を愛しむ者は我に協はざるものなり。十字架をとりて我に従はざる者も我に協はざるものなり。その生命を得る者は之を失ひ我が爲めに生命を失ふ者は之を得べし』と絶叫して宗教的悟道の大本領を獅子吼

したる所のものと其の揆を一にするにあらずや。凡そ宗教上の徹底したる本地に入らんと欲する者は先づ囚へられたる一切の慣習、一切の思想、一切の約束を擺脫し去りて直ちに解脱の一境に向はざるべからざる也。徹底の深さは超脱の高さを示す。大宗教家の大見地は大徹底の後に得たる解脱の風光より生れたるものならざるべからず。我が臨濟や我が基督の此の峻酷なる痛棒は仔細に觀じ來れば何處ともなく春風這裡の壺中より吹き來りて人をして破顔微笑せしむる所のものなくんばあらず。大師家の學道の人に臨むや森嚴なるが如くにして而かも其の精神や極めて鄭重親切なりと云はざるべからず。宗教上の生命を獲得して本地の風光に參せんと欲するものは、須らく此の臨濟や基督の大痛棒を味ふ所なくんばあるべからざるなり。

(七) 自證の權威

或は『その境を奪つて其の法を除かず』と談じ或は『境法俱に奪ふ』と説き或は

『境法俱に奪はず』と示し或は『全體作用の根器を歷ず』と云ふ臨濟の禪機の變幻出沒自由自在なる石火電光も嘗ならざる所のものあり。此の靈玄の妙用は宗教的大器宇を有する天才臨濟の如きにして始めて得べき也。大宇宙の靈機を直覺したる所のものにあらずんば曷んぞよく斯くの如くなるを得んや。電奔雷擊風濤怒號の間に處して能く靜に天地の靜寂を識味し觀照し得る底の古佛にして此の一味深幽の無碍境に逍遙するを得べき也。此の境に參じて詩聖の所謂『半夜月通犀角、忽地雷華象牙』と云ふ天真法爾の靈趣を掬するものこれ天地と同根たり得る底の神人と謂はざるべからず。大解脱の法味はこゝにして始めて味ふを得べきにあらずや。

臨濟は此の心を擬すれば即ち差ひ、念を動すれば即ち乖く沒交渉の活潑々地の境界に直入して『唯だ是れ根株なし。擁すれども聚らず。撥へども散せず。求著すれば即ち轉た遠く、求めざれば還て目前にあり』と云ふ。不求即獲得ともふべき自然法爾の眞諦を顯出して『一刹那の間に便ち華藏世界に入り、毘盧遮那國土に入り

解○脱○國○土○に○入○り、神○通○國○土○に○入○り、清○淨○國○土○に○入○り、法○界○に○入○り、穢○に○入○り、淨○に○入○り、凡○に○入○り、聖○に○入○り、餓○鬼○畜○生○に○入○つて處々○に討○覓○尋○するに皆○生○あり死○あること○を見○す」と云ふ幻化空花の把捉に勞せずして得失是非一時に放却し來る。嗚呼これ佛法的々相承の本旨にして一路に行じて天下に遍しと云ふ所の單提獨弄の玄機にあらずして何ぞや。臨濟の單提獨弄は滿天下無人の境を行くが如くにして自在眞正也。あゝこれ『眞正成壞に神變を翫弄し、一切の境に入つて隨處に無事也』と云ふ大用現前針割不入の新天地にあらずや。

更に臨濟は『汝が脚版を踏んで濶として佛の求むべきなく道の成すべきなく法の得べきなし』と説き去つて『外に有相の佛を求めば汝と相似かざれ、汝が本心を識らんと欲せば合に非ず亦離に非ず』と云ふ。合離正反を超越して直に本心の眞を洞觀し、『眞佛無形、眞道無體、眞法無相、三法混融して一處に和合す』と云ふ佛、道、法の三位融合觀を高調して宗教的眞理の絶對相無限相を示現す。此處眞理の渾然た

る生命の流れに棹して靈界の千波萬波を分け入りて光耀の國神秘の國に辿らしむる深奥なる經驗は人をして不盡乾坤の花の香に酔はしめ無邊風月の法の光に憧れしむる所のものありて存するにあらずや。此の觸接抱合の融會力こそ宗教の妙なれ生命の光なれ。我が臨濟が『佛と云ふは心清淨是れ也。法と云ふは心光明是れ也。道と云ふは處々無碍淨光是れ也』と提示し來り『三即一』と云ふ三位一體の宗教的神秘幽玄の眞諦を闡明するところ正にこれ宗教的生命の發露と云はざるべからず。

由來宗教的眞理の妙用は内觀的直覺の一路を辿りて宇宙の眞相に接觸するにあり。心靈上の自覺は自覺自身が絶對の證權を有するにあらずや。『聖靈自ら我等の靈と共に我等が神の子たることを證す』と聖パウルの道破したる所のもの正にこれ。『眞理は光の如く其れ自を照らし其れ自らの眞偽を證明す』と哲人スピノザの看取したる所のもの正にこれ。詮する所宗教的眞理の如是相は生命其のものの自覺の姿也靈交の味ひ也。全人格の不盡の生命は其の内在の光明に觸れて意識直接の自證に

立つや、天下何物か此の自證の權威を奪ひ得る所のものあらんや。然りこれ自證の權威也。而かも同時に之れ無限の法悦也。『其の時汝等の心喜ぶべし。其の歡喜を奪ふものあらじ』と神人基督が生命の創造を謳歌したる所以のものは此の法悦無限の心證を道破したる消息と云ふ可き也。古人が『法喜を以て妻となす。』てふ所の游泳無限の辿り心地は此の自覺的心證の地を踏めるものにして始めて味ふべき所のものなりとす。あはれ悠々なる哉法悦の境。こゝに宗教上の眞生命あり。これ臨濟が三即一の眞諦を披擲して、心清淨、心光明、處々無碍淨光の即一を唱破したる所以のもの也。此の即一の醍醐味を嘗め味うて念々心間斷せざる底のものこれげに『眞正の道人』と云ふべきにあらすや。あはれ此の境、言下に自ら回光返照して當下無事に神往すべきのところ。之を辨じて之を斷するが如きに至りては早く既に第二第三に落在するを知らすや。狂的天才ニイエチ云く『人若し少くとも一日の三分の一を欲情なく人間なく書物なくして費すことをなさざれば如何ぞよく思想家となることを

得む』と。臨濟の如きは此即一の正坐三昧に入つて實有もなく欲情もなく人間もなき如々の一境に坐して得法の一念に（一念と云ふべき念なき念）に參じたるにあらずや。獨創獨闢の見火の如く、え來らざるを得んや。水の如く流れ來らざるを得んや。これ臨濟が純一精一の眞理に悟入して『實に許多般の道理なし、用ひんと要せば便ち用ひ、用ひざれば即ち休す』と云ふ用處無蹤跡の不可得境を體得して『諸天觀喜し地神足を捧げ十方の諸佛も嘆稱せずと云ふことなし』と云ふ所也。これ眞に本來の面目を發揮したる心身脱落の境界と謂ふべき也。

カーライル其の『衣裳哲學』に於て久遠の肯定的眞理を説いて曰く、『然りこゝ此の憐むべき悲惨なる拘束せられたる賤むべき實際界、汝が今現に立てる所、汝の理想こゝに在りて他に在らず』(Yes here, in this poor, miserable, hampered, despicable

Actual, wherein thou even now standest, here or nowhere is thy Ideal.) 地上に天國を澈見し現實界に理想を觀照せんとする詩人哲人の心靈の深奥なる要求は頓て彼等

をして此の悲しむべき地上の生活裏に理想の光明に觸れしめ自由の生命を味はしむる所のものあつて存するにあらずや。詩人と哲人との此の至深の絶叫はこれ即ち人心自然の聲にして彼等一切の衆生をして此に信を得、生に活き、神秘の光を仰がしめ攝理の慈恩に泣かしむるものあるに至る。若しそれ禪者の風光よりして之を觀じ來れば『大通智勝佛十劫坐道場、佛法不現前不得成佛道』と云ふ。臨濟之が解決を下して曰く、『大通と云ふは是れ自己處々に於て其の萬法の無性無相に達するを名けて大通となす。智勝と云ふは一切處に於て疑はず一法を得ざるを名つけて智勝となす。佛と云ふは心清淨光明法界に透徹するを名づけて佛となすことを得たり。十劫坐道場と云ふは十波羅密是れ也。佛法不現前と云ふは佛本不生法本不滅、云何ぞ更に現前することあらん。不得成佛道と云ふは佛更に作佛すべからず』と。これ眞に目前照照靈々たる一一皆眞一一皆全の一味平等の法門を闡明して而かも妙峰孤頂の信源頭に立つて無二の靈光を獨露したる所のものにあらずや。臨濟の宗教意識は一切

の名句を離れて無佛無法のうちに現前しつゝありと謂ふべき也。

『彌清淨法界の中に一念心の解を生ずることなく便ち處々黑暗なる是れ出佛身血』と拈じ、『爾が一念心正に煩惱結使空の所依無きが如くなる是れ破和合僧』と説き、『因緣空、心空、法空を見て一念決定斷じて迥然として無事なる是れ焚燒像なり』と示して一切凡聖の名の上に超然として『佛を將つて究竟と爲すこと勿れ。我見るに猶廁孔の如し。菩薩羅漢、盡く是れ枷鎖人を縛する底の物也』と獅子吼したる臨濟の惡竦なる一喝、當にこれ濟家の三頓棒にして此の棒に逢うては釋迦達磨と雖も正に打殺一番狗子に與へて喫却せしめらるゝ所のものなくんばあらず。何等峻酷竦腕の大師家ぞ。而かも禪の洒脫の風光は此の峻酷竦腕の臨濟をして猶『飢ゑ來れば飯を喫し睡り來れば眼を合す』と歌はしむるに至る。何等優悠自適の境界ぞ。秋霜烈日の如き臨濟は茲に化して春風駘蕩の光と匂ひつゝあるにあらずや。

讀み去り讀み來りて吾人は既に我が臨濟の家風を見たり。詮ずる所臨濟の宗教觀

は『雲無ければ天麗らかにして普く照らし。眼中翳無ければ空裏に花無し』と云ふ一聯を以て表現すべき乎。歴々たる孤明未だ曾て缺少せず。噫臨濟の風光は『無盡』の一語に盡くと謂ふべき也。

黄檗の體驗思想

(一) 序 説

『傳心法要』は黄檗山斷際禪師の著にして裴休公美其の遺篇を拮拾して以て後世に傳ふ。分ちて二となす曰く『宛陵録』曰く『鐘陵録』。吾人は今此の『傳心法要』に現はれたる宗教觀を見んとするに當り、黄檗山斷際禪師に就いて少しく學ぶ所あらんとす。『宗高僧傳』卷の二十に云く『釋希運は閩人なり。年傳に就くに及んで郷校其の慧利を推す。乃ち愛を割いて高安の黄檗山寺に投じて出家す。成長するに迫んでや身量減_三王商_二裁一尺所額間隆起號爲_三肉珠_一。然して個儻不羈にして人軽く測るなし。乃ち方を觀て天臺に入る。偶々一僧に逢ひ偕に行く、言笑自若たり。運偷に之を窺ふに其の目時に閃き、爍爛然として人を射る。相比して行く、路に巨碛を截るに泛々として湧溢することは是の如し。笠を捐て杖に倚て止る。其の僧運を督して渡

り去る。乃ち強いて之を激發して曰く師渡らんご要せば自ら渡れ。言ひ訖りて其の僧衣を褰げ波を踏むこと平陸を履むが如くにして曾て沾濕なく、既にして他岸に到る。廻顧し招手して曰く渡り來れと。運手を戟めて呵して曰く咄自了漢早く知らば必ず汝が脛を斬らんと。其の僧歎じて曰く真大乘法器我所不_レ知縱能傷我只取_レ辱焉。少頃にして見えず。運懽悦として自失す』と。嗚呼實に希運は眞に大乘の法器也。其の見識高邁。其の機鋒峭峻。巍々堂々として英靈漢底の氣魄を有す。希運の如きは生れながらの宗教的天才と云ふべき也。吾人は更に裴休の『傳心法要』に序したる文を掲げて以て希運の人格と其の宗風の一端を見るの資となさんとす。曰く『大禪師あり。法諱は希運。洪州高安縣黃檗山鷲峰の下に住す、乃ち曹谿六祖の嫡孫、西堂百丈の法姪なり。獨り最上乘を佩て、文字の印を離れ、唯一心を傳へて更に別法なし。心體も亦空にして千緣俱に寂なり。大日輪の虚空の中に昇りて光明照耀、淨ふして纖埃なきが如し。之を證するものは新舊なく淺新なし、之を説くもの

は義解を立せず、宗主を立せず、戸牖を開かずして直下便ち是なり。念を運すれば即ち乖く。然る後本佛の爲めの故に、其の言簡、其の理直、其の道峻にして、其の行孤なり。四方の學徒山を望んで走り、相を覩て而して語る。住來の海衆常に千餘人。予會昌二年鐘陵に廉たり。山より迎へて州に至らしめ、龍興寺に憇はしめ、旦夕道を問ふ。大中二年宛陵に廉たり、復た去りて禮し、迎えて所部に至りて、開元寺に安居せしめ、旦夕法を受く。退いて之を紀するに十が一二を得たり。佩て心印と爲し敢て發揚せず。今、神に入るの精義。未來に聞せざるを恐れ、遂に之を門下の僧太舟法建に授け、舊山の廣唐寺に歸つて、長老法衆に往日常に親聞する所と同異如何と問はしむ。時に唐の大中十一年十月八日河東裴休序す』と。斯くの如くにして『傳心法要』は成れり。これ實に宗門の南鍼靈界の巨燈なり。之れより吾人は直に此の金軸に現はれたる禪師の宗教觀を見る所あらんとす。

(二) 唯是一心

師曰く『諸佛と一切衆生と唯是れ一心にして更に別法なし。此の心無始より以來曾て生せず曾て滅せず、青なら黄ならず、形なく相なく、有無に屬せず新舊を計せず、長にあらず短にあらず、大にあらず小にあらず。一切の限量名言縦跡對待を超過して當體便ち是なり』と。是れ即ち宗教哲學上に謂ふ所の宇宙の實在リアリティ在イニテ其のものの當體を指して云ふ也。此の實在たるや無限インフィニット絶アブソリュート對にして一切の有限的色相を超絶する所のものなり。此のものたるや之を文字に現はすに道なく之を説明するに道なし。之れ大乘起信論に於て『一切の法は本より以來言説の相を離れ心縁の相を離れ畢竟平等にして變異あることなし、破壊すべからず是れ一心なり』と云ふ所のものにして、是れ即ち宇宙の實在を消極的方面より説明したる所のものに過ぎず。哲人スピノザは宇宙の本體を定義して『自己に於て存じ、自己によりて解せらるる』

者。即ち其の概念が或る他の一物の概念より形作らるるを要とせざる所の者』と云セム。(Unter Substanz verstehe ich das, was in sich ist und durch sich begriffen wird; d. h. etwas, dessen Begriff nicht den Begriff eines andern Dinges nötig hat, um daraus gebildet zu werden.) 此のスピノザの自己以外の他の一切の概念を不要と見たる本體觀の實在は其の當體が即ち『自己に於て存する者』にしてこれ禪師の所謂『當體便ち是なり』と云ふ所のものにあらずや。而かも此の當體の如實の真相は哲學的理性の達し得べきものにあらず、究研的解剖によりて明め得べきものにあらず。これ斷際が『念を動すれば即ち乖く。猶ほ虚空の邊際あることなく測度すべからざるが如し』と云ふ所以のものにしてこゝ即ち神智靈覺インヂウインジョンの洞觀すべきの一境なり。此の境に達して『唯此の一心即ち是れ佛なり』と觀じ來りて『佛と衆生と更に差異なし。但是れ衆生相に著し外に求む、之を求むれば轉た失す』と云ふ悟了の本地に立て、『佛をして佛を覓めしめ、心を以て心を捉へしむる』底の宗教上の眞諦に入りて始

めて靈界の風光に接すべき也。是れ聖者パウロが『靈は靈によりて識る』と道破したる境界にして法華經に謂ふ所の『唯佛與佛』の一域なり。此の境界に入り此の玄域に立てあはれくと無限絶對の靈趣を嘆美するものにあらずんば、窮劫形を盡すとも終に得ること能はざる不可稱不可說の一境也。我が斷際禪師は此の一境に宗教的意識の最高調の威音を感じて、天地宇宙の大風光のさながらの真相を彼の心眼に靈覺し給へるなり。こゝ一切の知識を絶し情想を破し、唯靈と靈と相感應する神秘靈妙の心境『念を息め慮を忘じ』來れば『佛自ら現前する』宗教的意識の實驗は神人基督の『清淨心即是見神眼』と云ふ所のものと其の譜を同うするものと云ふべき也。

(二) 宇宙的意識

『此心即ち是佛、佛即ち是衆生也』と高唱し來りて汎神的思想に立て衆生と佛とを

一如に觀したる我が斷際の宗教見は更に彼をして『衆生となる時此心滅せず、諸物と爲るとき此の心添へず。』と道破せしめ、本自具足の靈光を此の一句に體得して充足圓現の天地に逍遙せしめたり。然り宗教上の真理の本諦は此の充足圓現の境地に入て聖光花と薫する靈界の風光を仰いで一如體玄の妙趣を把住する所にあり。これ斷際が『此の心即ち是佛更に別佛なし亦別心なし』と云ふ所以なり。更に『此心明淨なること猶虚空の一點の相貌無きが如し』と云ふ斷際の宗教意識は一句誦し來りて高朗、純潔、眞實、超邁の韻、錯落として心絃に落ち來る。千里浩蕩として織雲を見ざる聖者の心鏡は全宇宙の意識と脈々相觸るゝ所のものありて存するにあらずや。嗚呼此の一味自交の消息は例へば葉末の露の觸るれば溶くる風情のそれの如く其の湛然として澄める大なる現在の實相の懷には千珠萬珠の靈光花と散り水と流れつゝあるにあらずや。一切はこゝ神の自觀の姿なり。自現の語なり。自運の跡なり。そこに何等の妄想と執著と生滅とあらんや。柳は散りく常住の姿美しう、花は咲

きく實相の想ひ圓なり。これ斷際が「心を擧し念を動すれば即ち法體に乖く」と道破したる境界にして、宗教的眞理の如實の光景を露堂々と現前したる所のものと謂ふべきなり。

然かも宗教上の法體たるや廓然として一切の性相を離れ明暗に屬せず善惡を超越す。これ「無始より已來著相の佛なし」と云ふ所以にして謂ふ所の一切の屬アットリブ性を遠離する所のもの也。是に於てか佛と衆生とは同一法性の齊觀に入るべきものにして平等一味の醍醐味は此の佛生一如の宗教觀に於て味ふべきところのものなり。若しそれ「佛を觀て清淨光明解脫の相と作し、衆生を觀て垢濁暗昧生死の相と作す」が如きは未だ此の宗教的眞理の奥旨に徹底せざる所のもこと云はざるべからず。即心是佛の境界は一超直人の如來地にして「心上に於て心を生じ外に向つて佛を求め相に著して修行す」べき所のものにあらざる也。此の心體の眞相を悟り、一箇の無心道人を供養するはこれ豈十方の諸佛を供養する所以のものにあらずや。あゝ此の無

心道人の一心境。これ我が斷際が「如々體は内木石の如くにして動せず搖かず、外虚空の如くにして塞せず碍へず、能所なく方所なく相貌無く得失なし」と識破したる所のものにして、四句を離れ百非を絶して蹤跡の求むべきなし。これ道元の謂ふる所の「一塵を動かさず一相を破らざる」自受用三昧の境界にあらずや。此の自受用三昧の正座に入りて宇宙法界の眞風に接し本來の面目を發揮し來りて、應無所住而生其心の宗風を體して一切萬法の自性本不生滅なるを洞觀する是れ豈禪者悟了の本地にあらずや。斷際は茲に無心如々の一句子を體得したる者と謂ふべき也。

(四) 無心究竟の境地

斷際の宗教意識は真空無碍の理を觀じ、離相盡くる無きの行に參じ、觀音の大慈を味ひ、勢至の大智を識り、性相不異の維摩の淨名を體して「一心を離れず之を悟れば即ち是也」と云ふ。如是即是の一觀は學道の人自心の中に向つて悟るべき所の

ものなり。然るに人多く『心外に於て相に著し境を取る』。皆是れ道に背く所以なり。『予の神は予の深我なり』と高調して内在神の思想を提唱し來れるキャンベル一派の宗教的思想は自身のうちに向つて此の即是を求めたるところのものと謂ふべき也。由來宗教上の眞理の當體は之を外に向つて求むべきものにあらざる也。眞理の對象を外に向つて求むる所の神人懸格教は神と人とを差別的に觀たるものにして宗教的超越思想の一面は之によりて味ふことを得べしと雖も、宗教的神秘幽遠の平等一如たる神的意識は神人同格教たる内在思想によるにあらざれば其の奥妙の靈趣を味ふこと能はざる也。

『一切の相を離すれば衆生と諸佛と更に差別なし但能く無心なる便ち是究竟なり』と。此の斷際の無心究竟の境界は學道の人直下に直覺すべきの境なり。若しそれ此の一境に實參すること能はずんば累劫に修行するとも終に道を成ずる能はず、三乗の功行に拘繋せられて解脱を得ず。然り宗教上の眞理の究竟地は唯直覺によりての

み達すべき也。理性は眞理の世界に於てはたゞ地上を匍匐するに過ぎざるのみ。されど直覺は翼を張りて高く天空に翱翔す。一切の神秘なるもの幽玄なるもの奥妙なるもの崇高なるものは此の直覺の飛躍によりてのみ觀じ得べき所のものなり。宇宙の生命に肉薄する唯一無二の直道は唯此の直覺の一路あるのみ。由來生命なるものは知識の對象となるべく餘りに高き超認識的の不可思議絶對の神秘力なり。理知とは畢竟此の生命の展開流動が外部に向て放射したるものに過ぎざる也。生命それ自身に對しては理知の利刀も何等其銳鋒を施すこと能はざる也。宗教の眞髓は此の生命の神秘に觸れて掴み得たる此の生命の脈搏を人格の表現として自己生活の現實生活裡に發揮するにあり。生命の靈動の其の深さと其響きと其の色彩とを宣傳する是れ即ち謂ふ所の『傳心』あらずや。此の直指單傳の妙法は是れ禪の禪たる所以にして宗教的生命の最も深き直覺の流れにあらずや。

此の宗教的生命の大と深と其の神秘に觸れて『法を聞いて一念に便ち無心を得る』

底の英靈漢にして宗教のこと始めて俱に語るべき也。此の境に入りては法の「更に修すべく證すべきなし。實に所得なし眞實にして虚しからず。……此の法即ち心なり。心外に法無し、此の心即ち法也。法外に心無し、心自ら無心なれば亦無心なるもなし。心を將て心を無うすれば心却て有と成る。默契するのみ。」嗚呼此の默契の一境。宗教的靈妙の言語道斷心行處滅と云ふ所の境界は此の默契の一境に至りて極まる。

一、 Anschauung(觀)の地なり。Intuition(直覺)の地なり。斷際の宗教意識も此の默契の一に至りて其の頂點に達したりと謂ふべき也。

(五) 圓滿具足の自覺

大凡宗教上の實驗透脱の一境に深く參じて『自我』の内部生命の如實の眞相を觀じ來るときは、『自我』其のものやがて神也佛也この至深絶妙の聲に觸れ、そこに一切

徳相の無碍圓滿の姿を自得し得べき也。聖パウロが神人基督の大生命を直觀して、『智慧と知識の蓄積は一切基督に藏れある也。……それ神の充足せる徳は悉く形體をなして基督に住めり』と嘆美したる所以のものはこれ頓て理想的自我の自觀の姿を勘破したる至心の聲にあらずや『我は眞理也生命也』と宣じ來りて『我を見し者は神を見し也。……我と神とは一也』と云ふ基督の大自覺の聲は一切人類の理想境を實驗的得體の境界として説破したるものにあらずして何ぞ。本來神と我とは同根一體也。斷際は其の汎神的思想の眼よりして此の宗教的眞理の如是相を説いて曰く『此の心是れ本源清淨佛也。人皆是れ有り。蠢動含靈諸佛菩薩と一體にして異ならず。唯妄想分別するが爲めに種々の業果を造る。本佛上に實に一物なし。虚通寂靜にして明妙安樂なる而已。深く自ら悟入すれば直下便ち是れ圓滿具足して更に缺くる所無し』と。此の圓滿具足の境に見到せしめんが爲めの故を以て宗教的實驗の種々相は其の方法を異にして試みられつゝある也。而かも詮ずる所『縱使三祇精進

修行して諸地位を歴るも一念證する時に及んでは只元來自佛を證するのみなり。然り自佛を證するのみなり。自覺自證の外には宗教的眞理なし。『聖靈自ら我等の靈と偕に我等が神の子たるを證す』と云ふパウロの自證も『我は世の光明也我に従ふ者は暗黒の中を歩まずして生命の光を得るなり』と云ふ基督の自覺も『我は上行菩薩の權化也』との日蓮の自信も要するにこれ自佛觀、自神觀、若しくは神子觀の證見に過ぎざる也。茲に自佛觀、自神佛、若しくは神子觀と云ふこれ皆自己内部の神性若しくは佛性を自現體得して本來の面目を發揮し來れるものと云ふべき也。自證自得の境を味ひ『向上更に一物を添得せず』と云ふ明皎々の天地に立つ。あゝこれ心靈最高の孤峰頂上にあらずや。如來云く『我阿耨菩提に於て實に所得なし。若し所得あらば然燈佛は則ち我に授記を與へず』と。又云く『是の法は平等にして高下あることなし是を菩提と名く』と。哲人スピノザは哲學的見地よりして『本體即神。神即自然』の思想に立ち『神の絶對なる本性より生ずる所のものは悉く永遠にして

無限也。從て個物も亦……水遠にして無限ならざるべからず』と云ふ。此の一切を充足圓滿の永遠相の下に觀する所の見方は汎神思想の特色にして『即ち此の本源清淨心は衆生世界山河』也と道破し來る所のもの也。是に於てか一切の如々の本地は『有相にもあれ無相にもあれ徧十方界一切平等にして彼我相なし。此の本源清淨の心常に自ら圓明にして徧く照す』と云ふ所のもの也。遍照の境也。圓滿の地也。無限の境也。永遠の地也。謂ふ所の『精明の本體を觀す』と云ふは即ち此の境に參じて『直下に無心にして本體自ら現す』るの大光景にハタと觸れたる刹那の實感也。此の感刹那なりと雖も而かも永遠の刹那也。茲には一切の時間の約束を超越して見聞覺知を空却し心路を絶して端的の妙覺に入るのみ。此の意識の状態は譬へば『大日輪の虚空に昇り普ねく十方を照らして更に障礙なきが如し』此の無等々の大法輪を轉じ來るや『不即不離不住不著なれば縱横自在にして道場に非ざることなし』こゝには即ち『心即是法。法即是心』也。斷際は此の宗教的本證を見得して『依無

く住なく能なく所なく妄念を動せずんば便ち菩提を證す」と云ふ。只本心の佛を證して阿耨菩提を正覺し而かも『我阿耨菩提に於て實に所得なし』と云ふ所に至らば禪の玄旨は此の一點に於て窮まれりと云ふべき也。ああこれ實に眞實不虛の第一義諦と云ふべき也。

(六) 無 求 無 著

斷際の宗教的直觀は『唯直下に頓に自身本來是佛なることを了じて一法の得べきなく一行の修すべきなし。これは是れ無上の道也。此はこれ眞如佛也』と提唱して『念々無相念々無爲なる即ち是れ佛也……一切の佛法總て學ぶことを用ひざれ。唯無求無著を學べ。求むること無ければ即ち心生せず著すること無ければ即ち心滅せず。不生不滅即ち是れ佛也。……本一切の法なし。離は即ち是れ法也。離することを知る者は是れ佛也。但し一切煩惱を離すれば是法の得べきなし』と垂示せられたり。

たり。

思ふに宗教的至深深妙の最大要求は『無求』の一法に至りて極まれりと云ふべし。要求の深處に花咲く感應の匂ひは一切の自我を放擲して蕩然恍惚たる無意識の清淨地にして始めて觸接し得べきの妙致也。一切の執着を離れて一切の上に脱然たる『無着』の本旨は一法の得べきなく一行の修すべきなき無相無爲の默照地に入つて始めて味ひ得べきの靈趣也。此の無求無著の本道に立て全宇宙の大景を面のあたりさながらの如く顔々相接して觀たる斷際の宗教意識の奥底には思ふに不可測神秘の神潭の涵ゆるものありて存せしが如し。

意識水の如く冴えて信念の空ほがらかに不盡の乾坤我が意識の全野を領じて無邊の風月我が胸奥に不斷の一燈を點す。觀ずれば天地は我が心鏡に溶け入つて物と我と一如玄々の境地を之くが如し。莊子の所謂『哈焉似喪其耦』と云ふは此の心境一如の恍惚境に立てる意識にはあらざるか。これ『吾我を喪ふ』と云ふべき所。無我

の地也。エクスタシーの地也。平等の此の一境は古聖の所謂『無我法の中に真我あり』と云ふ所のものにしてヘブライ詩人の『汝の光の中に光を見る』と云ふ所のもの也。英國詩人ウォーズワースはこゝに『大自然の生命を見たり』と歌ひ更に『大自然の中に人生の幽韻悲調を聞けり』と云ふ『我が詩は即自然其もの也』と高調したる詩聖ゲエテは此の大自然の精神を看破して『自然は活ける神の衣裳也』と云ふ。然り自然を見たるは即ち神を見たる也。自然に觸れたるは即ち神の裳にそと觸れたる也。

汎神的此の一如觀に立てる斷際は『法身即虚空。虚空即法身』と示し『此の靈覺の性は無始より已來虚空と壽を同うす。未だ曾て生せず未だ曾て滅せず未だ曾て有ならず未だ曾て無ならず未だ曾て穢ならず未だ曾て淨ならず未だ曾て喧ならず未だ曾て寂ならず未だ曾て少ならず未だ曾て老いす。方所なく内外なく數量なく形相なく色象なく音聲なし。覓むべからず。求むべからず。智慧を以て識るべからず。言

語を以て取るべからず。境物を以て會すべからず。功用を以て到るべからず。諸佛菩薩と一切蠢動含靈と同じくこれ大涅槃の性也』と説いて『性は即ち是れ心。心は即ちこれ佛。佛は即ち是れ法也』と云ふ。性、心、佛、法の圓融無碍を論ず。こゝにも斷際の宗教的靈覺の一面を見るべきにあらずや。

(七) 念 即 眞

『華嚴經』の思想によれば念とは即ち信念なり。此の一念に眞あり妄あり。若し凡夫根を以て塵に對すれば所起の念、念々生滅す。是れ妄念なり。若し根塵を離すれば眞淨明妙虛徹靈通の念あり。即ち是れ如來正智の念也。此の正智の念は生にあらず滅にあらず不常不斷一刹那を促して短にあらず無量劫に延びて長にあらず。……一念普く無量劫を觀すと云ふ。あゝ此の『念』なるものこれ實に不可思議絶妙のものにあらずや。現代の心理學が謂ふ所の『潜在意識』なるものか。將たまたメエテ

ルリンクの所謂覺醒したる靈魂の神秘淨に對する直覺の力か。あらず。此の如來正智の念は眞浮明妙虛徹靈通の念にして念即眞也。此の一念に即して宇宙人生の眞そのもの現實當面の眞そのものを體得し來るとき天地洞然として明白なり。斷際禪師は此の秘義を説破して曰く「一○念○も○眞○を○離○る○れ○ば○即○ち○妄○想○と○な○る」と。これ眞に即したる一念の秘義を語る所のものにあらずや。「大乘起信論」に曰く「一切の諸法は唯妄念に依て差別あり。若し心念を離るれが即ち一切境界の相なし」と。本來心靈の本性宇宙の體性そのものは平等にして不生滅なり。然るに現象界の諸法は差別あり生滅あり。これ抑も何が故ぞ。これ全く妄念即ち偏計妄執の生む所のものにあらずや。若しそれ妄念を離脱して念なきの念に住すれば宇宙の萬象は其のあるが儘にして眞そのものにあらずや。萬有皆美の靜觀に立て此の諸法の流れを見れば一一眞にして一一聖也。一法一眞、一色一聖、一塵一美、一空一妙也。既に此の心境に入らんか。「心を以て更に心を求べからず。佛を以て更に佛を求むべからず。法を以て

更に法を求むべからず。」ここ無求即得の境也。求むること無うして即ち得る也。求むること無うして即ち得るは求むることの最も高きもの最も深きもの也。最深最高の要求なるが故に無求の本道に入りて無我の境地に立てる也。こゝ平等一味、靈妙の靜園にして「直○下○に○無○心○に○し○て○默○契○す」神通靈覺の月光ほのかに一切を照らすの所。此の靈光自覺の手もて掬ば、消ぬべき姿して而かも人間心靈の奥に不盡の春をぞ吹き送る。あはれ奇すしきは靈界の消息にもある哉。「心○を○擬○す○れ○ば○即○ち○差○ふ」此の靈界の消息は以心傳心の玄界にして、こゝ心靈の火皿ほまに點せられたる一燈は感應の光幽かに「默」の一角を透ふして永遠に靈より靈に流るるあるのみ。

以心傳心の正見に座して靈界の風光を觀す。實相の性珠燦然として星の如く照り、寂靜の大海無限の煙波を罩めて水天鬚髮の間に横はる。神の現前と謂ふべきか。大靈の内住と謂ふべきか。自我の高擧か。意識の光耀か。事に觸れ物に接して此の内
部生命の實感に立つ。而かも常に事を脱し物を離れて意識惺々廓然として無聖の不

識に參す。これ斷際が『慎んで外に向て境を遂ふこと勿れ』と言ふ所以のものにあらずや。哲人スピノザ此の意識に參じて宇宙最高の愛を感じ、理觀の冷靜なる大思索の根調に靜かに流るゝ生命の脈搏に觸れ、『神來的觀得』の中に一切の萬有を葆有したり。茲に一切の萬有は彼の心眼には一個の調和せる渾然たる圖象の姿として現前したる也。深奥なる内觀の響きは音なうして茲に無限の法鼓を撃ちつゝあるにあらずや。蹙々たる其の調べ何ぞそれ幽なるや。『神に酔ふたる人』と謠はれたる哲人スピノザの觀得せる此の靈妙なる精神の交通はこれ頓て禪的悟入の面目にして精神的統一の生活にあらずや。彼は日常茶飯の事象中に於て神の偉大を見、隨處神の自覺の風光にあらずや。斷際ハシの直觀的宗教意識は如是一味の虛靈寂靜なる法界に入つて『本源清淨佛の上には更に一物を著けず』と云ふ。例へば蒼々たる碧落の如し。無量無限の美を以て莊嚴すと雖も而かも其の美の住する所なきがごとし。古のへブ

ライの詩聖歌ふて曰く『もろもろの天の神の榮光を顯はし、窮蒼は其の聖手の技巧を示す』と。あゝこの無限の榮光は天間最大最高の榮光にあらずや。あゝ此の無技巧の技巧は至純至妙の技巧にあらずや。純也妙也かるが故に自然也。大也高也かるが故に神聖也。これ本來人間心靈の象徴シンボルにあらずして何ぞ。本來自己本有の『佛性は虚空に同じ。無量の功德智慧を以て莊嚴すと雖も終に住すること能はざる』所のもの也。此の無住の所豈これ永遠の常住の世界にあらずや。『金剛經』に『應無所住而生其心』と云ふ所のもの、『馬太傳』に『狐は穴あり天空の鳥は巢ありされど人の子は枕する所なし』と云ふ所のもの、皆これ即ち無住にして常住の世界に立てる靈界の勇者にして始めて到り得きの淨嚴土にあらずや。下根の凡夫にして此の聖地に入る能はざるは但本性に迷ふて轉するが故に其の本來の面目を見ること能はざるに因るのみ。心眼一たび開け來らば法々塵々是れ光明是れ生命。是れ佛是れ神。既に心地の法門に入ては一切皆な妙ならずと云ふことなし。謂ふ所の心地の法門とは

『萬法皆な此の心によりて建立する』所の世界也。此の世界に於ては「境に遇へば即ち有。境なければ即ち無」。『淨性の上に於て轉じて境の解をなすべからず。言ふ所の定慧鑑用歷々寂々惺々たり。』知識上の問題はこゝ既に其の限界線を越えて實感親證の本來の面目を露呈し來る。『但だ一切の法に於て有無の見を作さざる即ち見法』と云ふ所のもの即ち是れ。此の『悉能摧破有無見』と云ふ龍樹大士の大見識を提げ來りて一刀兩斷に葛藤を破し去る所。斷際の見法眼の銳角にして痛切なるを感せせんばあらず。

(八) 唯だ此の一事

『血脉論』に云く『三界の興起同じく一心に歸す前佛後佛以心傳心不立文字』と。嗚呼これ禪の極致を唱破したる語にあらずや。達磨大師中國に到りて『唯一心を説き唯一法を傳ふ』。蓋し一心の外に説くべきものなく一法の外に傳ふべきものなきを

以てなり。それ宗教的意識の高調に達して人々具足の心靈一たび宇宙的大生命に觸接し來るや、神秘にして幽玄なる實在の眞實相は直覺の意識内に映じ來りて生命そのものは人格の内容として生動し活躍す。此の深奥なる意識直接の經驗に入りて實在其物の當體を把捉し來りし靈界の勇者の獅子吼何ぞそれ其の響きの高きや。達磨一たび此の一大心要を發明し既に諸法に於て通達を得眞理の宣傳者生命の傳燈者として起つ。『佛を以て佛を傳へて餘佛を説かず。法を以て法を傳へて餘法を説かず。』何等の深邃。何等の醇一。『以佛傳佛』。『以法傳法』。あゝこれ一切の宗教的經驗を實感體得したる者の眞理傳燈の態度に非ずや。佛の境界に參じたる者にあらずんば佛を説く能はず法を體證したる者にあらずんば法は説く能はざるなり。實參實證の本地に立てる者にして佛を説き法を説く斯くの如くにして眞理の光明は始めて發揮さるべきにあらずや。達磨の説佛説法はやがて達磨の實參實證也。血脉也骨肉也。生命の飛躍也。斷際今此の宗教的眞理の血肉化したる光明を發揮し來りて概念化され

易き宗教的眞理を人格の脈搏中に見る。此に斷際の一見地ありと謂はざるべからず。由來『法は即ち不可説の法。佛は既ち不可取の佛也』。此の『本源清淨の心』を披瀝し來りて不可取の佛を把捉し不可説の法を宣示す。これ本來宗教家の眞面目にあらずや。無聲の聲なり。無相の相なり。此の無聲の聲を聴取し無相の相を看取し得る底のものにして斷際の此の活見地に見到し得べき也。

然り宗教上の本地の風光は『唯だ此の一事「實」にして餘の二は即ち「眞」にあらず』と云ふ大乘的態度に立て一切を脚下に踏まへて堂々として眞理を光闡すべき也。深く無際に入つて一切を成就したる解脱三昧の勇者は唯だ此の『一事』を提げ來りて一切を解決すべきにあらずや。しかも此の『一事』これ實に第一希有難解の妙法にして唯だ佛と佛とのみ乃ちよく之を究盡し給ふ所のものなり。今斷際は此の『實』に入りて此の『眞』を體し無相の本心を證し、『一切の諸法唯だ是れ一心也』と云ふ境界を自己の人格裏に圓現す。こゝにして法そのもの、光を見るべき也。

基督教の禪的思想

基督の禪機

(一) 序説——內的經驗の象徵化

禪は佛教特有のものにあらざる也。あらゆる宗教特に高等なる宗教意識の發展の歴史中に於て、吾人は常に禪的思想の潮流を見ざるなし。蓋しこれ禪は宗教的意識の自然の流露なるを以て也。吾人は今新約聖書を繙き、基督の絶大なる宗教意識の流れに掉して彼が靈的光耀の閃きの中に於て所謂彼の禪機なるものが如何に靈動し活動しつゝあるかを見んと欲するもの也。

先づ基督の大悟正覺の第一境とも云ふべきは彼が受洗當時の光景中に於て鮮かに現はれたるを看取せずんばあらず。彼が洗者ヨハネよりバプテスマを領し水より上

れる時『天忽ちこれが爲めに開け神の靈の鳩の如く降りて其の上に来るを見る』と云ひ又『天より聲ありて此は我心に適ふ我愛子也』と云ふ聲を聞きたりと云ふ。此の一段の光景は宗教的の深奥なる内的経験を繪畫的象徴的に描寫したるものにあらずして何ぞ。これ彼の釋迦が佛陀迦耶の畢波羅樹の金剛座に結跏趺座して三界の因果を洞觀し曉天の明星を見て無上正覺の心地に達したると殆んど其の致を一にするものありて存するにあらずや。唯其の釋迦に在りては多年難行し苦行して思索修養内觀洞察の結果初めて此の一境に至れりと謂ふべく我が基督に於ては何等の難行苦行を経ずして直往直來獨立卓然天露堂々として此の靈境に上れるものゝ如し。此は釋迦の冥想的なるに反し基督の直覺的なるに由ならずんばあらず。而かも此の兩者の宗教的内部心理の狀態に於て禪的思想の發露したるものたるは争ふべからざるが如し。由來宗教意識の内部深奥の經驗に至りては、其内部の實驗を如實に表現せんは實に不可能のことたるを免れず。禪者が禪の極致は『不立文字教外別傳』と云ふ所

以のもの正に此の端的の妙致を語るものと云ふべし。基督の受洗當時の内部經驗は此等象徴的文字を以て之を藝術的に描寫する以上には何等の言語を以ても之を言ひ現すこと能はざりしなるべし。これ描寫し能はざる靈的經驗を描寫せんには、象徴的文字を借りて之を表はす外他に其の途なきを以て也。

(二) 曠野の基督

古人曰く『玄は析すべきか。析すべきは玄にあらざる也。雖然析するにあらずんば即ち人、玄の析すべからざるを知るなし』と。然り宗教的眞理は其の幽玄の妙趣に至りては理解分析すべきにあらずして直に默契すべき底のもの也。殊に基督の心靈に實驗せられたる宗教的靈感の高調に至りてはこは描寫以上也文字以上也。理性の利刀を以てさへ分析すべきものにあらざる也。文字以上描寫以上の靈機靈能の發揮。吾人は之を稱して基督の禪機の流露せるものと謂はんとす。

基督の禪機の露は更に曠野に於ける活劇に於て之を見る。「曠野の基督！」何等禪的好箇の活公案ぞ。寂々寥々たる一大曠野。無限の蒼天は彼の頭上にあり、無限の寂寥は彼の周囲を占領す。此の間に冥想靜座せる基督の聖姿。何ぞそれ森嚴にして崇高なる。永遠の時劫の流れは幽かに其の脈搏を奏でつゝあるのみ。今や基督は大禪定の三昧境に入りて天地と同化し神靈と融化しつゝあるにあらずや。此の沈黙の一境は沈黙それ自らが無聲の大音聲を響かして大天地を震撼せしめつゝあるにあらずや。茲に基督が三たび悪魔の誘惑に對して三たび勝利の凱歌を奏したる此の一脈の禪機は思ふに乾坤に獨歩する底のものありて存ずるにあらずや。「サタンよ退け」の一大獅子吼は古往今來人間の發したる言語のうち最も深刻にして最も森嚴なる禪的眞骨頭を曝露したるものと云ふべし。茲に内心不朽の眞理は絶大至強の力として顯現せられたるにあらずや。釋迦の冥想は畢竟解脱の大眞理となりて現はれたる。基督のそれは生命それ自らとして輝けり。これ釋尊が理智の上に立て人生を解

釋せんと試みたるに反して、基督の直観は人生を理智の一面に於て解釋せんと試みたるものにあらずして、人生を活ける人生其のものとして心靈の内部的本質を直接端的に如實に達觀したるによらずんばあらず。

釋迦の畢波羅樹下の正覺は「我一切種智を得ずんば此の座を立たじ」との誓願によりて成就せられたるもの也。一切種智の獲得と云ふ。これ即ち人生を知的方面に於て解釋せんとするものにあらずして何ぞ。基督の曠野に於ける禪定に於ては殆んど知的方面の光芒を見ざるが如し。寧ろ情意的方面殊に其の意的方面に於て頗る其の高調に達したるを見る。否基督の當時に於ける意志は神其のものゝ意志と同化融合して致一の境を辿りつゝありしものゝ如し。從て其の現はれ來るや「力」として意志の顯現として發露す。これ基督の禪機の最も絶大なる權威を有する所以にあらずや。

(三) 野の百合花

基督の禪機は『聖書』の到る所に於て之を見ることを得べし。『碧巖録』や『無門關』や『臨濟録』のみを以て禪的公案の蒐集せられたるものなりと速解するは誤也。『聖書』は『碧巖録』を提唱すると云ふ同じ意味に於て提唱し得べきもの也。禪の文字に囚へられたる野狐禪の徒や世の所謂滔々たる者流は未だ『聖書』の禪的趣味を解することを知らずして單に語録や禪書を以て無上の禪的聖典なりと誤解す。悲しむべき也。瓦礫も亦光を生ずと見る禪者の風光より觀じ來れば一切の萬有は無象の文字にあらずや。有意の聖典にあらずや。何ぞ一宗一派の聖典や語録をのみ重んじて、他の光明あることを知らざるの甚だしき。

基督の所謂『戸を閉ぢよ』と云ひ『爾の中の光を見よ』と云ひ更に『天空の鳥を見よ……野の百合花は如何にして成長するかを思へ勞めず紡がざる也。我爾等に

告げんソロモンの榮華の極みの時だにも其の装ひ此の花の一つに及ざりき』と云ふ。此等の風光中に現はれたる基督の天曉不露の眞理は宗教的最深最高の妙旨を露堂々として現前し來れるものにあらずや。此等靈活の文字は既に文字にあらずして靈動せる宇宙の禪機其のものにあらずして何ぞ。此の禪機は基督の全人格を通じて、『聖書』の全面に流れつゝあり。

然り宇宙の玄妙なる靈機若しくは禪機は野花一輪のうちにも鮮かに現はれつゝある也。文豪カーライルが基督の此の『野の百合花』の一句を以て世界文學の最美絶頂と嘆美せしも所以なきにあらず。嘗て聞く故峨山禪師は此の基督の一句を以て『禪味の奥妙は此の一句に盡きたり』と言へりと。詩人テニソンが破壁の幽花一株を探りて

“Hold you here, root and all, in my hand,
Little flower—but if I could understand,

What you are, root and all, and all in all,
I should know what God and man is."

と歌へるもの實に此の邊の消息を語るものと云ふべし。幽花一輪を知るは聽て神を知り人間を知る也。神の無限の光を愛と生命とは幽花一輪のうちに奇しくも秘められつゝあるにあらずや。禪者の『靈照無遺』と云ひ『自照靈然』と云ふもの、此の天地の大風光を謳ひしものに非ずして何ぞ。

(四) 基督の棒喝

基督は天空の飛禽の悠々たる境界に禪機の閃めくを見、野花一輪の微笑に靈光のこぼるゝを見たるのみならずして、人性の本質に此の内部の光明を認あ此光明を發揮し此の靈能を現前せしむるを以て自家本來の大使命と觀じ給へる也。彼が人間本來の此の靈光を發揮せしめんが爲めに如何に峭峻深辣の同情(然り最深最嚴の同情)

を有し給ひしかは吾人が福音書の所々に見る所也。是辣腕なる師家たる古禪者の學人に對して棒喝を與ふる丁寧親切の手段と相似たるものなからずや。『弟子の一人言ひけるは主よ先づ行きて父を葬ることを我に容せ。イエス曰けるは我に従へ死たる者に其の死にし者を葬らせよ』と云ふ一段の問答は之を皮相上よりして見れば何等の不人情ぞ。人倫を没却し人道を破棄したる沒曉漢の言のその如し。然かも其の眞意に立ち入りて其の源泉に汲まんか。熱烈火の如き同情は滾々として此の一句の底より流れ出づるにあらずや。人間の本性の中に隠れたる無限の神性を認めて之を現前せしめんと苦心し給ふ基督の活ける靈腕、何ぞそれ深辣にして森嚴なる。吾人は茲に不人情の人情を見、深刻なる同情を見、古禪者の赤裸々の風骨を見る。

更に『地に泰平を出さん爲めに我來れりと思ふ勿れ。泰平を出さん爲めにあらず乃を出さんために來れり。夫れ我が來るは人をして其父に背かせ女を其の母に背かせ嫁を其姑に背かせんが爲めなり』と云ひ『我よりも父母を愛しむ者は我に協はざる